

明治大學講義錄合本

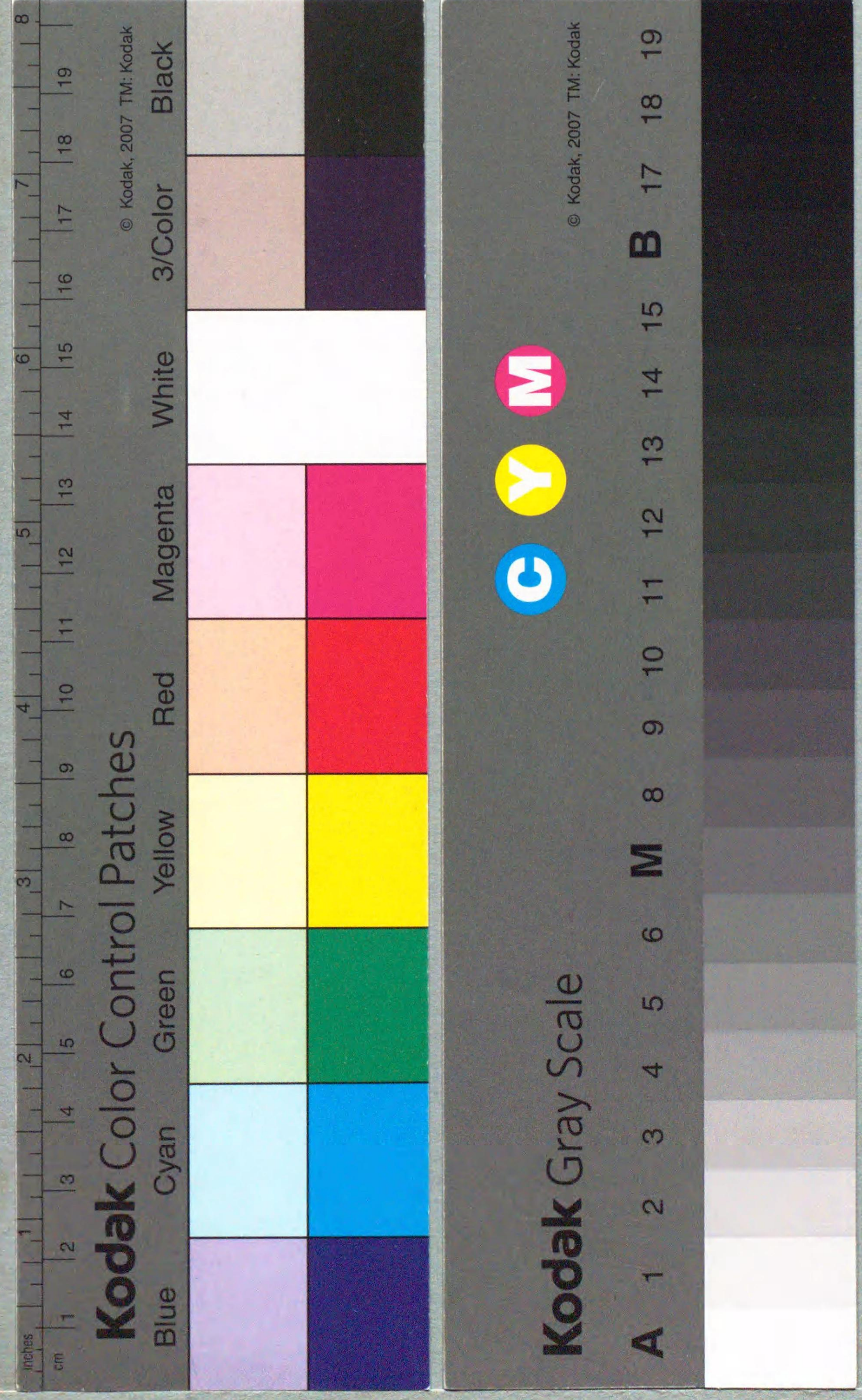
會計論

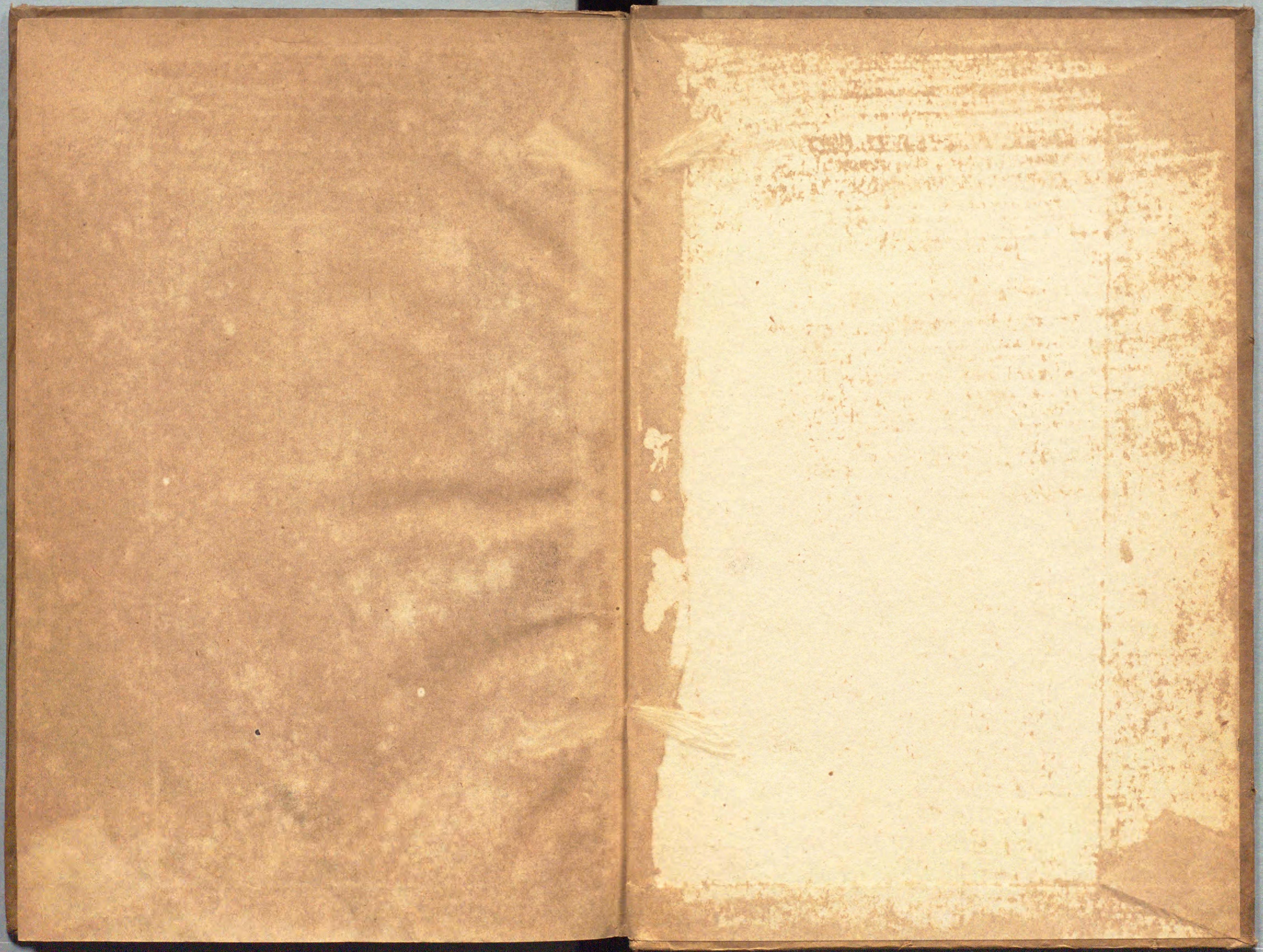
法學士工藤重義講述

東京 巖松堂書店發賣

平本第八五八四號

圖書室
備第 37 册
第 11 類
第 6 號





會計檢查學
法官院

工藤重義君講述



會計論

完

明治大學出版部發行

L3.72

熊本地方裁判所圖書
備第379號
第11類第6號

< 3.72
8312

920

Handwritten marks or numbers on the right page.

會計論目次

第一編 會計及會計法	丁數
第一章 總論	一
第一節 會計ノ意義	一
第二節 會計論	四
第三節 我國ノ會計法	九
第二章 會計上ノ機關及期間	一三
第一節 會計上ノ機關	一四
第二節 會計上ノ期間	一七
第三章 本講義ノ順序	二一
第二編 豫算論	二三

目次

一



會計論目次

第一編 會計及會計法	一
第一章 總論	一
第一節 會計ノ意義	一
第二節 會計論	四
第三節 我國ノ會計法	九
第二章 會計上ノ機關及期間	一三
第一節 會計上ノ機關	一四
第二節 會計上ノ期間	一七
第三章 本講義ノ順序	二一
第二編 豫算論	二三

目次

一



第一章 總論……………二二

第一節 豫算ノ意義性質……………二二

第二節 豫算ノ類別……………二八

第三節 豫算ノ分科……………三二

第二章 豫算ノ準備……………三七

第一節 豫算準備ノ原則……………三七

第二節 豫算ノ編製手續……………四三

第三節 豫算ノ提出……………四七

第三章 豫算ノ議定及成立……………五三

第一節 豫算ノ議定ノ範圍……………五三

第二節 豫算議定ノ手續……………五八

第三節 豫算ノ成立及不成立……………五九

第三編 現計論……………六〇

第一章 收入支出ノ原則……………六一

第二章 收支ノ命令……………六五

第一節 徵收……………六五

第二節 支出……………七〇

第三節 豫備金ノ支出……………八五

第三章 收支ノ執行……………九一

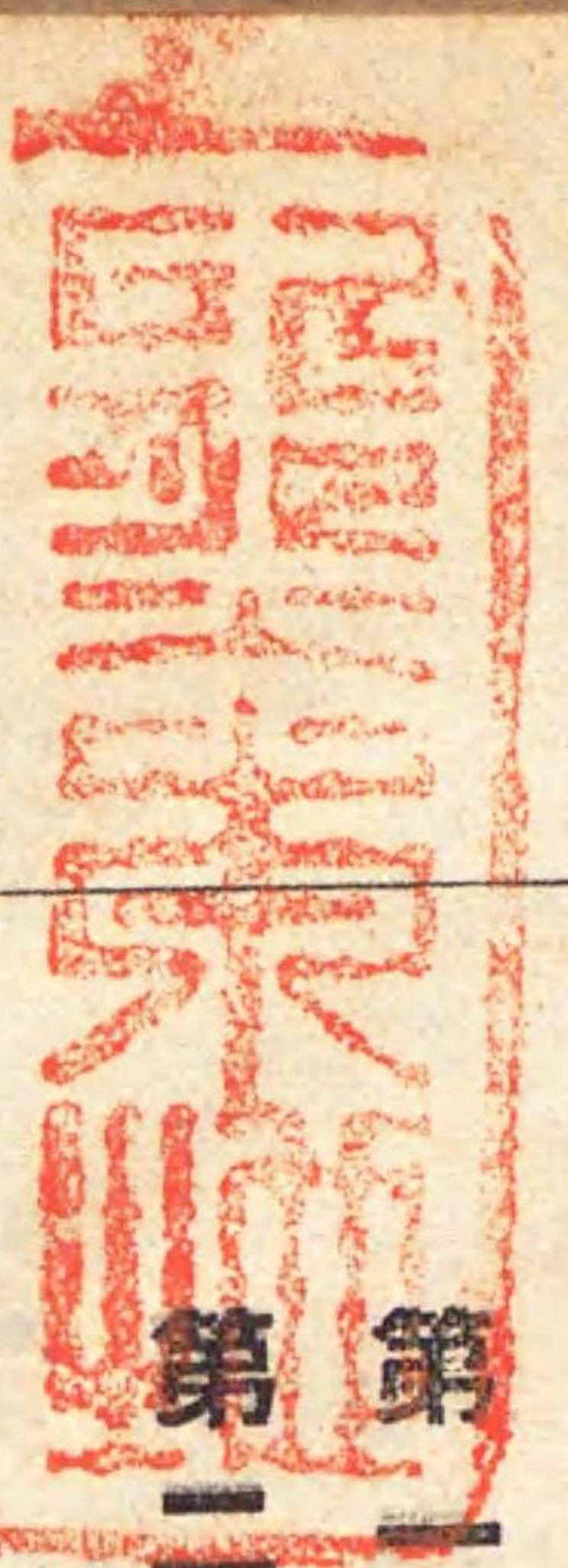
第一節 國庫……………九一

第二節 收入……………九九

第三節 仕拂……………一〇六

第四節 出納官吏ノ責任……………一一七

第四章 年度間ノ關係……………一三二



會計論目次

畢

第一節	年度所屬	一三三
第二節	整理期間	一三九
第三節	年度間ノ讓渡	一四四
第四編	特別會計論	一五一
第一章	總論	一五一
第二章	特別會計ノ豫算	一六五
第三章	特別會計ノ現計	一七七
第五編	會計監督論	一八九
第一章	監督機關	一八九
第二章	會計ノ檢查	一九三

最高裁判所図書館

會計論

法學士 工藤重義君講述



第一編 會計及會計法

第一章 總論

第一節 會計ノ意義

「會計」ナル語ハ我國ニ於テ古來久シク用ヒラレタル語ナレトモ、我國現行ノ法律ヨリ云フトキハ一定シタル意味ニ用ヒラレタリト云フヘカラス。即チ帝國憲法第六章ハ「會計」ト題シテ財政上重要ナル規定ヲ爲シタルカ、其ノ規定ヲ通覽スレハ「豫算決算」ニ關スル形式的事項ヲ包含スルノミナラス、租稅ノ賦課稅率ノ變更其他手數料國債等ニ關スル實質的ノ規定ヲ包含スルヲ見ル。是ヲ以テ此ノ場合ニ於ケル「會計」ナル文字ハ「國家財政」ノ意味ニ用ヒラレ、憲法ノ規定スル所ハ其ノ實質的事項ナルト形式的事項ナルトヲ問ハス、苟クモ國家財政上重大ナル事項ニシテ國

家ノ根本法ヲ以テ定メ永久的存在ヲ要スル原則ハ則チ茲ニ包含セララル、モノナ
リト解セサルヘカラス。

然ルニ憲法ト同時ニ公布セラレタル會計法並ニ會計規則等ヲ見ルトキハ決シ
テ前述セル實質形式ノ兩方面ニ關スル規定ヲ網羅セルモノニアラスシテ一般ニ
形式的事項ニ關スル規定ニ限界セラル、ヲ知ルヘシ。即チ歲入ハ如何ナルモノヲ
以テスルヲ可トスルカ各種租稅ノ利害得失如何等ノ問ニ答フル法規ハ全然之ヲ
缺キ、實質ニ亘ル事項ハ既ニ定マレリトシテ此ノ歲入歲出ヲ適合セシメ整理スル
ニハ如何ナル方法ニ依ルヘキカ、實際上收入支出ヲナスニハ如何ナル方法ニ依ル
ヲ以テ一國財政ノ正確ヲ期シ得ヘキヤノ問ニ答フル法規ノミノ存在スルヲ見ル
ナリ。即チ此ノ場合ニ於ケル會計ノ意義ハ財政上實質ニ關スル方面ヲ離レ之ヲ管
理スル方法等專ラ形式的事項ニ限ラル、ナリ。而シテ其ノ範圍タルヤ豫算ノ編製
ヨリ始マリテ決算ノ終了ニ至ルマテノ間ノ事ヲ包含スルモノトス。

然ルニ他ノ點ヨリ觀察スルトキハ會計ナル文字ハ更ニ狹義ニ解釋スルヲ要ス
ルヲ見ルナリ。例之帝國憲法第七十二條ニハ會計検査院ナル文字アリ。此ノ場合ニ
於ケル會計ナル文字ハ豫算ノ施行ヲ意味スルモノト解スルヲ妥當トス。蓋シ會計

検査ノコトタルヤ勿論豫算ニ違反セルコトナキヤ否ヤヲ検査スルモノニシテ、單
ニ數字計算上ノ確否ヲ検査スルノミニ止マラサルヤ勿論ナリト雖モ、其ノ目的ハ
全ク豫算施行ノ結果カ正シキヤ否ヤヲ知ルニ在リ。其ノ豫算ト對照スルハ豫算カ
豫算トシテ當ヲ得タルカ又ハ當ヲ得サルカヲ見ルニアラスシテ、豫算施行ノ結果
カ行政官トシテ羈束セラル、豫算ニ違フコトナキヤ否ヤヲ知ルニ在ルナリ。是レ
我國ノ如ク會計検査院ノ職司カ所謂事前検査主義ヲ採ラスシテ事後検査主義ヲ
採ル制度ノ下ニ於テ當然ノ結果ナリト云ハサルヲ得ス。

以上述フル所ヲ約言スレハ會計ナル文字ハ財政學上ノ用語ナレトモ我國ニ於
テハ一定ノ用例ナク、或ハ廣ク、財政ト同意義ニ用ヒラレ或ハ財政ノ形式的方面ヲ
ノミ指シ或ハ更ニ狹ク解釋シテ豫算ノ施行即チ現計、決算ヲノミ指スコトアリ。而
シテ此ノ三箇ノ用例ニ付テ何レカ適當ナリヤハ人々ニ依リテ其ノ見ル所ヲ異ニ
スヘケレトモ、最廣義ニ解スルカ如キハ其必要ナキモノナリ。何トナレハ之ニ付テ
ハ既ニ財政ナル文字アリ廣ク使用セラル、ヲ以テ更ニ異ナレル語ヲ以テ之ヲ顯
ハスノ必要ナカルヘケレハナリ。然リ而シテ吾人ハ本講義ニ於テハ會計ヲ以テ第
二ノ意義ニ解釋シ、財政ノ形式的方面ヲ指スモノナリトシテ講義ノ歩武ヲ進ムヘ

西洋諸國ニ於テモ財政ノ形式的方面ヲ指ス用語ニ付テハ必ラスシモ一定セス。例之獨逸ニテモ或ハ *Staatshaushalt* ト云ハ *Finanzordnung* ト云ハ *Finanzverwaltung* ト云フカ如シ學者ニ依リテハ此意味ヲ表ハスニ單語ヲ以テセス三箇ノ文字ヲ連結シテ *Etat-Kassen-Rechnung* (豫算、金庫、決算) ト云フ者アリ。又佛國ニテハ *Comptabilité Publique* ナル語アリテ以上ノ意義ニ用ヒラルレトモ、此ノ語トテモ學者ニ依リテハ「豫算ノ施行」若ハ現計ノ意味ニ用フルコトナシトセス。

第二節 會計論

第一 會計論ノ意義

上述ノ如ク會計ニハ廣狹種々ノ意義アルモ、會計ヲ以テ主トシテ財政ノ形式的方面ヲ指スモノナリトセハ、會計論ノ定義モ亦從テ明カナルヘシ。即チ會計論ハ國家財政ノ形式的方面ニ付其ノ整理方法ノ原理並ニ利害得失ヲ講究スルニ在リトス。而シテ斯克定義スルトキハ極メテ明了ナルモノ、如キモ實際上ニ付テ觀察スルトキハ多少ノ疑問ヲ生スヘシ。即チ例之或種ノ租稅ノ徵收方法ニ付テ現金ノ徵

收ニ依ルヲ可トスルヤ印紙ノ貼付ニ依ルヲ可トスルヤハ租稅制度上ニ於ル形式的方面ナリトモ云フコトヲ得ヘク、從テ會計論ノ範圍内ニ屬セシムヘキヤノ疑問ヲ生スヘキナリ。蓋シ「形式」ト云フトキハ一見其意義明了ナルモノ、如キモ、實際上其ノ範圍ハ必ラスシモ確定セルモノニアラス。或ハ「形式」ト云フヲ得ルカ如クニシテ、其實、實質ニ關係スルコト切ニ寧ロ實質的方面トシテ論スルヲ以テ適當ナリトスルモノアリ。即チ茲ニ擧ケタル事柄ノ如キハ即チ之ニ相當スル場合ト見ルコトヲ得ヘシ。而シテ學者ハ皆之ニ從ヒ此クノ如キハ會計論ノ範圍外ニオケリ。之ヲ要スルニ茲ニ所謂「形式的方面」ト云ヘルハ成ルヘク嚴正ニ之ヲ解釋スルヲ以テ妥當ナリトス。

第二 財政學ト會計論

會計論ハ財政學ノ一分科ニ屬ス、何トナレハ財政學ハ團體經濟トシテ國家又ハ地方團體ヲ一單位ト見ナシ之ニ關スル原理ト整理ヲ爲スヘキ方策トヲ講究スルモノニシテ、會計論モ亦畢竟財政ノ整理ヲ致スヘキ形式的方面ノ原理ト方法トヲ講スルモノニ外ナラサレハナリ。然ルニ學者或ハ會計論ノ全部若クハ一部ヲ以テ行政法即チ國法學ニ屬スト爲ス者ナキニアラス。思フニ財政學ノ發達タルヤ近代

ノコトニシテ、以前ニ於テハ財政學ノ全部ヲ以テ行政學中ノ一分科トシタルコトアリ。然ラハ會計論ヲ以テ行政法ニ屬ストスルモ其ノ由テ來ル所アルヲ知ルヘシ。即チ現今學者或ハ財政學ヲ分チテ歲入論、歲出論、國債論トナシ會計ニ關スル事項ヲ論セサルハ會計論ヲ以テ行政法即チ國法學ニ屬スト爲ス者ナリ。又學者ニ依リテ財政學中會計ニ關シテ單ニ豫算ノ事項ニ限リ其ノ他ニ及ハサルハ其ノ他ノ事項ヲ以テ行政法ノ範圍ニ入ル、モノナリ。又獨逸ノヘツケル氏ノ如ク其ノ著書ヲ分チテ豫算論、財務行政論、財政監督論トナシ殊ニ「行政」ナル文字ヲ用ヒタルカ如キモ多少現計ヲ以テ行政法ノ一部トナスノ臭味ナシトセサルナリ。

然リト雖モ吾人ヲ以テ見レハ會計論ハ財政學ニ屬スルヲ以テ正當ナリトス。會計ノ理論ヲ講究スルニ當リ其ノ對象トスル所カ會計法規ニアルヲ以テ之ヲ行政法ニ屬セシムヘシト云フハ、恰モ租稅ニ關スル法規存在スルカ故ニ租稅論ハ獨リ行政法ニ於テノミ講究スヘシト云フニ同シク、其ノ誤マレルヤ言フ俟タス。蓋シ法規ノ解釋適用ニ付テ論スルハ行政法ニシテ、其ノ利害得失或ハ立法ノ趣旨ニ主力ヲ用ヒテ論究スルハ即チ財政學ナリ。會計法規ヲ對象トシテ論スル場合ニ於テモ或ハ行政法即チ國法學タルコトアレトモ、之ト同時ニ財政學ニ於テモ之ヲ參照ス

ルコトハ少シモ怪ムニ足ラサルナリ。

第三 財政學上ノ地位

上述ノ如ク會計論ハ財政學ノ一部門タルモノナリ。然ラハ一步ヲ進メテ會計論ハ財政學中何レノ部門ニ屬セシムヘキカ。

一 學者ニ依リテハ會計論ヲ以テ歲出論中ノ一部分トシテ論スルモノアリ蓋シ其ノ趣意トスル所口財政ハイハユル「出ルヲ計リテ入ルヲ制ス」ルニアルカ故ニ先ツ歲出ヲ以テ標準トナサ、ルヘカラス。從テ會計ノ如キ主トシテ歲出ノ整理ヲ以テ其ノ目的トスルモノナリト云フニアラン。然リ實際上會計論ノ講究スル所ニハ歲入ヨリモ歲出ニ關スル部分多キヲ占ムルハ疑ヒナキモ、會計論ノ全部ヲ以テ歲出論中ニ包含セシムルハ其ノ當ヲ失スルモノナリト云ハサルヘカラス。何トナレハ豫算ニセヨ現計ニセヨ決算ニセヨ歲入ニ付テ論スルコト亦少シトセサレハナリ。

二 會計論ヲ以テ財政ニ關スル手續法ナリトシテ歲入論、歲出論ノ各部ニ分屬セシムルモ亦一ノ方法タルヲ失ハス。然レトモ斯クノ如クスルトキハ會計論トシテノ統一ヲ缺キ實際上其ノ講究ニ不便少カラサルカ故ニ、何レノ著書ニ於テモ

斯クノ如キ方法ヲ採ルモノヲ見サルナリ。

三 會計論ヲ以テ歲入論、歲出論ノ外收支適合論ノ一部トシテ論スル學者アリ。コレ以上ノ二者ニ比較スルトキハ進歩セル分類法ナリト云フニ躊躇セス。例之、ワグナー氏カ財政整理論ヲ分チテ實質的ト形式的トナシ、前者ニ於テ國債ヲ論シ、後者ニ於テ會計ヲ論シタルカ如キコトナリ。然ルニ吾人カ遺憾ヲ感スルハタトヒ學者カ會計論ヲ以テ財政學中ノ一分科ト見ルモ之ヲ論究スルコトノ極メテ少キニアリ。是レ以上ノ如キ分類法ヲ採ル自然ノ結果トモ見ルコトヲ得ヘシ。吾人ハ財政上形式的方面ノ整理或ハ其ノ方策ノ講究ノ重要ナルコトヲ感スルヲ以テ此ノ分類法ニモ服セサルナリ。

吾人ヲ以テ見レハ、財政學ハ宜シク實質的方面ト形式的方面トノ二者ニ大別シ、前者ニ於テ普通ノ歲入論、歲出論、國債論ヲ爲シ、後者ニ於テ會計論ヲ論スルヲ以テ理論上明了ニシテ實際上ニモ適當ナリトスルモノナリ。佛國ノ學者ハ之ヲ明言セサルモ其ノ著書ノ編次ニ於テ大體此ノ方法ニ依ルモノ、如シ。尙ホ更ニ進ンテ會計論ノ分類ニ付テハ次章ニ至リテ之ヲ説クヘシ。

第三節 我國ノ會計法

上述ノ如ク會計法規ハ會計論ノ講究上重要ナル資料トナルモノニシテ從テ何レノ國ト雖モ苟クモ國債財政ノ進歩シタル國ニ於テハ之ヲ見サルモノナシ。唯國ニ依リテ或ハ一ノ法律又ハ命令ノ形式ヲ以テ其ノ主ナル部分ヲ規定セルモノト然ラサルモノトアリ。又國ニ依リテハ例之英國ノ如ク多ク從來ノ慣例ニ委スルモノモアリ。然レトモ大體ニ於テ會計ニ關スル法則ノ存在セサルモノナシト云フヲ得ヘシ。我國ノ如キ亦現行ノモノハ明治二十二年ニ於テ帝國憲法ノ發布アルヤ特ニ根本ノ原則ハ憲法中ニ規定シ、又之ト同時ニ公布セル會計法、會計規則等アリテ憲法上ノ規定ヲ承ケテ一般的規定ヲ定メタリ。而シテ之ニ對スル特別法規、附屬法規ニ至リテハ之ヲ舉クルニ遑マナシ。然リ而シテ此等ノ法規モ一朝ニシテ規定セラレタルモノニアラス。維新以後ノ沿革ヲ有スルモノナレハ先ツ其ノ大略ヲ述ヘントス。

維新以前ニ於テモ會計ニ關スル法則ハ多少存在セルナランカ、吾人ハ封建時代ニマテ溯リテ之ヲ説明スルノ煩ヲ避ケ專ラ明治ニ於ケル沿革ヲ見ルニ現今ニ至

ルマテ大別シテ四箇ノ時期トナスコトヲ得ヘシ第一ハ慣例時代第二ハ創始時代第三ハ改正時代第四ハ整備時代是レナリ。

第一 慣例時代 ハ明治ノ始メヨリ明治五年マテノ間ニシテ此ノ間ハ維新勿々ノ際ニシテ未タ會計制度ニ付テ思フ致スノ暇マナク唯從來ノ慣例ニ從ヒテ之レヲ處理シタルノミ。然レトモ此ノ期間ニ於テモ多少布告様ノ會計規則ヲ公ニシタルコトアリ、明治二年正月ノ出納司規則書ノ如キ即チコレナリ。其ノ最初ノ箇條ニハ「米金渡方ノ儀各官各司其差定候諸入用ノ分ハ凡見込ヲ以伺ヒ不及渡方取計一箇月限リ清算ノ上翌月初旬ノ内仕上勘定帳請取内譯相改不相當ノ廉ハ其官其司ヘ申談爲引直右清算仕上帳差出方遅々オヨヒ候方ヘハ諸渡方仕間敷候事」トアリ、以テ當時既ニ多少ノ檢束の規則ニ依リテ政費ノ濫出ヲ防遏スルニ努メタルヲ見ル。又明治五年十月ノ交ニ至リ各省ノ歳費定額ヲ定メ將來ニオケル豫算制度ノ基ヲ爲セリ。

第二 創始時代 ハ明治六年ニ始マリ十四年ニ至ルマテノ間ニシテ、明治六年ニハ設令「爲心得」ナル附注ヲ以テセルニモセヨ見込會計表ノ公布アリテ豫算制度ニ向テ一步ヲ進メ、殊ニ同年十二月ニハ「金穀出納順序」八條ヲ以テ成ルヲ定メタリ。

其ノ第一條ニ依レハ「常備金ハ年額ヲ十二分シ毎月初旬大藏省ヨリ受取以テ權限ノ費用ニ充ツ其受取ノ手續ハ大藏省ノ規定ニ從フヘシ」トアリ。而シテ明治八年ニハ見込會計表ノ題目ヲ更メテ歳入歳出豫算表トシ、科目ノ金額ヲ彼此流用スヘカラサルモノトシ、十三年ニハ「爲心得」ナル附注ヲ削リテ命令的ノ性質ヲ有セシムルコト、ナレリ。又其ノ前年即チ十二年ニハ始メテ決算報告「八年度ノ分」ヲ公ニセリ。加之豫算ノ施行ニ付テイハ、明治九年九月ニ至リ從前ノ「金穀出納順序」ヲ改メ新ニ「大藏省出納條例」ヲ定メ其ノ條文二百七十四條ヨリ成リ頗ル詳細ノモノナリ。然ルニ十四年四月ニハ更ニ之ヲ改正シテ新ニ會計法ヲ公布セリ、五章六十一條ヨリ成リ從來各種ノ法規ヲ綜合シ茲ニ一般法トシテ統一の規定ヲ見ルニ至レリ。又會計ノ検査ニ付テハ明治十一年一月始メテ検査員派出規程ノ公布アリ、翌二月ニハ検査條例ノ制定アリ。而シテ翌年即チ十三年ニ至リテハ會計検査院ヲ設ケテ大藏省ヨリ獨立セル官廳ヲ設クルコト、ナレリ。之ニ次テ更ニ翌十四年四月ニハ新ニ會計検査院章程ノ公布アリ。斯クノ如クニシテ此ノ第二期ノ終リニ於テハ會計ノ法規並ニ機關ハ略其ノ緒ニ就ケリ。

第三 改正時代 ハ明治十五年ニ始マリ明治二十一年ニ至ル間ニシテ、前期ニ

於テ其ノ緒ニ就キタル會計法規ハ更ニ改良セラレテ整備ノ域ニ向ハントス。即チ明治十五年一月ニハ會計法並ニ會計検査院章程ハ更ニ改正セラレ、例之從前ハ會計検査院ハ豫算ノ事前検査ヲ爲シ得ルノ權限ヲ有セシヲ改メテ検査院ハ豫算ノ施行後其ノ現計或ハ決算ヲ審査スルニ過キサレト、シ、又從來經費定額ヲ大藏省ヨリ各省ニ月割ヲ以テ交付セル制度ヲ廢シ、現金ハ凡テ大藏省ニ於テ保管スルモノトシ、各廳ニ於テハ其ノ長官ヨリ收支ノ命令ヲ下シ、當該會計官吏ハ切符ヲ以テ其ノ收支ヲ執行スヘキモノトナセルカ如キハ、即チ今日ノ制度ノ基礎ヲ爲セル顯著ナルモノトス。其ノ他明治十八年三月ニ歲入出豫算條規ヲ制定シテ豫算ノ調製法ヲ一定シタルカ如キ十六年三月ニ國庫金出納條規ヲ以テ同年六月ヨリ日本銀行ヲシテ國庫金取扱ヲ命スルニ至リシカ如キ、凡テ皆現行制度ノ先驅或ハ基礎ヲ成シタルモノナリ。

第四 整備時代 或ハ立憲制實施時代ニシテ前述セル如ク明治二十二年二月帝國憲法ヲ發布シ其ノ內特ニ一章ヲ設ケテ國家財政殊ニ會計上ノ根本的原則ヲ確立シ、之ト同時ニ會計法及ヒ會計規則ノ公布アリテ一般的规定ヲ定メタリ。是レ即チ現行法規ニシテ前者ハ十一章三十三條ヲ以テ成リ、後者ハ十章百二十三條ヲ

以テ成レリ。爾後會計法ハ三十五年中ニ數條ノ改正アリ、會計規則ハ二十六年三十二年及ヒ三十五年ノ三回ニ幾多ノ改正ヲ爲シタルモ、大體二十二年公布ノモノハ現在ニ於テ行ハル。其ノ他同年(二十二年)五月ニハ會計検査院法ノ公布セラル、アリ是レ亦同シク現行法トス。然リ而シテ同年以後今日ニ至ルマテ此ノ一般法タル會計法ニ對シテハ幾多ノ特別法規並ニ幾多ノ附屬法規ノ制定セラル、アリテ到底茲ニ列舉スルコト能ハス。

之ヲ要スルニ明治二十二年ハ實ニ我國カ立憲國トナリシト同時ニ會計上ノ制度モ亦一新時期ヲ劃スルニ至リタルモノニシテ、爾後常ニ多少ノ變更アルモ大體ニ於テ整備スルニ至レリ。然リ而シテ現行法モ亦完備ナリト云フコト能ハスシテ幾多ノ改良ヲ加フヘキ點アルヘキモ、財政學ヲ學フ者ハ先ツ現行制度ニ通曉スルヲ以テ第一トスヘシ。是レ則チ吾人カコレヨリ講述セントスル所ナリ。現行制度ニ對シテ外國ノ制度ヲ參照シ改正ヲ加フヘキ點ヲ論說スルカ如キハ更ニ第二ノ階級ニ於テスヘク、初學者タル諸子ニ對シテハ茲ニ之ヲ述フルコトヲ得サルナリ。

第二章 會計上ノ機關及期間

第一節 會計上ノ機關

一四

立憲政體ニ於テ國家根本ノ機關トシテ國會、政府、裁判所ノ三者相對立スルカ如ク、會計モ一國重大ノ政務ナルヲ以テ大別スルトキハ三箇ノ獨立セル機關ヲシテ之ニ參與セシム。即チ

- 1、政府
- 2、議會
- 3、會計検査院

是レナリ。右ノ内政府ハ行政政府トシテ實際會計ノ衝ニ當リ之ヲ執行スルノ責アルモノナルハ勿論、議會ハ豫算ノ議定ヲナシ豫算外支出ノ事後承諾ヲ爲シ決算ノ議決ヲ爲ス等ノ權限ヲ有シ、會計検査院ハ專ラ會計ノ事後審査ノ任ニ當ルモノトス。而シテ此ノ議會並ニ會計検査院ハ共ニ重大ナル職權ヲ有シ獨立ノ地位ヲ有スルヤ勿論ナレトモ、其ノ執行ニ付テハ命令權ヲ有セス何等ノ容喙ヲ爲シ得サルモノナリ。

以上三大機關中後者ニ付テハ後ニ至リ之レヲ説明スルヲ以テ便利トスルカ故

ニ茲ニハ主トシテ第一ノモノニ付テ説カントス。然リ而シテ政府ニ在リテモ大藏省即チ大藏大臣ハ一國ノ財務ヲ總轄スルノ地位ニ立チ、從テ會計制度上重大ノ機關タルヤ論ナシ。今其ノ權限ノ概要ヲ舉クレハ、

- 1、總豫算ヲ調製スルコト
- 2、豫備金ノ支出ニ承認ヲ與フルコト
- 3、國庫金ノ取扱者タル日本銀行ヲ監督スルコト
- 4、決算ヲ調製スルコト

等ハ其ノ顯著ナルモノナリ。即チ會計制度上大藏大臣ハ豫算、現計、決算ニ亘リテ凡テ之ニ干與セサルコトナシト云フヘシ。

大藏省官制第三條ニ依レハ大藏省ニハ主計局、主稅局、理財局、國債局ノ四局ヲ置ク。而シテ第一ノ主計局ハ主トシテ會計ノ任務ニ當ルモノニシテ、主計局分課規程ニ依ルトキハ主計局ニ豫算決算課並ニ司計課ノ二課ヲ置キテ之ヲ分掌セシム。其ノ分掌大約左ノ如シ

豫算決算課ニテハ左ノ事務ヲ掌ル

- 1、總豫算總決算ニ關スルコト

- 2、特別會計ノ豫算決算ニ關スルコト
 - 3、豫備金ノ支出ニ關スルコト
 - 4、收入支出ノ科目ニ關スルコト
 - 5、會計ノ規程ニ關スルコト
 - 6、物品會計ニ關スルコト
 - 7、出納官吏ノ監督及身元保證金ニ關スルコト
 - 8、府縣郡市町村其他公共組合ノ歲計及補助金ニ關スルコト
- 次ニ司計課ニ於テ掌ル事務ハ左ノ如シ

- 1、仕拂豫算ニ關スルコト
 - 2、定額繰越過年度支出定額戻入及年度開始前支出ニ關スルコト
 - 3、主計簿ノ登記ニ關スルコト
 - 4、歲入歲出現計書調製ニ關スルコト
- 各省ニ在リテモ各省大臣ハ其ノ所管各部ニツキ會計上ノ責任者トシテ其ノ豫算ノ調製並ニ豫算ノ施行即チ現計並ニ決算上ノ職司ヲ有スルハ勿論ニシテ下級ノ各部局ニ於テモソレソレ種々ノ職務ヲ有スルモノトス。而シテ其ノ機關ノ如キ

ハ以下講述スル所ニ依リテ知リ得ヘク、今茲ニ列舉スルノ煩ヲ避ク。又國庫金保管ノ責ニ當ル日本銀行ノ總裁タル金庫出納役カ現計ノ出納機關トシテ會計制度上重大ナル地位ヲ占ムルコト亦論スルマテモナシ。

第二節 會計上ノ期間

第一 會計年度ノ意義及必要

會計年度トハ豫算ノ效力ノ發生存續スル期間ヲ云フ。蓋シ國家ノ會計ハ永久ニ亘リテ繼續シ國家ノ命脈ヲ保ツ限リハ斷絶スルモノニアラサルヤ勿論ナリト雖モ正確ニ豫算ノ施行ヲ爲シ會計ヲシテ常ニ整理ノ状態ニ在ラシメントセハ豫算ハ其ノ計劃ニ從テ施行セラルヘキ或ル一定ノ期間ナカルヘカラス是レ即チ會計年度ナリ。而シテ其ノ長短ノ如キハ國ニ依リテ差異アレトモ普通ニ一箇年ナルヲ例トス。

斯クノ如ク會計年度ハ豫算ノ效力ヲ發生シ存續スル期間ナレトモ、其ノ所屬年度ノ出納ハ必ラスシモ該會計年度内ニ終了スルモノニアラス、コレ即チ出納整理期間ノ必要ナル所以ナリ。例之甲年度ニ於テ乙年度ノ豫算ヲ編製シ乙年度ニ至リ

テ之ヲ施行シタリトセシニ、其ノ出納ノ整理ハ或ハ丙年度ニ亘ルコトアリ。故ニ會計年度ト出納整理期間トハ區別スヘキモノニシテ、以上ノ場合ニ於テ、乙年度ノ出納整理ハ全然丙年度ノ會計ト區別シテ取扱フヘキモノナリ。

第二 會計年度ノ期間

會計年度ト云ヘハ通常一箇年ナルコトヲ原則トスルハ人ノ知ル所ノ如ク我國ニ於テノミ然ルニアラスシテ何レノ國ト雖モ多クハ此ノ原則ニ依ルモノトス。即チ帝國憲法第六十四條ニモ「國家ノ歲入歲出ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシト規定セルニヨリ一年制度ヲ採ルコトヲ知ルヘシ。コレ一年制度ハ人事天然ノ必要ニ吻合スルモノニシテ、實際收支ヲ爲スニ當リ最モ便利ナレハナリ。モシ之ヲ長クシテ二年以上ニ亘ラシメンカ、豫算ト現計トハ相距ルコト遠クシテ實際ノ狀況ニ適應セサルヘク、之ヲ短クシテ三箇月又ハ六箇月ナラシメンカ政府ハ常ニ豫算ト決算トノ調製ニノミ忙殺セラレヘキナリ。故ニ國家トシテ會計年度ハ一年ナルヲ有利トス、地方團體ニ於テモ亦同様ナリ。

然レトモ會計年度ハ必ラス一箇年ナリト速了スヘカラス。或ル事件又ハ目的ノ爲メニハ之レ以上ヲ以テ一會計年度トスルコトアリ。現ニ日露戰役ニオケル臨時軍事費ノ如キハ其ノ始期ヨリ平和克復ニ至ルマテヲ以テ一會計年度トナセルカ如シ。蓋シ此ノ場合ニ於テハ會計ノ整理上以上ノ期間ヲ一會計年度トスルコト便利ナレハナリ。又獨逸帝國中ノ小國ニハ今尙ホ二年制度、三年制度、四年制度ヲ採ルモノアリト云フ。蓋シ此等ノ國ハ規模狹少ニシテ平靜ナルヲ以テ一年制度ニ依ルノ要ナク、以テ議會開會ニ關スル經費ヲ節約シ得ルノミナラス年度内經費融通ノ範圍ヲ廣クスルコトヲ得ヘシ。

第三 會計年度ノ始期

我國ノ會計年度ノ始期ハ會計法第一條ノ定ムル所ナリ。曰ク「政府ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル」ト。然ルニ明治維新以來ノ沿革ヲ尋ヌレハ必ラスシモ然ラス。即チ明治元年及ヒ二年ニハ曆年ニ依リテ一月一日ニ始マリ、明治二年九月ニハ其ノ十月ヲ以テ始期トスルコトニ改メタリ。然ルニ明治五年十一月ニ至リ從前ノ曆年割ヲ復活シ、更ニ明治七年十月ニハ米國ノ例ニ倣ヒ七月ヲ以テ始期トスルコト、シ、明治八年ヨリ實行セリ。而シテ現行ノ四月一日制ハ明治十九年度ヨリ實施セラレシ所ナリトス。思フニ會計年度開始ノ期ハ種々ノ條件ヲ要ス。即チ

(1) 會計年度ノ始期ハ豫算議決ノ期ト遠カラサルコトヲ要ス。豫算ハ財政ノ計劃ニシテ一ノ豫測ニ過キサカ故ニ、豫算ノ議定期ト豫算ノ施行期トハ相距ルコト遠カラサルコトヲ要ス。然ラスンハ豫算ハ常ニ内外種々ノ事情ノ爲メニ左右セラレテ當初ノ目的ヲ遂行スルコト能ハサルヘシ、

(2) 會計年度ノ始期ハ歳入饒多ノ時ナルヘキコト。何トナレハ年度ノ開始ニ於テハ當該年度ノ經費ニ付テ仕拂ヲ要スルアルモ收入ハ之ニ先チテ國庫ニ充滿スルモノニアラス。而シテ若シ之ニ對スル歳入ナキトキハ大藏省證券ヲ發行スルカー一時借入金ヲ爲サ、ルヲ得サルヘシ。

(3) 會計年度ノ始期ハ民間ノ經濟狀態ヲ顧ミルヘシ。即チ人民產業ノ繁閑市場ノ狀況等ヲ見テ、歳入ヲ徵收スルモ其ノ負擔ニ於テ甚シキ困難ナク市場ノ狀況ハ之ニ依テ影響セラレサル時期ナラサルヘカラス。

然ルニ我國ノ現行制度ハ以上ノ諸點ニ比照シテ不完全ナルヲ稱フル者少カラス。七月一日制ニ復舊スル說ノ如キハ最モ有力ナリト云フヘシ。

然レトモ實際上會計年度ノ始期ヲ變更スルハ極メテ難シ。何トナレハ新會計年度ノ始期ハ前述セル諸要件ヲ具備スヘキハ勿論、新舊年度開始ノ過渡時期ニ於テ

巨額ノ金員ヲ要スレハナリ。故ニ臨時收入トシテ巨額ノ金員ヲ得タルカ、又ハ之レカ爲メニ豫メ年々一定ノ金員ヲ貯ヘテ準備ヲナスニアラスンハ到底實行スルコト能ハサルナリ。我國ニテモ現行制ノ不完全ナルヲ知リツ、改正ノ舉ニ出ツルコト能ハサルハ其ノ事態容易ナラサレハナリ。

第四 會計年度所屬

以上ノ如ク一會計年度ノ期間ハ一定セルカ故ニ、之ニ對スル歳入歳出モ又一定セサルヘカラス。然レトモ實際ニ付テ見ルニ其ノ經費又ハ收入カ甲年度ニ屬スルモノナリヤ又ハ乙年度ニ屬スルモノナリヤハ規定ヲ俟ツニアラサレハ明了ナラサル場合少カラス。會計規則第一條第二條ニハ之ニ對スル規定ヲ設ケタリ。コレハ第三編現計論ニ至リテ説明スル所アルヘシ。

第三章 本講義ノ順序

會計其ノ實行セラル、時期ニ付テ考フルトキハ左ノ三期ヲ經過シテ終了スルモノトス

1、豫算ノ編製議定及成立

2、歳入及歳出ノ收支

3、決算

之レヲ以テ會計論モ亦此ニ從ヒ第一豫算論第二現計論第三決算論トスヘキモノ、如シ。然レトモ學者ニ依リテハ決算論ナル表題ニ代フルニ「會計監督論」ナル題目ヲ以テシ主トシテ會計検査院ノ事後審査ニ付テ論究スルモノ多シ。吾人モ亦此ノ說ニ從ヒ講述スル所アラントス。

然レトモ又一方ヨリ見レハ我國ニハ特別會計ノ數頗ル多ク其ノ金額ヨリ云フモ巨額ニ達セリ。之ヲ以テ特別會計ニ付テハ一編ヲ設ケテ之ヲ論スルノ必要アリ。而シテ特別會計ニ付テ特別論究スルノ必要アル點ハ豫算現計殊ニ現計ニ存スルヲ以テ吾人ハ彼此考慮ノ上左ノ編別ニ從ヒ之ヲ論セントス

第一編 豫算論

第二編 現計論

第三編 特別會計論

第四編 會計監督論

尙ホ之ニ附加シテ云フヘキハ彼ノ「資産會計」ナリトス。資産會計トハ政府所有ノ

動産及ヒ不動産ノ増減保管ニ關スル謂ニシテ我國ニテモ特別ナル法規ノ存在スルアリ。然レトモ之ニ付テハ講義ノ進歩如何ニ依リ或ハ之ヲ講スヘク或ハ省略ニ附スヘキヤモ知ルヘカラス

第二編 豫算論

第一章 總論

第一節 豫算ノ意義性質

第一、豫算ノ意義

我國ニ於テ豫算ナル文字ヲ使用スルニ至リシハ明治八年ニ於テ從前ノ「見込會計表」ヲ改メテ「歳入歳出豫算表」ト爲シタルニ始マルモノ、如シ。但シ見込會計表ト云ヒ豫算ト云フモ其ノ當時ニ於テハ殆ト同一ノ意味ニ用ヒラレタルコトハ吾人ノ言フ俟タス。然ルニ現今ニ於テ所謂豫算トハ、單ニ見込會計表即チ歳入歳出ノ豫測ト云フ意味ノ外尙ホ特殊ノ意味ヲ包含スルコト、ナレリ。是レ我國カ立憲政體ヲ採リタル自然ノ結果ニシテ、從テ豫算ナル觀念ハ我帝國憲法上及ヒ學理上ニ於テ之ヲ決定セサルヘカラサルコト、ナレリ。

豫算トハ一國財政ノ豫測ニシテ、議會ノ協賛ヲ經テ裁可セラレ財政監督ノ爲ニ備フル爲ニ編製セラレタル表ヲ云フ。

今之ヲ分析シテ説明センニ、

(一) 豫算ハ議會ノ協賛ヲ經テ裁可セラレタルモノナリ。惟フニ曾テ議會ノ未タ設ケラレサルニ當リテモ上述ノ如ク既ニ見込會計表若クハ豫算表ナルモノアリ政府ノ當路者ニシテ財政ニ一定ノ秩序ヲ設ケ未來ノ計劃ヲ正確ニ遂行セントスルニ於テハ之ニ依リシモノナレトモ、現今ノ立憲國ノイハユル豫算ナルモノハ番ニ一國財政ノ見積リナルノミナラス、必ラスヤ議會ノ協賛ヲ經タルモノナラサルヘカラス、帝國憲法第六十四條ニモ此ノコトヲ明ニ規定シテ

國家ノ歲入歲出ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ

ト云ヘリ。蓋シ豫算ニ限ラス一般ニ人民ノ權義若クハ財産上ニ重大ナル關係アルモノハ原則トシテ議會ノ議ニ附スヘキモノナルコトハ一般立憲國ノ主義トスル所ニシテ、豫算ノ如キハ財政上ノ基礎トモ云フヘク、從テ人民ノ財産上ニ至大ナル關係アルヲ以テ議會ノ議ニ附スルコトハ當然ナリト云フヘシ。

然リ而シテ議會カ豫算ニ對スル關係ハ之ヲ協賛スルニ在リテ議會カ之ヲ決定

シ成立セシムルモノニ非サルヤ論ナシ。我國ニ於テ一國ノ統治權ハ一ニ天皇ノ總攬セララル、所ナルヲ以テ、議會カ議決シタル上更ニ裁可ヲ要スルヤ勿論ナリ。然ルニ帝國憲法ハ法律ニ付テハ特ニ第六條ニ於テ「天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及執行ヲ命ス」ト規定セルニ關セス、豫算ニ付テハ上掲第六十四條ノ規定アルノミニシテ、第六條ニ於ケルカ如キ規定ヲ缺クヲ以テ豫算ハ議會ニ依リテ當然成立スルカ如クニ解釋スル者ナキニアラス。然レトモコレ法文ニノミ專ラニシテ却テ其ノ本ヲ忘レタル者ナリト云ハサルヲ得サルナリ。

(二) 豫算ハ財政監督ノ爲メニ編製セララル、表ナリ。豫算ノ目的トスル所ハ財政ノ監督ニ在リ。蓋シ豫算ノ觀念未タ發達セスシテ、豫算ハ單ニ財政ノ見積ニ過キスト爲セルノ時ニ當テヤ、豫算ノ效力ハ明白ニ認メラレサリキ。即チ豫算ヲ實施スルニ當リ豫算ニ定メタル全額ヲ動カスコトヲ得ルヤ、又動カシタリトスルモ其ノ責任ヲ負擔スルヲ要スルヤ否ヤハ極メテ漠然タリシモノ、如シ。然ルニ今日ノ如ク豫算ハ議會ノ議ヲ經テ裁可シ公布セラル、ヤ、内務大臣ヲ始メ國家ノ行政機關ハ凡テ之ヲ確守スルノ責任ヲ負擔スルニ至ル。故ニモシモ或ル款項ノ定額ヲ越ヘテ恣ニ支出ヲ爲スカ如キコトアラハ豫算違反ノ責ヲ負ハサルヘカラス。之ヲ要ス

ルニ豫算ノ效力ハ立憲的豫算ト爲リテヨリ從前ニ比シテ其ノ效力ニ莫大ノ差異アリ、現今ニ於テハ至大ノ效力ヲ豫算ニ附與シ以テ財政監督ノ目的ヲ達セントスルナリ。

然リ而シテ此ノ目的ヲ全フセン爲メニ豫算ハ其ノ成立即チ天皇ノ裁可アルヤ之ヲ公布スルコトヲ要シ、又豫算執行ノ結末ハ即チ決算トシテ之ヲ議會ノ議ニ附シ更ニ之ヲ公布スルコトヲ要スルモノトス。豫算ノ沿革上古代ニ於テハ所謂秘密豫算ト稱シテ公ニセラレサリシコトアリシハ歐洲諸國ノ財政史上ニ散見スル所ナルモ、現今ニ於テハ固ヨリ斯クノ如キハ財政監督ノ實ヲ確實ニスル所以ニアラサルカ故ニ、何レノ國ニ於テモ之ヲ採ラス。

第二、豫算ノ性質

豫算ノ意義ハ以上ノ如クナルカ、茲ニ豫算ノ性質トシテ特ニ注意ヲ要スルハ法令トノ關係ナリトス即チ或ル學說ニ依レハ豫算ハ本來法律タルノ效力ヲ有スルモノニシテ、豫算ニ依テ人民ハ權利義務ヲ取得スルモノナリト云ヒ、他ノ學說ニ依レハ、斯クノ如ク設令豫算ニハ本來法律タルノ效力ナシトスルモ、議會ノ協賛ヲ經タルカ故ニ形式上法律ト云フコトヲ得ヘシト云ヘリ。以上ノ二說ハ其ノ差異アル

ヤ勿論ナレトモ畢竟豫算ヲ以テ法律ナリト爲スモノナリ。從テ豫算ヲ以テ法律ノ規定シタル事項ヲ廢止變更スルコトヲ妨ケス。學者ハ之ヲ稱シテ「法規說」ト云フ。

然リト雖モ豫算ハ元來事實ノ豫測ニ過キスシテ設令議會ノ議ヲ經ルモ其ノ性質ヲ變スルモノニアラス、從テ豫算ヲ以テ法律ナリト云フコト能ハサルナリ。成ルホト法律モ豫算モ其ノ成立ノ經路ハ同一ナリト雖モ、其ノ之レアルカ爲メニ之ヲ同一視スルハ兩者ノ性質ヲ混同スルモノナリト云ハサルヲ得ス。加之我帝國憲法ニ於テハ第六十四條ニ於テ明ニ

國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ

ト規定シタルニ於テオヤ。若シ法規說ニ從フトキハ第六十四條ハ

國家ノ歲出歲入ニ關スル豫算ハ毎年法律ヲ以テ之ヲ定ム

ト規定セサルヘカラサルコト、ナルヘシ。

斯クノ如ク豫算ハ法律ニアラス、又之ト同様ニ廣ク法規トモ其ノ性質ヲ異ニスルモノナリ。豫算ト法令トハ各獨立シタルモノニシテ、豫算ヲ以テ法令ヲ廢止變更スルコト能ハサルト同時ニ、法令ヲ以テ豫算ヲ廢止變更スヘカラス。然ルニ此ノ兩者ハ實際上ニ於テ或ル一ノ事項ヲ法令ヲ以テ規定スルト同時ニ豫算中ニ見積ル

コトアルカ故ニ往々問題ヲ生スルコトアリ。例之法令既ニ成立セル場合ニ豫算ヲ以テ之ヲ動かスコトヲ得ルヤ否ヤ。例之勅令ヲ以テ或官廳ヲ創設シタル場合ニ議會ハ其ノ經費ヲ否決シテ其結果勅令ヲ廢止スルコトヲ得ルヤト云フニ然ラス。此ノ場合ニハ其ノ勅令ハ事實上一時實行スルコト能ハサルノミ豫算カ勅令其ノモノヲ廢止スルニアラサルナリ。又例之議會ハ法令未タ成立セサルトキハ之ニ關スル豫算ヲ協賛スヘカラサルモノナルカ。此ノ場合ニ於テモ二者獨立ノ原則ニ依リ議會ハ贊否何レニ決スルモ自由ナリ。一方ノ極端ニ走り豫算ニ於テ協賛セスト云フカ如キハ政府ノ德義ヲ責ムル政治論トシテハ兎ニ角法理論トシテハ誤マレルモノナリ。

第二節 豫算ノ類別

豫算ノ類別ハ(一)豫算ノ沿革上(二)諸國ノ制度上(三)我國ノ現行制度上ノ三者ニ分チテ説明スルヲ以テ便利ナリトス。

第一 沿革上ノ類別

是レ(1)總額豫算ト區分豫算及ヒ(2)不定期豫算ト定期豫算トノ二者ニシテ先ツ

前者ニ付テイハ、豫算發生ノ初期ニ於テハ其ノ豫算ハ一般ニ總額豫算ナリキ。即チ大體ノ計數ヲ示スノミニシテ之ヲ分類シテ其收入支出ヲ明細ニ判明ナラシムルコトナシ。然ルニ時勢ノ必要ハ漸次之ヲ細分シテ數多ノ款項ヲ以テ成レル區分豫算ヲ編製スルニ至リタルモノトス。

又豫算ハ其初メニ當リテヤ其時期ノ一定セルモノナシ。人事ノ簡易ナルニ伴フテ豫算モ毎歲大ナル變動ヲ見ス。從テ數年間同一ノ豫算ヲ以テ施行シ三年ニシテ改メ五年七年ニシテ改ムル等一定ノ規律ナキハ自然ノ勢ナリ。然ルニ此ノ不定期豫算カ進歩シテ今日ノ如ク定期豫算殊ニ毎年豫算トナリシハ吾人ノ見ル所ノ如シ。

第二 諸國ノ制度上

是レ單一豫算制ト複數豫算制トノ類別ナリ。茲ニ單一豫算制ト云フハ一國ノ歲入歳出ヲ一ノ豫算ヲ以テ編製スルモノニシテ豫算ハ即チ一ノ總豫算アルノミ(追加豫算ハ總豫算ノ延長トモ見ルヘキモノニシテ之レアルヲ見テ單一豫算制タルノ性質ヲ損スルモノニアラス)。然ルニ複數豫算制ニ在リテハ二箇(又ハ二箇以上)ノ豫算ニ依リテ一國ノ歲入出カ計上セラレ、各其ノ收入殊ニ費途ヲ異ニスルモノヲ

云フ。例之、獨逸帝國ノ豫算ヲ見ルトキハ、一方ニ經常豫算ナルモノアルト同時ニ一方ニ臨時豫算ナルモノアリ。人或ハ之ヲ誤解シテ經常費(又ハ收入)ト臨時費(又ハ收入)ト混同スルモノアリト雖モ、經常費臨時費ノ如キハ一ノ豫算内ニオケル區分ニ過キス。然ルニ經常豫算、臨時豫算ノ區分ニ至リテハ全然別々ノ獨立セル一ノ豫算ナリト知ルヘシ。

然リ而シテ此ノ單一、複數兩豫算制度ノ何レヲ可トスルヤト云フニ勿論前者ヲ以テ優レリト爲サ、ルヘカラス。複數豫算制度ノ如キハ徒ラニ一國財政ノ通覽ヲ妨クルノミナラス、知ラス知ラスノ間ニ豫算ヲ膨脹セシムルノ弊害アリ。現今ニ於テハ一般ニ原則トシテ諸國ノ採ラサル所ナリトス。

第三、我現行制度上

我國ニ於テハ文明的立憲豫算制度ヲ採用シタルノ結果トシテ上述セル區分豫算制、定期豫算制ヲ採用シタルハ勿論、原則トシテハ(少クトモ)會計法制定ノ當時ニ於テハ單一豫算制度ヲ採ランコトヲ期シタルモノ、如シ。是レ會計法ニ於テ專ラ「總豫算」ナル文字ヲ使用シタルヲ以テモ之ヲ知ルヘシ。例之第五條ニ於テ「歲入歲出ノ總豫算ハ前年ノ帝國議會集會ノ始ニ於テ之ヲ提出スヘシ

トノ規定アルカ如シ。然レトモ之ト同時ニ會計法第三十條ハ

特別ノ須要ニ因リ本法ニ準據シ難キモノアルトキハ特別會計ヲ設置スルコトヲ得

ト規定シテ、一般會計ニ對シテ特別會計ヲ設ケ、從テ總豫算ニ對シテ特別會計豫算ヲ認ムルコト、ナレリ。然リ而シテ此ノ特別會計タルヤ年ヲ經ルニ從ヒ益其ノ數ヲ増加スルニ至リタルカ故ニ、現今ニ於テ我國ノ豫算制度ハ全ク複數豫算制度ヲ採ルモノト云ハサルヘカラス。而シテ之ヲ獨逸カ單一經常豫算ト臨時豫算トノ二箇ノ豫算ヲ以テ成立スルカ如キ簡易ナルモノニアラサルナリ。但シ追加豫算ノコトハ別ニ一篇ヲ設ケテ後ニ之ヲ説明スヘキカ故ニ茲ニ其詳説ヲ略ス。

追加豫算ハ單一豫算制ヲ採ルト複數豫算制ヲ採ルトニ論ナク、其ノ必要ヲ見ルモノニシテ、又諸國ニ於テ何レモ多少之ヲ見サルモノナシ。而シテ追加豫算ハ其ノ性質ハ本豫算ノ延長又ハ補充ト見ラルヘキモノトス。今追加豫算ノ定義ヲ言ハ、「追加豫算トハ總豫算又ハ特別豫算ノ調製後ニ其ノ必要ヲ生シタル爲メ其ノ補充トシテ調製セラル、モノヲ云フ」トイフヲ得ヘシ。

追加豫算ハ斯クノ如ク其ノ發生ハ止ムヲ得サルモノナリトスルモ、濫リニ之ヲ

提出スルハ、却テ本總算ノ編製ヲ粗略ナラシムルモノニシテ從テ之ヲ制限スルノ必要アリ。是ヲ以テ會計法第五條ニモ

必要避クヘカラサル經費及法律又ハ契約ニ基ツク經費ニ不足ヲ生シタル場合ノ外追加豫算ヲ提出スルコトヲ得ス

トノ規定アリ。即チ經費ニ不足ヲ生シタル場合ニシテ、シカモ其ノ經費タルヤ法律契約ニ基ツクモノナルカ必要避クヘカラサルモノナラサルヘカラス。從テ妄リニ積極的ノ經營施設ニ付テ追加豫算ヲ濫出スルコトヲ得ス、コレ實ニ豫算集中主義ニ對スル止ムヲ得サル例外ナレハナリ。

第三節 豫算ノ分科

第一、歳入歳出

豫算ハ其ノ定義ニ示スカ如ク一ノ表ニシテ、而シテ區分豫算制ヲ採リ數多ノ細分ヲ爲シタル今日ノ豫算ハ大小種々ノ分類ヲ爲スモノトス。

然リ而シテ豫算ハ先ツ之レヲ大別シテ歳入及ヒ歳出ノ二トナスコトハ言フ俟タサル所ナリ。其ノ順序ハ先ツ歳入ヲ掲ケ次ニ歳出ニ及フヲ我國一般ノ慣例トス。

蓋シ歳出ハ常ニ種目多クシテ從テ其ノ紙數浩濶ナルニ反シ歳入ハ比較的ニ簡單ナルヲ以テ其ノ金額ニ至テハ歳入歳出共ニ巨額ニシテ合計ノ相當ルハ言フ俟タス。閱覽ノ便利上此ノ方法ニ依レルモノトス。

第二 經常部及臨時部

次ニ歳入歳出ハ各經常部及ヒ臨時部ニ分タレ、經常歳入、臨時歳入、經常歳出、臨時歳出トナルモノトス。而シテ法令上如何ナルモノヲ以テ經常歳入若クハ經常歳出トシ、如何ナルモノヲ以テ臨時歳出若クハ臨時歳出トナスヘキヤヲ規定スルコトナク又規定スルコト不可能ナルヲ以テ何トナレハ豫算ノ編製上其ノ時々ノ出來事ニ應シテ之ヲ計上シ之ニ命名スルノ必要アリ、豫メ一定セルモノニアラサレハナリ。經常臨時ノ區別ハ其ノ文字ノ示スカ如クニ明瞭ナルモノニアラス。然レトモ大體ニ於テ經常部ハ其ノ歳出タルト歳入タルトヲ問ハス原則トナルモノニシテ永久又ハ長期間間斷ナク繼續シテ豫算ニアラハル、モノヲ云ヒ、臨時部ハ例外トナルモノニシテ國家財政上一時的ノ現象ニ屬スルモノヲ包含スト解スルコトヲ得ヘシ。而シテ此ノ兩者ノ區別ハ殊ニ歳出ニ於テ重要ナルモノニシテ、臨時部ニ屬セシムヘキヲ經常部ニ入ル、ノ不可ナルト同時ニ經常部ニ屬セシムヘキヲ臨時

部ニ屬セシムルモ不可ナリ。何トナレハ後者ノ場合ニハ議會ノ豫算監督議定ヲ忽ニセシムル傾キアリ。前者ノ場合ニハ我國ニテハ憲法第六十七條ノ關係上一旦經常費中ニ或ル款項ヲ設クルトキハ永久ニ之ヲ否認スルコト能ハサル(議會ニテ)モノ少カラサレハナリ。

尙茲ニ注意スヘキハ彼ノ「繼續費」トス。繼續費ハ憲法第六十八條ニ於テ特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年限ヲ定メ繼續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムルコトヲ得

ト規定セルモノニシテ、毎年議會ノ協賛ヲ經ヘキ原則第六十四條ノ例外トシテ、豫メ年限ヲ定メ數年度ニ亘ル所要金額ヲ其ノ始メニ於テ協賛ヲ經テ其ノ年度内ハ事業ヲ繼續シ得ルモノヲ云フ。而シテ此ノ繼續費タルヤ、設令其ノ年限ハヤ、長期ニ亘ルモノナリトスルモ、兎ニ角數年ヲ以テ完了スヘキ事業ニ充ツルモノナレハ經常部ノ内ニ包含セシムルコト能ハス、其ノ性質上常ニ臨時部ニ屬スヘキモノナリ。

第三 歲出ノ所管別

歲出ハ經常部、臨時部共ニ更ニ之ヲ分チテ所管別トス。是レ即チ「縦切」ナルモノニ

シテ、總豫算ノ歲出ハ外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信ノ九省所管ニ分タレ、別ニ其ノ首ニ皇室費ヲオクモノトス。而シテ此ノ各省所管別タルヤ、大體ニ於テ行政上ノ區劃ヲ基トスト雖モ、唯便宜上大藏省所管ニハ各省ニ屬セサル獨立官廳全部ノ費途ヲ網羅スルモノトス。即チ内閣、樞密院、貴衆兩院、會計検査院、行政裁判所ノ如キ是レナリ。又費途カ一般的ニ亘ル事項モ、大藏省所管ニ網羅セラル、ヲ常トス。例之、國庫豫備金、諸拂戻及缺損補填金ノ如キ是レナリ。而シテ此等ノモノハ皆次ニ述フル所ノ一欸ヲ爲スナリ。

第四 欸及項

歲入歲出共ニ以上ノ分類ヲ更ニ分チテ欸トナシ、欸ヲ更ニ小分シテ項ト爲ス。項ハ即チ豫算表上ニ於テ最小ノ分科ニシテ議會ニ於ケル表決ノ單位ナリ。然リ而シテ歲入ニ於テハ欸項ノ分チハ唯便宜上ノ分類ニ過キサレモ、歲出ニ於テハ欸項中ノ欸ハ「縦切」ノ方法ニ依リ項ハ「横切」即チ目的別ニ依リ、此ノ各欸各項ハ會計法第十二條ニ

國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス

ト規定セルニ依リ其ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得サルモノトス、此ノ流用禁止ノ規定ハ會計上極メテ重要ナルモノニシテ、畢竟豫算ヲ欸項ニ分チ又其ノ區分法ノ大切ナルコトモ之カ爲メニ外ナラサルモノトス

尙茲ニ一言附加スルヲ要スルハ「豫備金」ナリ。豫備金ハ大藏省所管中ノ一欸トシテ存在スルモノニシテ、帝國憲法第六十九條ニ

避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ豫備費ヲ設クヘシ

トノ規定ニ依ルモノニシテ、元來豫算ノ調製上歳出ハ一定ノ基礎ニ依リテ算出セラレ節約ヲ加フルヲ主義トスルト同時ニ、國家必要ノ經費ニシテ豫算ノ施行ニ當リ不足ヲ告クルコトナキヲ保シ難シ。是レ豫算ノ調製ニ際シ豫備金ノ設ケアル所以ニシテ、之ヲ各省毎ニ計上スルコト、セハ自然豫算ノ膨脹ト濫費トヲ誘フノミナラス有無融通スルノ妙用ヲ缺クカ故ニ大藏省所管内ニ集中シ第三編ニ至リテ述フルカ如キ方法ニ依リ必要ノ都度支出セララル、モノトス。

會計法第七條ニ依レハ豫備金ハ之ヲ分チテ

第一豫備金

第二豫備金

ノ二トス。第一豫備金トハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノヲ云ヒ、第二豫備金トハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノヲ云ヒ、各一項ヲ爲スモノトス。尙後ニ至リ此ノコトハ説明スヘシ。

第二章 豫算ノ準備

第一節 豫算準備ノ原則

豫算ハ一國財政ノ基礎ニシテ會計ノ標準トナルモノナレハ之レヲ編製スルニ當テハ最モ注意セサルヘカラス。然ラスンハ財政ノ紊亂ハ到底免ルコト能ハサルニ至ルヘキナリ。而シテ豫算ノ編製ニ付テハ自ラ豫算準備ノ時期ニ關スル原則ト豫算編製上ノ原則ト豫算秤價上ノ原則トアリ、以上之ヲ分テ略説スヘシ。

第一 準備時期上ノ原則

豫算準備ノ時期ハ成ルヘク之レヲ短縮セサルヘカラス。蓋シ豫算ハ財政ノ計劃ニシテ全ク豫測ニ過キササルモノナルカ故ニ豫算ノ計劃ト豫算ノ施行トハサナキダニ齟齬ヲ生シ易シ。若シ此ノ齟齬ヲ少カラシメントセハ豫算編製カ實質上ニ於

テ確的ナルノミナラス豫算準備着手ノ時期ト會計年度開始ノ時期トノ距離ヲ出
カ得ル丈ケ接近セシメサルヘカラス。而シテ之レカ爲メニハ豫算議定ノ期間ヲ適
當ノ範圍内ニ於テ短カラシムルヲ要スルハ勿論、之レカ提出ノ時期ヲモ早カラシ
メサルヘカラス。而シテ其ノ最モ必要ナルハ準備ノ期間ヲ短縮セシムルニ在リ。換
言スレハ

- (1) 豫算ノ準備時期ヲシテ餘リニ早キニ失セシムヘカラス
- (2) 豫算ノ編製ニ多大ノ日子ヲ失スルハ不可ナリ
- (3) 豫算ノ編製終了後間モナク議會ノ開會ヲ告クル様ニナシ、編製後議會開會迄ノ期間ニ多クノ日子ヲ置クヲ不可トス。

然レトモ此ノ短縮カ餘リ極端ニ走リテ實質ノ粗漏ヲ來スコトナカラシメンコ
トハ更ニ言ヲ俟タス

第二 編製上ノ原則

豫算ノ編製上殊ニ注意スヘキハ科目即チ款項ノ大小粗密ヲ適度ナラシムルコ
トニアリ。蓋シ分科粗大ニ失スルトキハ彼此流用ノ範圍大ニシテ行政官ヲ檢束ス
ルノ效力薄弱ニ從テ弊害其ノ間ニ生シ不急無用ノ事ニ有用ノ財ヲ糜スルコトナ

シトセス。之ニ反シテ分科緻密ニ失スルトキハ行政官ハ活動ノ餘地ナク、其ノ結果
行政ノ施設ニ伴フコト能ハサルノミナラス、行政官ハ斯クノ如キ結果ヲオソレテ
勢ヒ豫算ヲ膨脹スルコトヲ免レサルナリ。

加之豫算款項ハ適當ノ度合ニ於テ集中主義ヲ行フヘシ。蓋シ款項中ノ或ルモノ
ハ一般的性質ヲ有シ之ヲ大藏省所管ニ集中スルモ實際上何等ノ不便ナキモノア
リ、斯クノ如キハ宜シク之ヲ各省所管毎ニ計上スルノ愚ヲ避ケサルヘカラス。何ト
ナレハ之ヲ各省所管ニ分散セシムルトキハ彼此融通ノ便ヲ缺クハ勿論、豫算ノ膨
脹ヲ來スノ恐レアレハナリ。近時諸支出金ナル一欸ヲ大藏省所管ニ設ケ從來各省
毎ニ計上セル賠償金、訴訟費、退官賜金、死亡賜金等ヲ集中セルハ一ノ進歩タルヲ失
ハサルナリ

第三 秤價上ノ原則

豫算ノ秤價ハ一言以テイヘハ正確ナルコトヲ要ス。若シ豫算ノ基礎正確ヲ缺ク
トキハ設令形式上ハ如何ニ權衡ヲ得ルモ其ノ豫算ハ豫算タルノ效用ヲ爲サ、ル
ニ至ルヘキナリ。然リ而シテ今歲入ト歲出トニ分チイフトキハ左ノ如シ
歲出豫算ニ於テ經費ノ秤價ノ多クニ失スヘカラサルヤ論ナシ。若シ豫算ヲ過剩

ニ見積ルトキハ官吏ハ其ノ金額ヲ消費シ盡スノ傾向アルヲ免レス。妄リニ豫算ニ餘裕アラシムルカ如キハ是レ浪費ヲ教フルモノナリ。サレハトテ經費ノ評價ヲ少キニ失セシムルモ不可ナリ。若シ初メヨリ強ヒテ豫算ヲ少額ニ見積ルトキハ豫算施行ノ際ニ當リ、豫備費使用ノ請求續出シテ管ニ金庫ノ空乏ヲ訴フルニ至ラシムルノミナラス追加豫算簇出シテ財政計劃ノ統一ヲ破ルニ至ルヘキナリ。之ヲ以テ經費ノ見積ハ多キニ過キ又ハ少キニ失スルヲ忌ム成ルヘク過不及ナキ様正確ナル標準ニ依ラサルヘカラス。

是ヲ以テ我國ニテモ早ク豫定經費算出概則明治二十二年閣令第十二號ノ制定アリ。其ノ第一條ニ依レハ凡テ經費ヲ算出スルニハ其ノ必要ヲ生スル法律命令契約其他經費ヲ請求スル確實ノ理由ヲ求メサルヘカラス、漠然何等ノ據ル所ナクシテ經費ヲ計上スルカ如キハ能ハサル所ナリ

(1) 經費中給與ニ屬スルモノハ一人當リノ給額ヨリ積算シ定員アル者ハ定員ヲ以テ限度トシ、定員ナキ者ハ前年度四月一日ノ現員ヲ標準トスルヲ要ス。故ニ例之俸給ノ如キ高等官、判任官等ノ區別ニ依リ其ノ平均額ハ一定セラレ之ニ官制ノ上ニ於ケル定員ヲ乘シタルモノカ豫算ニ計上セラル、コト、ナル、而シテ此ノ總

額ハ豫算實施ノ際ニオケル限度ヲナスモノナリ。

(2) 又經費中物件ニ關スルモノモ亦然リ。必ラスヤ其ノ一箇當リノ費用ヨリ積算シ規定ノ箇數アルモノハ規定ノ箇數ヲ限度トシ、規定ノ箇數ナキモノハ前々年度以來三箇年度間ニ實際使用ニ供シタル箇數ノ平均ヲ以テ標準トセサルヘカラス

(3) 其ノ他法律命令契約ニ依リ支出スヘキ總金額ノ定マリタルモノハ其ノ總金額ヲ以テ豫算額トスヘク、常例ノ旅行ニ屬スル旅費ハ各用務毎ニ人員、旅費等級、里程及滞在日數ヲ概定シテ豫算スヘク、國債償還ノ金額ハ財政ノ都合ニ依リ其利子及ヒ手數料ハ定規ニ依リ之ヲ豫算スルヲ要ス。又以上記載スル所ニ據ルヘカラサル經費ハ最モ適實ノ方法ヲ以テ豫算シ其ノ計算ノ基ツク所ヲ示スモノトス。

次ニ歳入ニ付テモ其ノ評價ヲ多キニ失セシメ又ハ少キニ失セシムルノ不可ナルハ同様ナリ。蓋シ前者ノ場合ハ全然財政ノ基礎ヲ破壊スルモノナリト云フヘク後者ノ場合ハ斯クノ如キ弊害ナシトスルモ、之レヲ極度ニ濫用スレハ豫算一部ノ隱蔽ト同様ナル結果ヲ生スヘキナリ。畢竟歳入ニ於テモ豫算ノ評價ハ正確ナルヘク唯多少控ヘ目ニ評價スルヲ以テ安全ナリトス。然リト雖モ歳入ノ如キハ歳出ト

異リ動態的ノモノニシテ昨年ノ租稅收入額ヲ以テ本年ノ收入額ト同一ナリト爲スコト能ハス其ノ他ノ官業收入等ニ付テモ亦然リ。收入ニシテ全然過去ノ事業ニ依リテ未來ノ事實ト符合スヘキモノハ實ニ稀有ノ例外ニ過キサルモノナリ。蓋シ支出ハ多ク自動的ノモノナルモ收入ハ全ク他動的ノモノナレハナリ。茲ニ於テカ秤價ハ收入ニ於テ殊ニ困難ヲ感スヘキナリ。而シテ之ニ付テハ

- (1) 全ク客觀的ノ秤價法
- (2) 主トシテ客觀的ノ秤價法
- (3) 主トシテ主觀的ノ秤價法

等ノ種類アリ。第一ノモノハ純粹ニ過去ノ事實ニ依リテ將來ノ見込ヲ立テントスルモノナルモ、全然機械的ニシテ現今ノ如ク國家ノ財政カ常ニ國民經濟ト密接ナル關係ヲ保チ民間經濟ノ狀態如何ニ依リテ租稅ハ勿論官業收入ニマテ多大ノ影響アル時世ニ於テハ膠柱ノ謬見トシテ一笑ニ附スルノ外ナシ。第二、第三ハ共ニ事實ト推定トノ兩者ヲ併用セントスルモノニシテ唯其ノ主トシテ何レニ依ルカノ點ニ於テ差異アリ。此ノ二者ノ得失ハ收入ノ種類ニモ依ルコトナレトモ概シテ第二ニ依ルヲ以テ安全ナリト云ハサルヘカラス。又現今諸國ニ於テモ主トシテ第二

ノ方法ニ依ルモノ多キカ如シ我國ニテモ亦之ニ依リ主トシテ三箇年間ノ平均實數ヲ基トシ、之ニ大藏大臣ノ意見ヲ以テ増減シ手加減ヲ加フルノ方法ヲ採ルト云フ。然リ而シテ以上三者ノ外全然主觀的ノ推定ニ依ル方法ノ如キハ盲斷的ニシテ之レヲ數フルノ必要ナシトス。唯始メテ或ル種ノ租稅ヲ創設シ若クハ或種ノ官營事業ヲ設置シタル際ニハ止ムヲ得スコレニ依リ成ルヘク控ヘ目ニ秤價スルモノトス。又第一ノ全然客觀的ノ事實ニ依ルノ秤價ハ數額ノ豫メ確定セル收入例之價金等ニ於テ之ヲ見ルノミ。

第二節 豫算編製ノ手續

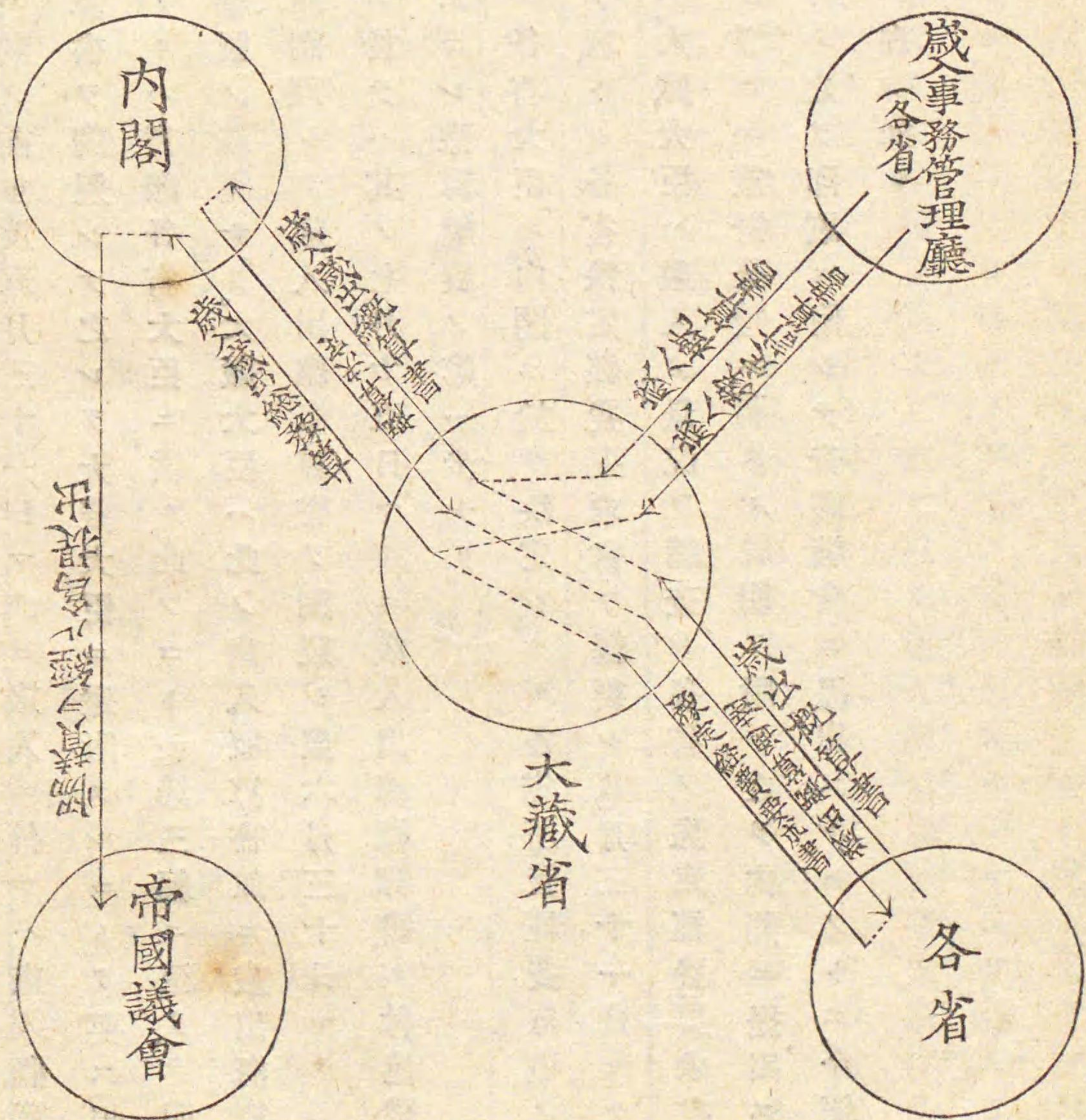
豫算ハ會計年度開始前ニ於テ帝國議會ノ協贊ヲ經テ裁可公布セラルヘキモノナルカ故ニ豫算ノ編製カ更ニ其ノ以前ニ於テセサルヘカラサルヤ論ナシ。然レトモ其ノ編製ノ時期ハ大ニ考慮スヘキ點ニシテ既ニ前節ニ於テ説明セシカ如ク若シ餘リニ遅ケレハ議會ニ提出スル時期ニ迫ラレ爲ニ其ノ調査粗雜トナルノ虞レアリ。何トナレハ議會ノ開期ハ會計年度トノ關係上大體ニ於テ一定ノ制限アリテ妄リニ之ヲ遅延セシムルコトヲ許サ、レハナリ。サレハトテ餘リニ早キニ失スレ

ハ豫算上ノ計算ト實際上ノ施設トカ兎角ニ齟齬ヲ生シ易シ。何トナレハ時日ノ推移ハ歳入ニセヨ歳出ニセヨ種々ノ事情ノ爲ニ影響セラレ、ヲ免レサレハナリ。是レヲ以テ明治二十二年閣令第十二號ヲ以テ歳入歳出豫算概定順序ノ規定アリ今日ニ至ルマテ大體之ニ依レリ。此ノ規定タルヤ今日ニ於テハ多少變改スルヲ要スル點ナキニシモアラサルヘキモ(拙著豫算制度論最近經濟問題叢書第四參照)之ヲ論スルコトヲ略シ左ニ規定ノ大體ヲ述ヘン

調製者(決定者)	書目	期	限
各省大臣	歳入概算書	五月三十一日迄	
各省大臣	歳出概算書	五月三十一日迄	
大藏大臣	歳出入總概算書	六月三十日迄	
内閣(決定)		七月十五日迄	
各省大臣	各省豫定經費要求書	八月三十日迄	
大藏大臣	歳入歳出總豫算	十月頃迄	
内閣(決定)		十一月、二月頃	

各省大臣ハ其ノ前年度五月三十一日マテニ歳入ニ付テハ歳入概算書歳出ニ付テハ歳出概算書ヲ調製シテ之レヲ大藏大臣ニ送附スルコトヲ要ス(規定シ)歳入事務管理廳「トアルハ實際各省大臣ニ當ル、此ノコトハ第三編ニ至リテ明カトナルヘシ)コレ豫算編製ノ基礎ナリ。大藏大臣ハ此ノ歳入概算書竝ニ歳出概算書ヲ檢案シ歳入出ヲ對照調理シテ歳入出總概算書ヲ調製シ翌六月三十日マテニ之ヲ閣議ニ提出ス。内閣ニ於テハ其ノ七月十五日マテニ歳入出總概算書ニ付協議ヲ爲シ大體ノ決定ヲナス、コレ豫算編製ノ第一歩ナリ。

茲ニ於テカ各省大臣ハ内閣ニ於テ決定シタル各省所管經費毎項ノ概算額以內ニ於テ節約ヲ旨トシ、各省豫定經費要求書ヲ編製シ八月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送附ス。大藏大臣ハ歳入ノ景況ヲ調査シ各省ノ豫定經費要求書ニ基キ歳入歳出總豫算ノ首ニハ歳計全體ニ關スル説明ヲ附シ之ヲ内閣ニ提出スルナリ。閣議決定スルトキハ之ヲ印刷ニ附シテ帝國議會ニ提出スルモノトス。今便宜ノ爲メ圖ヲ以テ示セハ左ノ如シ



(注意。歳入豫算計算書ノ提出ハ規定上ニナケレトモ實際上ニオケル慣例ナルヲ以テ之ヲ掲ク。又各省ト歳入事務管理廳トハモト同一ナレトモ歳入出書類ノ徑路ヲ明ニ示スカタメ之ヲ異ニセリ)

第三節 豫算ノ提出

第一 豫算ノ提出

豫算ハ以上ノ手續ヲ經テ其ノ編製ヲ了ルトキハ憲法第六十四條ニ依リ帝國議會ニ提出シテ其ノ協賛ヲ經サルヘカラス。而シテ憲法第六十五條ニ依レハ

豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ

ト規定セリ。是レ所謂豫算ノ先議權ナルモノニシテ我國ノミナラス立憲國ノ多クニ於テ採用スル所ノ制度ナリ。其ノ之レヲ認メサル國ナキニアラス。豫算ノ先議權ニ付テハ西洋ニテハ沿革的ノ理由ニ依リテ之レヲ採リタル時代モアレトモ今日ニ於テハ主トシテ政治上ノ理由ニヨルモノニシテ、國家財政ノ負擔者ニ依リテ選出セラレタル議員ハ又財政ニ關シテ民間ノ事情ニ精通シ其ノ利害ヲ表明スルモノナルト、下院ハ人民ノ納稅關係ヨリシテ通常通過スルコト上院ヨリモ難キヲ以

テ寧ロ其ノ難キヲ先ニセントノ政策上ノ理由ニ依ルモノトス。
又會計法第五條ニ依レハ左ノ如キ規定アリ。

歲入歲出ノ總豫算ハ前年ノ帝國議會集會ノ始ニ於テ之ヲ提出スヘシ

茲ニ「集會ノ始メ」トハ「開會ノ始メ」ト云フニ同シ。之ニ依レハ豫算殊ニ總豫算ハ帝國議會開會ノ始ニ於テ衆議院ニ提出スヘキモノナリ。元來法律案ノ如キハ提出ノ時期ニ付テ何等ノ規定ナキニモ關セス、何故ニ豫算案ニ付テノミ議會開會ノ始メニ衆議院ニ提出スルモノト爲セルヤト云フニ、豫算ハ其ノ内容ハ一國ノ財政ヲ包括シ其ノ及フ所ハ廣クシテ從テ審議ニ時日ヲ要スルノミナラス。之レヲ施行スル時期ハ來ルヘキ四月一日ニ迫レルカ故ニ會計年度ノ始メ成ルヘク審議ノ日ヲ長フシ且豫算ノ施行ニ不都合ナカラシメントスルニ在ルナリ。

尙ホ追加豫算ニ付テハ固ヨリ總豫算ノ如ク必ラスシモ議會開會ノ始メナルコトナシ。或ハ其ノ編製ハ多少總豫算ニ後ル、モ其ノ提出ハ總豫算ト同時ナルコトモアルヘク、或ハ其ノ編製提出共ニ之ニ後ルルコトアリ時トシテハ乙年度ノ總豫算ト同時ニ或ハ之レヨリ後レテ甲年度ノ追加豫算ノ提出セラル、コトナシトセス、是レ追加豫算ノ性質上止ムヲ得サルコトナルヘシト雖モ、最後ノ場合ノ如キハ

多少不妥當ノ傾キアリト云フヘシ。

追加豫算ハ以上ノ如ク時期ニ於テコソ後レテ提出セラル、コトアルヘキモ、其ノ前ニ衆議院ニ提出セラルヘキモノタルヤ論ナシ。

第二 豫算ノ添附文書

會計法第六條ニ依レハ總豫算ニハ帝國議會ノ參考ニ資スルカ爲メ左ノ文書ヲ添附スヘキモノトス。

第一 各省ノ豫定經費要求書

第二 其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ歲入歲出現計書

又會計規則第四條ニ依レハ

總豫算ノ首ニハ歲計全體ニ關スル説明ヲ付スヘシ

トノ規定アリ、コレ即チ「冒頭説明」ナルモノナリ。而シテ此ノ外尙ホ我國ノ慣例ニ依レハ、

歲入豫算明細書

歲入歲出款項金額前年度比較表

ノ二者ヲ添フルヲ常トス。即チ以上ノモノヲ合算スレハ凡ソ五種ノ文書ハ總豫算

ノ添附文書トシテ總豫算ト共ニ議會ニ提出セラレ、モノトス。
 冒頭説明ハ總豫算ノ首ニ附スル歲計全體ニ關スル説明ニシテ現在ノ計劃ト過
 去ニ對スル比較竝ニ將來ノ見込等ヲ概括シテ説明スルモノナリ。通常第八章ニ分タ
 レ第一歲入歲出第二歲入第三歲出第四歲出豫算中重要ナル事項第五繼續費第六
 補助費第七繰越第八國庫豫備金及大藏省證券等トナル。而シテ茲ニ注意スヘキハ
 第八章中ノ大藏省證券ニシテコレ會計法第九條ニ於テ、
 毎年度大藏省證券發行ノ最高額ハ帝國議會ノ協賛ヲ待テ之レヲ定ム
 トノ規定ニ依ルモノニシテ他ノ部分ノ如ク單ニ豫算ノ説明トシテノミ見ルヘキ
 モノニアラス。

次ニ各省豫定經費要求書ハ總豫算書ノ註釋ト見ルヘキモノニシテ、元來總豫算
 ハ其ノ全體ニ通シテ簡明ニ記載スルヲ以テ目的トスルカ故ニ歲入歲出、經常臨時
 各省所管ノ區分並ニ各款項ノ區分アルニ過キスシテ各項ニ關シテ其ノ由テ來ル
 所ヲ説明セス。然ルニ各省豫定經費要求書ハ各省所管ノ經費入用ノ理由ニツキ細
 目ニ付テ一々説明セル所ナレハ(前節ヲ參照スヘシ)以テ各項金額ノ基礎ト必要ノ
 理由トヲ知ルコトヲ得ヘク、添附書類中最モ要用ナルモノナリトス。

豫定經費要求書ノ内容ニ付テハ會計規則第九條ニ規定セリ。即チ左ノ如シ。
 各省ノ豫定經費要求書ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シ更ニ各項中所要ノ金額ヲ
 各目ニ區分シ尙ホ必要ノ場合ニ於テハ番號ヲ以テ之ヲ細分シ又經費所要ノ理
 由、計算ノ基ツク所ヲ示スヘシ

是レヲ以テ豫定經費要求書ハ總豫算ノ款項ニ從ヒ更ニ項ヲ目ニ細分スヘキモ
 ノトス。例之豫算ニハ單ニ第何項俸給トアルヲ第一目勅任俸給第二目奏任俸給第
 三目判任俸給トシ、豫算ニハ第何項旅費トアルヲ分テ第一目内國旅費第二目外國
 旅費トスルカ如シ。此ノ目ハ即チ「行政科目」ト稱セラレ項以上ハ之ニ對シテ「立法科
 目」ト云フ。蓋シ項ハ議會ノ議定ノ單位ニシテ目ハ行政ノ便宜上設ケタリトノ趣旨
 ナラン。而シテ兩者ノ異ル所ハ立法科目ハ會計法十二條ニ依リテ彼此流用スルヲ
 禁止スレトモ行政科目ニハ此ノ制限ナキニ在リ。

尙ホ會計規則第十條ニ依レハ各省ノ豫定經費要求書ニハ各省所管經費全體ニ
 關スル説明及各款各項ノ説明ヲ附スヘキモノトス。

豫定經費要求書ハ經費所要ノ理由計算ノ基ツク所ヲ示スモノナルニ反シ歲入
 歲出現計書添附ノ目的ハ豫算ノ議定審査上議員ノ參考ニ供スルニ在リ。而シテ前

年度ノ決算ハ未タ添附スルコト能ハサルヲ以テ前年度ニオケル現計書ヲ以テスルノ外ナシ。然レトモ此ノ現計書ハ金庫出納閉鎖期後ノ現計ナルヲ以テ決算ト殆ント大差ナキモノナリト知ルヘシ。而シテ此ノ現計書ハ翌年ノ豫算ヲ調査スル上ニ於テ最近ノ狀況ヲ伺フニ足ルヘキ適切ノ参考書タルナリ。

此ノ現計書ノ内容ハ會計規則第十五條ニ依リ左ノ事項ヲ記載スヘキモノトス

歳入ノ部

- (1) 歳入豫算額
- (2) 調定済歳入額
- (3) 収入済歳入額
- (4) 不納缺損額
- (5) 収入未済歳入額

歳出ノ部

- (1) 歳出豫算額
- (2) 豫算決定後増加歳出額
- (3) 仕拂命令済歳出額
- (4) 翌年度繰越額
- (5) 歳出残額

茲ニ調定済歳入額トハ歳入徴收官ニ依リテ徴收權ノ確定セラレタルモノヲ云ヒ豫算決定後増加額トハ豫算定額ノ繰越シタルモノ竝ニ豫備金若クハ豫備金外ノ支出ヲ云フ。而シテ歳入ニ在テハ

$$(1) \text{VA} (2) \parallel (3) + (4) + (5)$$

トナルヘク歳出ニ在テハ

$$(1) + (2) \parallel (3) + (4) + (5)$$

ノ方式ヲ以テ表ハスコトヲ得ヘシ

●最後ニ歳入豫算明細書ハ恰モ歳出ノ豫定經費要求書ニ該當スルモノニシテ法規上規定セラレサルモ之ヲ便利ナリトシテ同シク添附セララル、ナリ。

第三章 豫算ノ議定及成立

第一節 豫算議定ノ範圍

帝國憲法第六十四條ニヨリ議會ハ毎年豫算ニ協賛スル權限ヲ有スルコトハ勿論ナルカ此ノ權限ハ廣ク豫算ノ全體ニ及ヒ議會ハ自由ニ之ヲ廢置増減ヲナシ得ルモノナリヤ又ハ一定ノ制限アリテ此ノ制限ヲ超ヘテマテ自由ニ之レヲ行フコト能ハサルヤハ本章ニ於テ先ツ之ヲ研究スルノ必要アリ。而シテ吾人ハ茲ニ歳入ト歳出トニ分チテ之ヲ論スヘシ。

第一 歳入ノ議定權

帝國憲法第六十二條ニ依レハ

新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ
但シ報償ニ屬スル行政上ノ手數料及其ノ他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラス
國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲ス
ハ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ

ト、即チ之ニ依レハ租稅ノ賦課徵收ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒテ之ヲナスヘク、手數料ニ至リテハ法律ノ定ムルモノト命令ノ規定ニテ足ルモノトアレトモ、豫算ハ一般ニ法規ヲ廢止變更スル力ナキモノナレハ豫算ヲ以テ之ヲ創設シ若クハ削除スルコト能ハサルヤ明カナリ。其ノ他國債モ議會ノ協贊ニ依リ實際上ハ法律ヲ以テ規定セラル、カ故ニ同様ノ結果タルヘク、契約上ノ歲入モ契約自體ノ效力アル間ハ豫算ヲ以テ如何トモスルコト能ハサルナリ。之ヲ要スルニ歲入豫算ニ在テハ他ニ據ル所ナク漫然議會カ新ナル收入ヲ創設シ若クハ既存ノ收入ヲ削除スルコトハ無効ナリト云ハサルヘカラス。唯茲ニ問題トナルハ議會ハ其ノ金額ヲ自由ニ増減シ得ルヤ否ヤニ在リトス。而シテ此ノ點ニ付テハ何等ノ制限ナキカ如クナルモ妄リニ或ル收入ヲ過大ニ見積リ以テ形式的ニ歲出トノ權衡ヲ得セシメントスルノ結果ハ其ノ代リニ或ル收入ノ法律上ノ廢止變更ヲ行ヒ歲入不足ニ付テ重大

ナル政治上ノ責任ヲ負ハサルヘカラス。又妄リニ收入金額ノ減額ヲ企ツルモ實際上ノ收入額ニハ影響ヲ及ホサ、ルコトハ吾人ノ言ヲマタス。是ヲ以テ金額ノ増減ニ付テモ議會ハ自由自在ニ其手腕ヲ揮ヒ得ルモノト云フヘカラス。之ヲ要スルニ歲入豫算ニ付テ議會ノ容喙シ得ル範圍ハ比較的ニ狹少ナリト云フヘシ。

第二 歲出ノ議定權

是レヲ以テ議會カ豫算ニ付テ其ノ議定權ヲ利用シ得ルハ主トシテ歲出ニ在リト云ハサルヘカラス。然レトモ仔細ニ觀察スレハ此ノ部分ニ付テモ幾多ノ制限アリテ廢置削減ノ範圍ハ單ニ一部ニ限ラル、モノナリト云ハサルヘカラス。

第一ニ歲出ニ付テ議會カ豫算ニ計上セラレサル點ニ付キ新ナル費目ヲ創設シ若クハ既ニ計上セラレタル金額ヲ増加スルコトハ、法律上ノ議論ハ暫ラク之ヲ措キ財政上ニ於テ豫算膨脹ノ原因ヲ爲シ其ノ弊害恐ルヘキモノアリ。又政治上ヨリ見レハ豫算ノ執行者ナラサル者カ執行者ニ於テ不必要ナリトスルモノヲ費消セシムルコト、ナリテ政府竝ニ人民ニ對スル德義トシテ之ヲ控フルヲ以テ當然トスヘシ。之ヲ要スルニ金額ノ増加科目ノ創設ノ如キハ議會ノ企ツヘカラサル所ナリト云フヲ得ヘシ。

次ニ或ル科目ノ金額ノ廢除削減ハ財政上政治上共ニ議會ノ議定權トシテ尊重
スル所ナレトモ規定上幾多ノ制限アルヲ以テ此ノ範圍ヲ超越スルコト能ハサル
モノトス。即チ

(1) 皇室費ニ付テハ憲法第六十六條ニ依レハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨ
リ之ヲ支出シ將來増額ヲ要スル場合ノ外帝國議會ノ協贊ヲ要セサルモノトス。茲
ニ現在ノ定額ト云フハ憲法施行當時ニ付テイヘルナリ

(2) 既定ノ繼續費 憲法第六十八條ニ依レハ特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年
限ヲ定メ繼續費トシテ帝國議會ノ協贊ヲ求ムルコトヲ得ヘシ。故ニ議會ニ於テ一
度決定シタル繼續費ハ政治上議會ニ遵奉ノ義務アルモノナレハ中途ニ於テ之ヲ
削除シ若クハ著シキ減額ヲ加フルカ如キハ不當ナリト(不法ナリヤハ兎ニ角)云ハ
サルヘカラス

(3) 憲法第六十七條ノ經費 同條ニ依レハ

イ 憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歲出

ロ 法律ノ結果ニ由ル歲出

ハ 法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出

ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得サルモノトス。
而シテ第一ハ通常之ヲ略シテ「既定大權費」又ハ「既定費」第二ハ「法律費」第三ハ「義務費」
ト云フナリ。

凡ソ此等ノ經費ハ絶對ニ不動的ナルコト皇室費ノ如キニアラスト雖モ政府ノ
同意ナクシテハ之ヲ廢除削減スルコトヲ得サルナリ。又設令政府ノ同意アリトス
ルモ自由ニ之ヲ廢除削減スルハ其ノ性質上許容スヘカラサルモノアリ。即チ第三
ノ義務費ノ如キハ其ノ相手方ノ同意ヲモ得サルヘカラス。又第二ノ法律費ノ如キ
モ法律ノ生命ヲ保ツ範圍内ニテ削減ヲ爲サ、ルヘカラス。斯クノ如キハ獨リ議會
カ之ヲ爲シ得サルノミナラス政府ト雖モ亦同意ヲ與フルコト能ハサルモノトス
惟フニ歲出豫算ニ付テ以上ノ如キ制限アリテ殊ニ憲法第六十七條ノ議會ノ自
由議定ヲ認メサルハ如何ナル理由ニ依ルヤト云フニ絶對的ノ自由議定ハ財政上
却テ不利益ナレハナリ。蓋シ一國ノ生命ハ恒久ニシテ從テ之ニ要スル經費モ常ニ
必要欠クヘカラサルモノアリ。然ルニ議會ノ組織ハ常ニ新ナルノミナラス又合議
體ノ常トシテ其ノ責任ノ歸着ニ至テモ必ラスシモ明カナラス從テ時トシテ一時
ノ感情上無責任ノ行動ヲ敢テスルコトナシト云フヘカラス。歲出豫算ニ於テ一方

ニ自由議定ノ部分ヲ認め他方ニ於テ制限的ノ部分ヲ認めタルハ即チ之ヲ調和シ
國家ノ必要ナル維持ト議會ノ有益ナル刺激ト併セ得テ極端ニ走ラザラシムコトヲ
期セシニ外ナラサルナリ。又彼ノ義務費ノ如キニ至リテハ、國家ト雖モ亦個人ノ權
利ヲ尊重セサルヘカラサル結果トシテ之ニ制限ヲ附スルノ至當ナルコト論スル
迄モナシ。

第二節 豫算議定ノ手續

豫算議定ノ手續ハ主トシテ議院法並ニ貴族院及衆議院規則ノ規定スル所ニシ
テ議會(衆議院)ニ提出セラル、ヤ大藏大臣ノ説明演說アルヲ從來ノ慣例トス。而シ
テ此ノ提出セラレタル豫算ハ豫算委員會ニ附託セラル、モノトス。

豫算委員ハ常任委任ノ一ニシテ一會期中繼續シテ其ノ任ニ在ルモノナリ。委員
會ハ衆議院ニ在テハ六十三人、貴族院ハ四十五人トス。委員會ニオケル豫算ノ審査
ニハ一定ノ期限ヲ附スルモノニシテ議院法第四十條ニ依レハ、政府ヨリ豫算案ヲ
衆議院ニ提出シタルトキハ豫算委員ハ其ノ院ニ於テ受取リタル日ヨリ二十一日
以内ニ審査ヲ終リ議院ニ報告スヘキモノトス。コレ豫算ハ兩院ノ議ヲ經テ晚クト

モ會計年度開始以前ニハ之ヲ成立セシムルノ必要アルニ依ル。

豫算委員會ニ於テハ先ツ總會議ヲ開キ大體ノ質問ヲナシ査定ノ方針ヲ決定シ
更ニ各分科ニ分レテ豫算各部ノ審査ヲナシ、其ノ結果ハ分科ノ主査ヨリ豫算委員
長ニ報告シ委員長ハ更ニ總會議ヲ開キテ之ヲ決定ス。

豫算委員會審査ノ決議ハ報告書トシテ議長ニ提出ス。議院ノ議決ハ項ヲ以テ單
位トシ漸次之ヲ議定ス、但シ法律案ニオケルカ如ク三讀會ヲ經ルコトヲ要セス。

第三節 豫算ノ成立及不成立

第一 豫算ノ成立

豫算ハ議會ノ議定ヲ經タル後裁可ヲ得茲ニ始メテ成立ヲ遂ケ公布スルモノト
ス。元來豫算ハ法律ト異リ其ノ效力行政部内ニ及フモノ、ミナルカ故ニ單ニ理論
ヨリ言ヘハ公布ヲ要セサルカ如シト雖モ、豫算發達ノ歴史ニ鑑ムルトキハ公布ノ
必要ナルコトヲ知ルヘシ。即チ公布ハ議會ノ議定ト同様ニ豫算ヲ行政部内ニ秘セ
シメス一般ニ公示シ最モ嚴正確實ニ施行センコトヲ期スルモノナレハナリ。

第二 豫算ノ不成立

會計法 第二編 豫算論 第三章 豫算ノ議定及成立 第二節 豫算議定ノ手續
第三節 豫算ノ成立及不成立

豫算ノ成立ハ裁可ニ依ルモノナレハ裁可ヲ得サルトキ其ノ成立セサルヤ論ナシ。然レトモ斯クノ如キハ殆ト實際上ニ於テ無シト云フモ可ナリ。而シテ其ノ他ニ豫算ノ不成立ノ原因ヲ尋ヌレハ或ハ一院カ豫算ヲ否決スルカ兩院ノ協議不調ニ終リタル場合或ハ豫算ノ議定前ニ閉會スルカ衆議院解散ヲ命セラレタル場合等トス。此等ノ場合ニハ憲法第七十一條ノ

帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシ

トノ明文ニ依リテ宜シク前年度ノ豫算ヲ施行セサルヘカラス。元來理論ヨリイフトキハ豫算ハ其ノ效力一年限リノモノナルカ故ニ豫算不成立ノ場合ニ於テ當然前年度ノ豫算カ其ノ效力ヲ生スルモノニアラス。唯此ノ憲法ノ規定存スルカ故ニ前年度ノ豫算ハ後年度ノ豫算トシテ其ノ效力ヲ發揮スルモノトス。此ノ規定ハ必要ナル規定ニシテモシモコレナクハ豫算不成立ノ場合ニ於テ常ニ紛争ヲ醸スノオソレアルナリ。

第三編 現計論

第一章 收入支出ノ原則

第一 總論

現計即チ豫算成立ノ後ニ於テ實際收入ヲ爲シ支出ヲ爲スニ付テハ一定ノ法則アリテ之ニ違フコトヲ許サス。何ソヤ曰ク現金收支命令ノ機關ト現金收支ノ取扱機關トヲ分チ原則トシテ相兼ヌルヲ得サルコト即チコレナリ。

惟フニ斯クノ如ク命令機關ト執行機關トヲ分離スル所以ノモノハ畢竟收支事務ノ確實ニシテ安全ナランコトヲ期スルニ依ルモノニシテ若シモ一人ニシテ兩者ヲ兼ヌルコトアラシカ其ノ局ニ當ル者ハ自然其ノ勢力ヲ逞フシテ專擅ノ處置ヲナスコトナシトセス。殊ニ當局者其ノ人ヲ得サルトキハ弊害百出シ虚偽ノ事實ヲ捏造シテ金錢ヲ私スルニ至ルヘキナリ。然ルニ今此ノ二者ヲ特定ノ機關ト爲ストキハ例之租稅ノ徵收ニ付テ見ルニ收稅官吏ハ自カラ命令ヲ發シ自ラ現金ヲ收入スルコトヲ得ス。收稅官吏ハ唯コレコレノ租稅ニ付テ若干圓ヲ國庫ニ納ムヘシトノ命令書ヲ發スル權能アルノミ。而シテ人民カ此ノ徵稅令書ニ依リテ實際現金ヲ拂ヒ込ムヘキ場所ハ收稅官吏ニアラスシテ全ク別箇ノ機關タル國庫タルヘシ。

之ト同様ニ支出ヲ爲ストキモ仕拂命令官ハ唯物品ノ買入ニ付某商人ニ一定ノ金額ノ仕拂ヲ爲スヘシトノ命令書ヲ發スルコトヲ得ルノミ、其ノ之レカ仕拂ノ任ニ當ル者ハ仕拂命令官ニアラスシテ前述セル國庫ナリトス。會計規則第二十九條ニ於テ「仕拂命令ノ職務ハ現金出納ノ職務ト相兼スルコトヲ得スト」規定セルモノコレナリ。斯クノ如クニシテ命令機關ハ以テ收入機關ヲ侵スコトヲ得ス、收入機關ハ命令機關ヲ侵スコトヲ得ス、兩者互ニ相牽制シテ財政ノ運用其ノ宜シキヲ得ルコトヲ得ルナリ。

第二 徵收ト收入

以上ノ如ク命令事務ト執行事務トハ全然相分離シテ行ハル、ヲ現計上一般ノ原則トシ從テ收入ニ付テイフモ收入ノ命令事務ト現金ノ收入事務トハ二者相異ナルモノトス。我現行法上前者ヲ稱シテ「徵收」ト云ヒ、後者ヲ稱シテ「狹義ノ收入」ト云フ。而シテ會計法ニ於テハ「通常收入」ナル文字ハ此ノ狹義ノ意味ニ用ヒラル、モノトス。例之、會計法第十條ニ於テ、

租稅及其ノ他ノ歲入ハ法律命令ノ規程ニ從ヒ之ヲ徵收スヘシト云ヘルハ即チ收入ヲ爲スヘキ命令ヲ爲スヘシトノ意味ニシテ、會計法及ヒ會計

規則ニ於テ此ノ徵收ノ權能アル者ヲ「歲入徵收官」トイフナリ。

然リ而シテ此ノ徵收ハ租稅ヲ徵收スル場合ト租稅外收入ヲ徵收スル場合トニ從ヒ其ノ用語ヲ異ニスルモノトス。會計法第十條第二項ニ曰ク、

法律命令ニ依リ當該官吏ノ資格アル者ニ非サレハ租稅ヲ徵收シ又ハ其ノ他ノ歲入ヲ「收納」スルコトヲ得ス

ト、是ニ由テ之ヲ觀レハ租稅ノ場合ニ其ノ收入ヲ命令スルハ同シク「徵收」ト云ヒ、租稅外收入ノ場合ニ其ノ收入ヲ命令スルハ「收納」ナリ。即チ「徵收」ニハ廣義ト狹義トアリテ、廣義ニハ一般ニ收入ヲ命令スルヲ云ヒ、狹義ニハ特ニ租稅ノ收入ヲ命令スルコトヲ云フナリ。

第三 支出ト仕拂

支出ニ付テモ命令スル事務ト現金ヲ取扱フ事務トヲ區別スルノ結果其ノ用語ヲ異ニス。即チ前者ノ場合ニハ之ヲ狹義ノ「支出」ト云ヒ、後者ノ場合ニハ之ヲ「仕拂」ト云フ。例之、會計規則第一百十六條ニ於テ、

金庫出納役ハ支出簿ヲ備ヘ歲出ノ科目ヲ區分シ仕拂豫算額、仕拂命令受領濟額ヲ登記スヘシ

ト云ヘリ。此ノ場合ニオケル支出ナル文字カ單ニ仕拂ノ命令ニシテ現金ノ仕拂ヲ包含セサルコトハ以上ノ規定ニ依テ之ヲ知ルニ難カラス。

次ニ仕拂ナル文字カ現金ノ仕拂ヲ意味スルコトハ例之會計法第十四條ニ於テ、國庫ハ法律命令ニ反スル仕拂命令ニ對シテ仕拂ヲ爲スコトヲ得スト規定シタルニ依テ知ルヘシ。

斯クノ如ク收入事務ニ付テハ通常現金ヲ收入スルコトヲ「收入」ト云フニ反シ、支出事務ニ付テハ通常現金ノ支出ヲ命令スルコトヲ「支出」ト云フハ如何ナル理由ニ依ルカ。コレ漠然トシテ各附ヲ附シタルモノト云フヘカラス。蓋シ收入事務ハ其ノ性質上他動的ノモノニシテ國家カ如何ニ急促ニ之ヲ欲スルモ債務者ノ行爲ニ依ルノ外ナシ。從テ收入事務ニ於テ其ノ最モ重キヲオクヘキハ現金ヲ國庫ニ拂込ムコトニシテ之レアリテ始メテ收入事務ハ其ノ效果ヲ告ケタルモノナリ。然ルニ支出事務ニ至リテハ其ノ性質上自動的ノモノニシテ、國家ニシテ之ヲ欲セハ直ニ自己ノ行爲ニ依テ之ヲ完了スルコトヲ得ヘク、苟クモ國家ニシテ信用ト德義トヲ基礎トシテ他ニ對スルニ於テハ其ノ支出事務ハ現金ノ仕拂ヲマタス仕拂ノ命令アリシノミニテ確實ナリト云フコトヲ得ヘシ(國家自體ヨリ見ルトキハ)即チ支出事

務ニ付テ其ノ重キヲオクヘキハ仕拂ノ命令ニシテ、實際現金ノ仕拂ヲナスカ如キハ之ニ附隨スル自然的行動トモ見ルコトヲ得ヘキナリ。之ヲ要スルニ收入事務ト支出事務トハ其ノ主トスル所相異ナルカ故ニ、從テ通常用ヒラル、用語モ反對ノ側ニ立チ、一ハ現金ノ取扱ヲナシ一ハ其ノ命令ヲナスコトヲ稱スルモノトス。

第二章 收支ノ命令

第一節 徵收

第一 徵收機關

歳入徵收ノ任ニ當ル官吏ハ之ヲ「歳入徵收官」或ハ「歳入ヲ徵收スル官吏」ト云フコトハ既ニ述ヘタリ。然リ而シテ此ノ歳入徵收官カ收入ノ命令ヲ發スルニ付テハ其ノ收入ヲ爲スコトカ果シテ適法ニシテ正當ナルヤヲ調査シ而シテ之ヲ決定セサルヘカラス。此ノ決定ニ依リ當該官吏ハ命令ヲ發スルモノニシテ此ノ調査シ決定スルコトヲ略稱シテ「調定」ト云フナリ。

歳入徵收官ハ其ノ收入ノ種類ヲ異ニスルニ從ヒ之ニ當ル者ニモ亦差異アリ大別スルトキハ

1) 稅務署長及稅關長
2) 各官廳長官

ノ二ト爲スコトヲ得ヘシ。前者ハ狹義ノ徵收即チ專ラ租稅徵收事務ノ責ニ任スル者ニシテ、後者ハ收納即チ專ラ租稅外收入ノ收納事務ノ責ニ任スル者ヲ云フモノトス。國稅徵收法施行細則第一條(明治三十三年大藏省令第十號)ニ於テ

國稅徵收法施行規則第一條ノ納稅告知書ハ稅務署長ニ於テ第一號書式ニ依リ之ヲ調製スヘシ

ト規定シ、諸收入收納取扱規程第一條(明治三十三年大藏省訓令第二十七號)ニ於テ

警視廳、北海道廳、府縣稅關稅務監督局及ヒ稅務署ニ於テ收納スル國稅外ノ諸收入ハ大藏省主管トシテ特別ノ規程アルモノヲ除クノ外此規程ニ依リ取扱フヘシ

ト規定シタルニ依テ知ルヘシ。

斯クノ如ク歲入徵收官ハ分レテ二種トスルコトヲ得ヘシト雖モ、尙ホ特別ノ場合ニ於テハ歲入徵收官以外ノモノヲシテ歲入徵收官ニ代テ(稅務署長ニ代テ)徵收事務ニ當ラシムルコトアリ。國稅徵收法第五條(明治三十一年法律第二十一號)ニ依レハ

市町村ハ其ノ市町村内ノ地租及ヒ勅令ヲ以テ命シタル國稅ヲ徵收シ其ノ税金ヲ國庫ニ送附スルノ責任アルモノトス

トノ規定アリテ市町村モ亦徵收機關タルコトアルナリ。而シテ地租ノ外尙ホ如何ナル稅種ニ付テ徵收ノ權利アリヤハ、市町村ニ於テ徵收スヘキ國稅ニ關スル件(明治三十年勅令第百九十五號)ニ規定スル所ニシテ、(1)第三種ノ所得ニ係ル所得稅(2)營業稅(3)家用醬油稅(4)賣藥營業稅コレナリ。即チ以上地租以下合計五種ノ租稅ニツキテハ例外トシテ市町村ハ徵收機關タリ。蓋シ此等ノ諸稅ハ其ノ納稅者頗ル多數ニ上ルヲ以テ一々稅務署ヨリ納稅告知書ヲ發スルノ煩ニ堪ヘサレハナリ。尙ホ注意スヘキハ此ノ場合ニ於テ市町村ハ徵收機關ナリト云フト雖モ其ノ調定者ハ依然トシテ稅務署長ニシテ市町村ハ唯納稅者ニ告知書ヲ發スルニ止マルモノナルコトコレナリ。

第二 徵收上ノ手續

徵收上ノ手續ハ之ヲ分チテ調定並ニ徵收命令書ノ發達ト登簿並ニ報告書ノ作成ト爲スコトヲ得ヘシ。

一 調定ノ手續ハ徵收官内部ノ處務規定ニ過キササルヲ以テ茲ニ之ヲ説カス。徵收

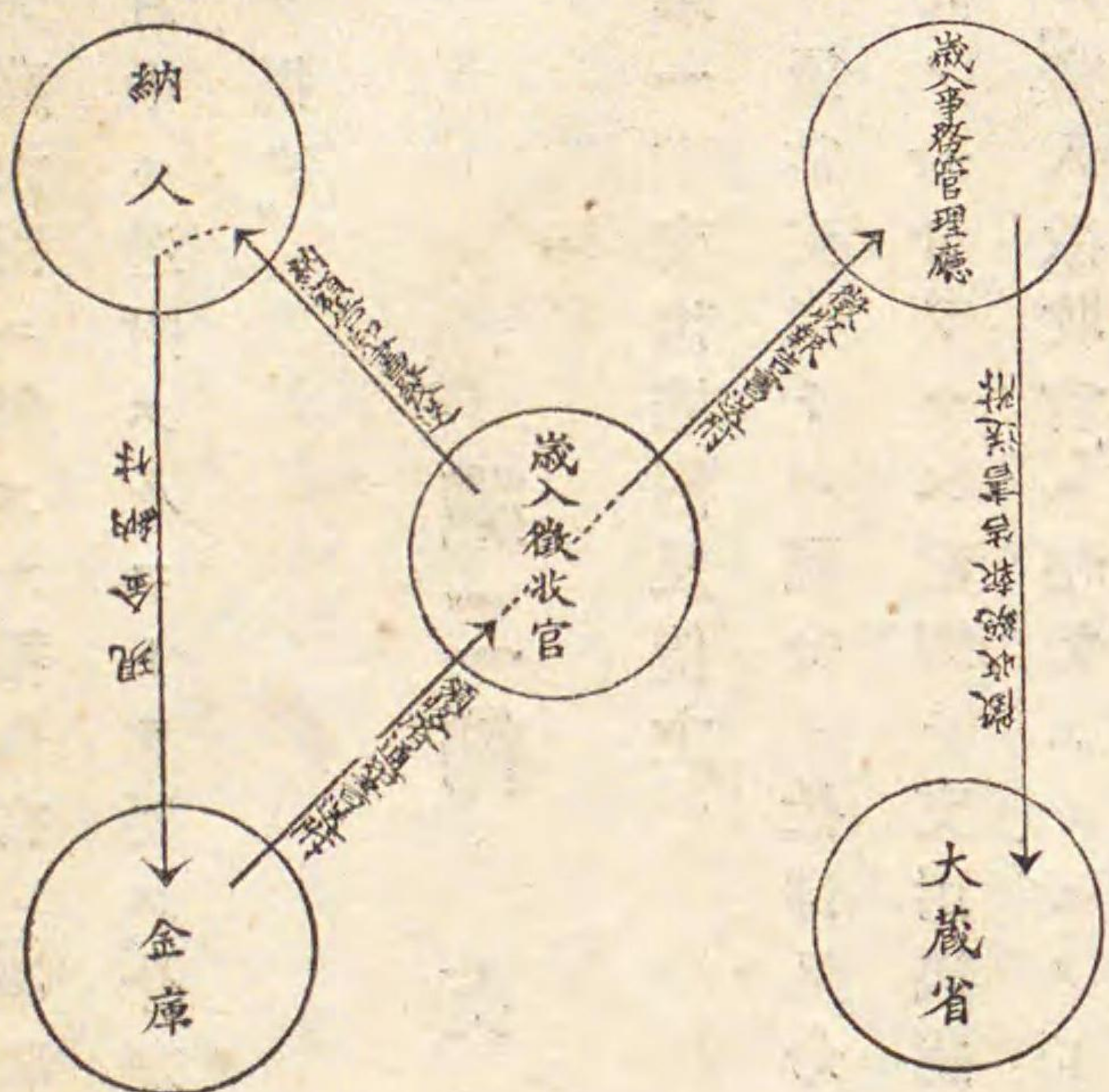
命令書ニ付テイハ、徴收命令書ハ調定ノ結果ニ付キ作成シ發送スルモノニシテ左ノ三種アリ

- (1) 納税告知書
- (2) 納額告知書
- (3) 納入告知書

コレナリ。此ノ内前二者ハ租税徴收ノ場合ニ用ヒラレ第三ハ租税外收入ノ收納ニ用ヒラル。納税告知書ト納額告知書トノ差異ハ後者ハ前者ノ階梯ヲナスニアリ。即チ市町村ニ於テ租税徴收事務ニ當ル場合ニ兩者併用ノ必要アルモノニシテ、其ノ然ラスシテ徴收官ヨリ直接ニ納税者ニ對シテ命令ヲ發スル場合ニハ納税告知書アルノミニシテ納額告知書ノ必要ナシ。市町村カ徴收機關タルトキハ先ツ歳入徴收官ヨリ市町村ニ對シテ納額告知書ヲ發シ、市町村ハ之ニ基キ更ニ各納税者ニ對シテ納税告知書ヲ發スルモノトス。納税者期日マテニ税金ノ納附ナキトキ如何ナル方法ヲ探ルヘキヤハ國稅徵收法ニ規定スル所ナレトモ會計論ノ範圍外ニ屬スルヲ以テ茲ニ之ヲ説カス

二 歳入徴收官吏ハ會計規則第百十四條ニ依リ「徴收簿」ヲ備ヘサルヘカラス。又同

第百十五條ニ依リ各省大臣ハ「歳入簿」ヲ備ヘサルヘカラス。徴收簿ハ豫算ノ各項目ニ付キ記載スルモノニシテ、一言以テイハ、徴收ノ結果ヲ明カナラシムルニ在リ即チ調定濟額ノ外之ニ對スル收入濟額、不納缺損額、收入未濟額ヲ記載スルコトヲ要ス。而シテ其ノ記載ノ基礎トナルモノハ會計規則第二十五條第二十七條ニ依リ金庫及ヒ收入官吏カ徴收官ニ對シテ爲ス所ノ報告書ニ據ルモノトス。然リ而シテ歳入徴收官ハ又一方ニ於テハ會計法第三十條ニ依リ其ノ徴收簿ノ結果ニ據リ毎



月「徴收報告書」ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ各省大臣ノ定メタル期限ニ之ヲ所管大臣ニ送附セサルヘカラス。各省大臣ハ此ノ徴收報告書ニ據リ前述セル「歳入簿」ニ記入スルモノニシテ、歳入簿ノ性質ハ全ク徴收簿ニ同シ。尙茲ニ注意スヘキハ各省大臣ハ此ノ場合ニ於テ「歳入」ノ事務管理應「ナル名稱」ヲ附セラル。何トナレハ所管各廳ノ歳入ノ徴收事務ヲ管理シテ更ニ大蔵大臣ニ報告スル義務ヲ有スレハナリ。歳入事務管理應ノ

大藏大臣ニ對スル報告書ハ「徵收總報告書」ト云ヒ會計法第三十一條ニ依リ其ノ翌月中ニ送附スルコトヲ要ス。今左ニ徵收手續ヲ明了ナラシムル爲メ上ノ如キ略圖ヲ掲ク。

第二節 支出

第一 支出機關及債主

通常支出トハ現金ノ仕拂ヲ命令スルコトナルハ既ニ説ケルカ如シ。然リ而シテ此ノ命令ヲナス者即チ支出機關ハ之ヲ稱シテ「仕拂命令官」ト云ヒ。恰モ徵收ニオケル「歳入徵收官」ニ相對スルモノトス。

然リ而シテ此ノ仕拂命令官ハ何人カ之ニ當ルヤト云フニ會計法第十三條ニハ左ノ明文アリ

國務大臣ハ其所管定額ヲ使用スル爲ニ國庫ニ向ヒテ仕拂命令ヲ發スヘシ但別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ他ノ官吏ニ委任シテ仕拂命令ヲ發セシムルコトヲ得茲ニ別ニ定ムル所ノ規程トハ「仕拂命令委任規程」(明治二十二年勅令第八十九號)ノ謂ニシテ之ニヨレハ

(1) 各省大臣ハ仕拂豫算額ヲ定メテ之ニ委任スルヲ要ス

(2) 委任ヲ受ケタル仕拂命令官ハ其ノ發シタル仕拂命令ニ付責任ヲ有スルモノトス

是ニ由テ觀レハ仕拂命令官ハ現行法上

(1) 國務大臣

(2) 國務大臣ニ依リ委任セラレタル官吏

ノ二者ナルコトヲ知ルヘシ。而シテ第二ノモノハ第一ト區別スル爲メ、委任仕拂命令官又ハ「受任仕拂命令官」ト云フ。

會計法上ハ上述ノ如ク國務大臣ヲ以テ仕拂命令官トスト雖モ、大臣ハ國務大臣タル資格ニ於テ(憲法第五十五條ニオケル)仕拂命令官タルニアラサルハ勿論ニシテ行政上ノ長官トシテ所管省ヲ統轄スルカ爲メ仕拂命令官タルモノトス。是レヲ以テ此ノ「國務大臣」ナル文字ハ「各省大臣」ト改ムルヲ以テ妥當ト爲スヘキカ。又實際上ニ於テハ多數ノ仕拂命令ニ對シ一々各省大臣カ之ニ決定ヲ與フルコトハ困難ナルヲ以テ多ク次官又ハ局長等ヲシテ之ニ當ラシムルノ有様ナリ。

次ニ委任仕拂命令官ハ何人ヲ指スヤト云フニ、凡テ各省所管中行政上獨立ノ形

體ヲ爲セル各官廳ノ長官ヲ以テスルモノトス而シテ茲ニ各省所管トハ豫算上ニ
オケル所管ノ謂ニシテ必ラスシモ行政上官制上ノ所管ト一致スルモノニアラス
例之内閣貴族院事務局衆議院事務局ノ如キハ豫算上大藏省ニ屬スルカ故ニ其ノ
書記官長ハ各大藏大臣ヨリ委任ヲウケテ仕拂命令官タル職務ヲ行フモノトス。但
シ此ノ大藏省所管ヲ除ケハ各省所管トハ豫算上ノモノト行政上官制上ノモノト
一致スルコトナル。今其ノ一例ヲ舉クレハ各府縣知事ノ如キ内務省所管ニ屬シ
内務大臣ヨリ委任ヲウクルモノトス。

次ニ仕拂命令官ヨリ仕拂ノ命令ヲ受理スル者ハ何人ナリヤト云フニ會計法第
十五條ニ曰ク

國務大臣ハ政府ニ對シ正當ナル債主又ハ其ノ代理人ノ爲ニスルニ非サレハ仕
拂命令ヲ發スルコトヲ得ス
左ノ諸項ノ經費ニ限リ國務大臣ハ主任ノ官吏ニ委任シ又ハ政府ノ命シタル銀
行ニ委任シテ現金仕拂ヲ爲サシムル爲ニ現金前渡ノ仕拂命令ヲ發スルコトヲ
得
即チコレニ依レハ仕拂命令ノ受理者ハ

(1) 正當債主又ハ其代理人

(2) 現金前渡官吏及ヒ銀行

ノ二者ナルコトヲ知ルヘシ。茲ニ正當ナル債主トハ個人ニシテ(又ハ法人)正當ナル
事由ニヨリ法令又ハ契約ノ結果トシテ一定ノ金額ヲ請求シ得ヘキ權利アル者ヲ
云フ。

次ニ現金前渡官吏又ハ銀行ハ或ル一定ノ場合ニ於テハ彼等ニ現金ヲ前渡シオ
キ國庫ニ代リテ現金仕拂ノ任ニ當ラシムルコトカ便利ナルコトアリ。此ノ場合ニ
於テ即チ彼等ハ仕拂ノ命令ヲ受理シ從テ現金ヲ豫メ所持スルモノナリ。故ニ其ノ
命令ノ受理ハ正當債主ニオケルト其ノ理由ヲ異ニシ、正當債主ニ於テハ之ニ依テ
仕拂ヲ受クル現金ハ自己ノ所有トナルモ、現金前渡官吏ニ於テハ此ノ仕拂ヲ受ケ
タル現金ハ國家ノ金錢ニシテ自己ノ所有トナルニアラサルナリ。

今會計法第十五條ニ依リ現金前渡ノ仕拂命令ヲ發スヘキ場合ヲアクレハ左ノ
如シ。

(1) 國債ノ元利拂 會計規則第四十二條ニ曰ク會計法第十五條ニ據リ政府ノ
命シタル銀行ニ委任シテ現金仕拂ヲ爲サシムル爲メニ發スル現金前渡ノ仕拂

命令ハ國債元利金仕拂ノ場合ニ限ルト。蓋シ國債ノ元利拂ハ其ノ受取人ハ全國ニ普ネク到底國庫ニテ一々之ニ當ルコト能ハサルヲ以テ、多數ノ銀行ヲシテ之ニ當ラシムルナリ。

(2) 軍隊軍艦及官船ニ屬スル經費 此ノ場合モ多數ノ人ニ仕拂ヲ要スルノミナラス軍隊ハ行軍ヲナスコトアリ軍艦官船ハ航海ヲナスコトアリテ其ノ場所一定セス金庫ニテ仕拂ヲナスコト不便ナレハナリ。

(3) 在外各廳ノ經費 金庫ハ國內ニ限リテ存在スルカ故ニ公使館領事館等ノ經費ハコレニ依ルノ外ナシ。

(4) 前項ノ外總テ外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費 例之軍艦ノ注文ヲナスカ如シ。

(5) 運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費 コレ金庫トノ距離遠隔ナルヲ以テ、一々金庫ニテ仕拂フコト、セハ債主ニ於テ非常ニ不便ナルカ爲メナリ。

(6) 應中常用經費ニシテ一個年ノ總費額千圓ニ滿タサルモノ コレ全ク便宜ニ出ツルモノニシテ、此ノ如キ小規模ナル役所ニテハ其箇々ノ仕拂金額モ少額ニ止マレハナリ。

(7) 場所ノ一定セサル事務所ノ經費 例之測量ニ從事スル場合ノ如キハ常ニ變動スルカ故ニ金庫ニテ仕拂ヲ爲スコト、セハ常ニ其ノ金庫ヲ異ニセサルヲ得スシテ不便ナレハナリ。

(8) 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費但シ一主任官ニ付六千圓マテヲ限ル コレ所謂「直營工事」ニシテ「請負工事」ニ對スルモノナリ。直營工事トハ工事ヲ爲スニ政府自ラ其ノ經營ニ當ルモノニシテ、之カ爲メニハ一切ノ建築材料ヲ購入シ職人ニハ日當ヲ給與セサルヘカラス。是レヲ以テ一々金庫ニ於テ仕拂ヲナスコト、セハ其ノ煩ニ堪ヘサルヘシコレ現金前渡官吏ヲオクノ必要ナル所以ナリ然レトモ其ノ金額ハ之ヲ制限シテ何時ニテモ六千圓以上ノ現金ヲ所有スルコトヲ禁止セリ。茲ニ六千圓マテヲ限レルハ一箇年ノ總費額ヲ云フモノニアラス何時ニテモ六千圓以上ニ上ルヘカラサルコトヲ云ヘルナリ。又一主任官ト云ヘルカ故ニ數箇ノ直營工事ヲ擔當スルモ尙ホ六千圓ノ制限ヲウクルナリ。加之、當該官吏カ既ニ現金前渡官吏トシテ若干圓ヲ保管シ、更ニ其ノ後ニ同人ニ現金ノ前渡ヲナスニ付テハ一定ノ制限ヲ設ケタリ。コレ會計規則第四十條ニ規定スル所ニシテ、左ノ場合ニ限り之ヲ許スモノトス。

(I) 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額三分ノ二以上ノ仕拂濟證明アリタルトキ。但此場合ニ於テハ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト前ニ發シタル仕拂命令ノ仕拂濟證明未濟ノ金額ト合シテ六千圓ヲ超ユルコトヲ得ス。

(II) 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額六千圓未滿ニシテ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト合シテ六千圓ヲ超ヘサルトキ

第二 支出上ノ手續

仕拂命令官ノ發スル支出ノ命令書ハ之ヲ稱シテ「仕拂命令」ト云フ。仕拂命令ニハ左ノ五種アリ。

- (1) 普通ノ仕拂命令
 - (2) 現金前渡ノ仕拂命令
 - (3) 案内仕拂命令
 - (4) 集合仕拂命令
 - (5) 金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スル仕拂命令
- 普通ノ仕拂命令ハ政府ガ個人ニ對シテ債務ヲ負ヒタル場合ニ發スルモノニシテ、仕拂命令官ハ仕拂命令ヲ發シテ之ヲ債主ニ交附ス。仕拂命令ニハ債主若クハ其

ノ代理人ノ氏名仕拂フヘキ金額、支出科目、年度番號ヲ記載スルコトヲ要ス。又仕拂命令ハ一項毎ニ之ヲ發スルモノトス。故ニ同一人ニ對スル支出事項ニテモ豫算上其ノ項ヲ異ニスルトキハ同一ノ仕拂命令ニ記載スルコトヲ得ス。然ルニ數箇ノ支出事項アルトキ豫算上其ノ項ヲ同フスルトキハ一葉ノ仕拂命令ニ合算シテ記載スルコトヲ得ヘシ。コレ會計規則第三十三、三十四條ニ規定スル所タリ。

現金前渡ノ仕拂命令ハ上述セル現金前渡官吏(又ハ銀行)ニ對シ現金ノ前渡ヲ爲スヘキ場合ニ發スルモノニシテ、仕拂命令官ハ仕拂命令ヲ發シテ之ヲ交附ス。而シテ此ノ仕拂命令ニハ前渡ヲ受クヘキ官吏ノ資格氏名、銀行ナレハ其ノ名稱、前渡ヲナスヘキ金額、支出科目、年度及ヒ番號ヲ記載スルコトヲ要ス。尙ホ會計規則第三十九條ニ依レハ現金前渡ノ仕拂命令ハ左ノ區分ニ從ヒ之ヲ發スルヲ要ス。

- (1) 當時ノ費用ニ係ルモノハ每一箇月分ノ費額ヲ豫定シテ仕拂命令ヲ發スルコト。但シ在外官廳ノ經費、外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費、運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費、其ノ他仕拂場所ノ一定セサル經費ハ事務ノ必要ニ依リ二箇月以上六箇月分マテ合セテ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ヘシ。
- (2) 隨時ノ費用ニ係ルモノハ肝要ノ費額ヲ豫定シテ、事務上差支ナキ限りハ成

ルヘク分割シテ仕拂命令ヲ發スルコト。
 (3) 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費ハ、工事ノ大小ニ由リ其ノ所要ヲ量
 リ六千圓以内ニ於テ仕拂命令ヲ發スルコト。
 以上ノ規定ノ趣旨ハ現金前渡官吏ニハ成ルヘク現金ヲ多額ニ保管セシメサル
 ニ在リトス。蓋シ多額ノ現金ヲ保管スルトキハ或ニ禍心ヲ包藏シテ之ヲ費消スル
 コトナシト云フヘカラス、而シテ之カ爲メ國庫モ亦損害ヲ蒙ルニ至ルヘキナリ。故
 ニ此ノ弊害ヲ豫防シ萬一斯クノ如キコトアリトスルモ成ルヘク其ノ範圍ヲ狭ク
 セントスルナリ、

案内仕拂命令ハ以上ノ普通ノ仕拂命令又ハ現金前渡ノ仕拂命令ヲ發行スルニ
 當リ、之ト同時ニ金庫ニ對シ發送スルモノニシテ、現金ノ仕拂ノ請求アルトキハ其
 ノ請求ニ應シテ仕拂アラシコトヲ豫メ通知スル案内狀ナリ。故ニ金庫ニ於テハ仕
 拂命令ノ呈示アリタルトキハ之ニ對スル案内仕拂命令ト對照シテ其ノ誤リナキ
 コトヲ確メタル上仕拂ヲ爲スモノナリ。コレカ爲メニハ仕拂命令ハ三連切符トナ
 シ、一ハ「原符」トシテ仕拂命令官ノ手許ニ手控トナシ、一ハ「本符」トシテ正當受理人ニ
 交附シ、一ハ「案符」トシテ金庫ニ送附スルコト、シ、此等三連切符ニハ其ノ切り目ニ

仕拂命令官ノ割印ヲナシオキ、金庫ノ對照ニ便宜ヲ計ルモノトス。此クノ如クニシ
 テ仕拂命令又ハ案内仕拂命令ヲ偽造變造シテ金庫ヨリ現金ノ仕拂ヲ受クルコト
 ヲ得サラシム

集合仕拂命令ト普通ノ仕拂命令トハ、其ニ正當債主ニ仕拂ヲ要スル場合ニ發行
 スルモノナリト雖モ、集合仕拂命令ハ其ノ名ノ示スカ如ク二人又ハ二人以上ノ債
 主ニ對シ仕拂ヲ爲スヘキ場合ニ於テ發行スルモノナリ。但シ各人ヘノ仕拂ハ豫算
 上同一ノ項ニ屬スヘキモノナラサルヘカラス、コレ普通ノ仕拂命令ニ在テ同一人
 ニ二口ノ仕拂ヲ要スル場合ト同シコトナリ。會計規則第三十四條然レトモ集合仕
 拂命令ニ在テハ普通ノ仕拂命令ト異リ之ヲ債主ニ交附スルモノニアラス、直接ニ
 金庫ニ送附スルモノトス。此ノ點ハ案内仕拂命令ト同一ニシテ、從テ集合仕拂命令
 ニハ案内仕拂命令ヲ發行スルノ必要ナシ。又集合仕拂命令ニハ會計規則第三十三
 條ニ依リ各債主ノ金額氏名表ヲ添付スルコトヲ要ス。蓋シ集合仕拂命令ハ普通ノ
 仕拂命令ヲ多數ニ發行スル手數ヲ省略スルノ趣旨ニ出テタルモノナリ。

「金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スル仕拂命令」ナル長々シキ名稱ヲ有セル
 仕拂命令ハ集合仕拂命令ト同シク直接ニ金庫ニ送附セラレ從テ案内仕拂命令發

行ノ必要ナキモノトス。蓋シ此ノ場合ニ於テ之ヲ正當債主ニ送附スルコト、セハ債主ハ其ノ送附セラレタル仕拂命令ヲ先ニ金庫ニ送附シ茲ニ始メテ現金ノ送附ヲ受クルコト、ナリ其ノ間或ハ紛失ノ虞レナキヲ保セス。然ルニ今此ノ仕拂命令ヲ直接ニ金庫ニ送附シ債主ニハ通知書ヲ發スルコト、セハ仕拂命令紛失等ノ虞レナク頗ル完全ナルヲ以テナリ

斯クノ如ク仕拂命令ニハ種々ノ種類アリテ其ノ形式發送法等ニ付テ差異アリ而シテ受理人ニ交附スヘキ仕拂命令ニ在テハ之ヲ交附スルト同時ニ各其ノ領收證書ヲ徴スヘキナリ。又以上ノ仕拂命令ヲ交附スルニ先チ成ルヘクハ其ノ交附ヲ爲サントスル前日ニ於テ其ノ案内仕拂命令ヲ金庫ニ送附スヘク臨時至急ヲ要スル場合ノ外ハ之ニ依ルヘキモノトス。又仕拂命令ノ發行期日ニハ毎月ノ計算整理ノ爲メ月末ニハ之ヲ制限セリ。即チ普通ノ仕拂命令、現金前渡ノ仕拂命令、集合仕拂命令ハ毎月二十八日(二月及ヒ十二月ハ二十六日)限リトス。但シ法規ニ於テ仕拂期日ノ定マレルモノ及ヒ臨時至急ヲ要スルモノハ此ノ限ニアラス。

集合仕拂命令竝ニ金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スル仕拂命令ニ付テハ上述ノ如ク金庫ニ送附スルト同時ニ別ニ通知書ヲ債主ニ送附スルモノトス。

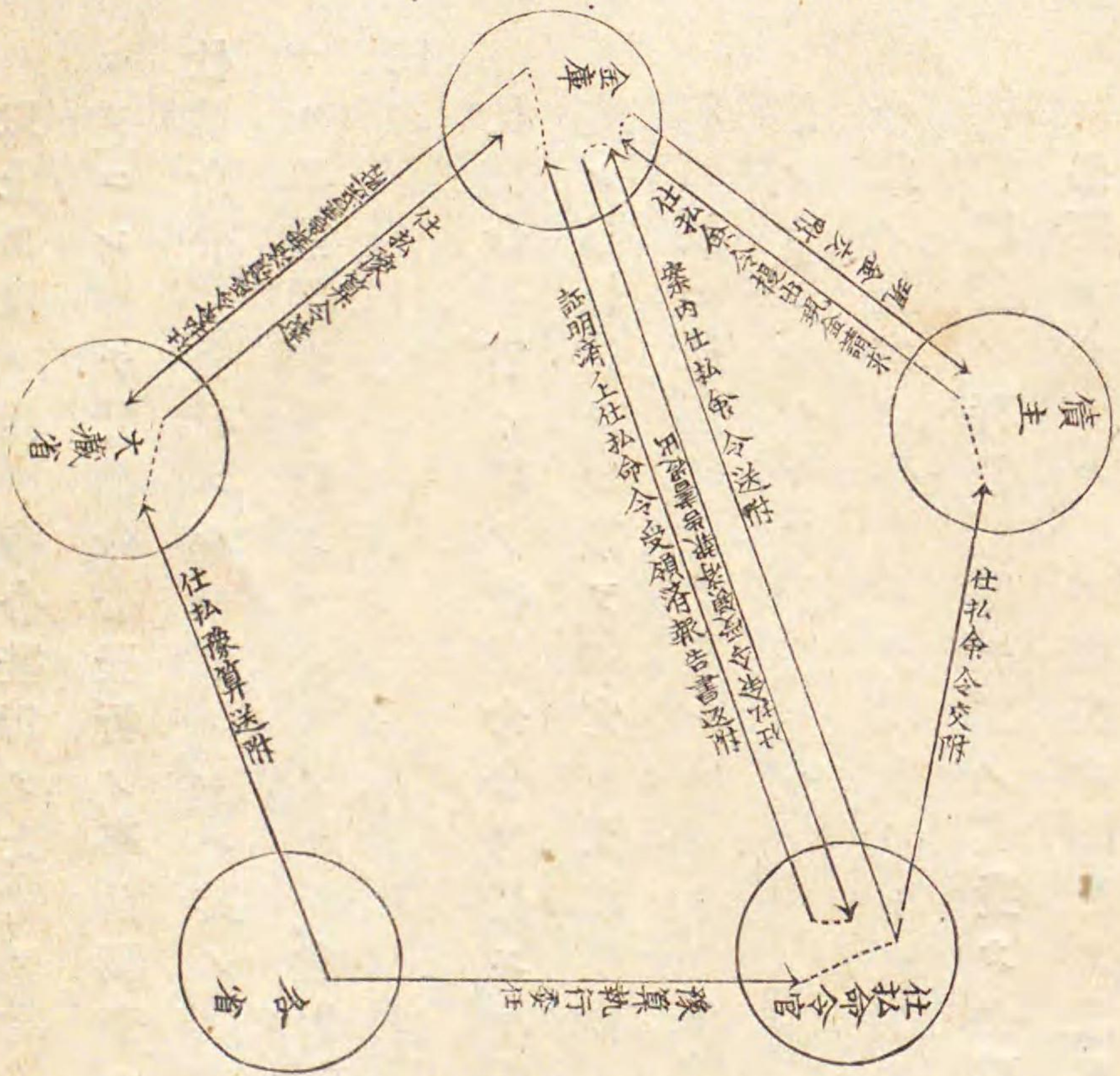
仕拂命令又ハ通知書ヲ盜取セラレ又ハ亡失シタル場合ハ明治三十八年大藏省令第三十九號ヲ以テ規定セラレタリ。即チ記名者ハ書面ヲ以テ仕拂命令ニ指定シタル金庫ニ届出ツルコトヲ要ス。此ノコトハ次章ニ至リテ説明スル所アルヘシ。

最後ニ仕拂命令ノ發行期日ニ付テハ會計規則第四十四條ニ特別ノ規定アリ曰ク

各年度ニ屬スル經費ヲ精算シテ仕拂命令ヲ發スルハ翌年度五月三十一日限リトス

ト是レヲ以テ徵收命令書ニ在リテハ規定ニ何等ノ特例ヲ認メサルカ故ニ會計年度ノ末日マテニ發行スルコトヲ要スルモ、仕拂命令ニ至リテハ年度經過後二月間ハ猶豫ノ特典アルモノト云フヘシ。

第三 仕拂命令ノ事前調査



以上ヲ以テ仕拂命令發行ノ大體ヲ説明シタリト雖モ尙ホ重大ナル一事項ヲ逸セリコレ即チ仕拂命令發行ノ事前調査ナリ蓋シ仕拂命令官ハ自己ノ責任ヲ以テ仕拂命令ヲ發行スルモノナレハ其ノ之ヲ發行スルニ當テヤ種々ノ點ニ付テ相當ナル事前調査ヲ行フヘキモノナリ會計規則第三十二條ハ此ノ點ニ付キ規定シテ曰ク

仕拂命令官ハ總テ仕拂命令ヲ發スル前其ノ經費ハ正當ニシテ必要ナルヤヲ調査シ該經費ノ金額ヲ算定シ又該經費ハ仕拂豫算額ニ超過スルコトナキヤ支出科目及ヒ所屬年度ヲ誤ルコトナキヤ該經費ハ豫算ヲ以テ定メラレタル目的ニ違フコトナキヤヲ調査スヘシ

ト今此ノ規定ヲ分析シテ説明スレハ左ノ如シ

(1) 繼費ノ秤價 即チ其ノ經費カ必要ニシテ正當ナリヤ否ヤヲ調査スヘシ茲ニ必要ナリトハ其ノ經費カ政府ノ需要上必要止ムヲ得サルヲ云ヒ經費カ正當ナリトハ經費ノ秤價カ適當ノ度合ニアルコトヲ云フ是レテ以テ必要ナル經費ハ必ラスシモ正當ニアラス正當ナル經費亦必ラスシモ必要ナル經費ニアラス二者各相異ナルヲ以テ此ノ兩者ニ通シテ考慮スル所ナカルヘカラス

(2) 經費ノ算定 上述ノ如ク經費カ必要ニシテ正當ナリトセハ支出茲ニ定マルト雖モ更ニ其ノ金額ノ算定ニ誤リナキヲ期セサルヘカラスコレイフ迄モナキコトナリ

(3) 仕拂豫算範圍内 仕拂豫算トハ各省大臣カ豫算各款項ノ範圍内ニ於テ更ニ之ヲ分割シ委任仕拂命令官カ豫メ仕拂命令ヲ發行シ得ヘキ範圍即チ其ノ使用シ得ヘキ限界ヲ定メタルモノヲ云フ各省大臣ハ會計規則第十一條ニ依リ毎年度決定ノ豫算定額ニ基キ委任仕拂命令官毎ニ所要ノ費額ヲ定メ仕拂豫算ヲ調製スルヲ要シ此ノ仕拂豫算ハ各項ノ金額ヲ示スヘキモノトス而シテ仕拂豫算ヲ調製スレハ大藏大臣及會計検査院ニ送付スヘク之ヲ更定シタルトキ亦同シ斯クノ如ク仕拂豫算ハ支出上ノ基礎ヲ爲スモノニシテ金庫ニ於テモ大藏大臣ノ令達ニ依リ之レヲ知悉シ其範圍内ニテ仕拂ヲ爲スヘキモノナリ第十二條三條是レヲ以テ經費ノ支出ニツキ既ニ第一第二ノ點ヲ調査セハ更ニ此ノ點ニ付キ調査スヘク若シ仕拂豫算ノ殘額缺乏ヲ告クルトキハ經費ノ支出ハ見合セサルヘカラス

(4) 支出科目及年度所屬 茲ニ支出科目トハ豫算ノ款項ヲ云フ即チ經費ノ支

出ニハ豫算ノ款項ヲ過マラス、支出スヘキ年度違ヒヲ爲サ、ル様注意セサルヘカラス。前者ニ付テハ會計法第十二條ニ左ノ如キ明文アリ。

國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス

ト、茲ニ「豫算ニ定メタル目的」トハ款項ノ區分ニ外ナラス。元來此ノ文字ノ解釋ニ付テハ政府ト會計検査院トノ間ニ其ノ説ヲ異ニシ、政府ハ以テ款項ノ區分ノ謂ニ外ナラストナシ、検査院ハ款項ノ謂ニアラスシテ實際豫算編製ニ際シ必要ナリト認メタル特定ノ事實ヲ指スモノトセリ。然レトモ豫算ハ單ニ款項ヲ以テ成ルニ外ナラサルカ故ニ、豫算ニ定メタル目的トハ款項ノ區分ヲ指スモノナリト云ハサルヘカラス、豫算ニ特別ノ表示アラハ兎ニ角コレナキ以上ハ政府ノ見解ヲ以テ正シトスヘシ。

尙ホ此ノ款項定額外ノ使用ト款項ノ流用トハ相類似スルモ其ノ意味ヲ點ニス。即チ前者ハ其ノ款項ニ記載セル金額ヲ其ノ表記事項以外ニ使用スルヲ云ヒ後者ハ直接ニ表記事項以外ニ使用スルニアラサルモ、其ノ使用金額タルヤ元來其ノ款項ニ元ヨリ計上セラレタルニアラスシテ他ノ款項ヨリ填補シタルモノナ

ルコトヲ云フ。之ヲ換言セハ前者ハ豫算定額外直接ノ使用ナリ、後者ハ定額外間接ノ使用ナリト云フコトヲ得ヘシ。

仕拂命令官ハ以上ノ諸點ニ付事前調査ヲナシ然ル後仕拂命令ノ發行ヲ爲スヘキモノナリ。若シ此等ノ内或ル點ニ付テ手落アルトキハ仕拂命令官ハ其ノ責任セサルヘカラス。

第三節 豫備金ノ支出

第一 豫備金支出ノ制限

豫備金ハ既ニ第二編ニ説明セルカ如ク憲法上ニ其ノ基礎ヲ有シ豫算ニ計上セラレ、モノナリ。然レトモ其ノ支出ニ至リテハ他ノ費目ト異リ特別ノ原則ニ支配セラレ、モノトス。蓋シ豫備金ハ集中主義ノ結果トシテ大藏省所管ノ豫算中ニ計上セラレ、大藏大臣ノ管理ニ屬スルモノニシテ會計規則第十六條ニモ

豫備金ハ大藏大臣之ヲ管理ス

トノ規定アリ、各省大臣ハ豫備金支出ノ必要アル毎ニ之ヲ大藏大臣ニ謀ラサルヘカラス。但シ大藏大臣ハ唯豫備金ヲ管理スルニ過キサレカ故ニ大藏省所管中ニア

レハトテ大藏大臣ノ獨斷ヲ以テ之レヲ左右スルコト能ハサルナリ。
斯ノ如ク豫備金ハ大藏大臣ノ管理ニ屬シ各省大臣ハ其必要ニ應シ大藏大臣ニ
謀ラサルヘカラサルモノナルモ、モト目的ノ一定シタル科目ニアラサルカ故ニ動
モスレハ濫出ニ傾キ易キモノナリ。是ヲ以テ豫備金ノ支出ニ付テハ二箇ノ制限ヲ
設ケタリ。即チ

- (1) 豫備金ヲ以テスル費途ノ制限
- (2) 豫備金ヲ以テ支出セル金額ノ流用禁止

コレナリ
先ツ第一ニ付テイハンニ豫備金ヲ以テスル費途ノ制限ハ會計規則第十八條ニ
規定セリ、曰ク

第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ハ毎年度豫メ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
ト、蓋シ第一豫備金ハ既ニ説クカ如ク豫算ノ或ル款項ニ存在スル又ハ之ニ包含セ
ラル、所ノ費途ニアツルモノニシテ、從テ其ノ費途ニ付テモ之ヲ制限シ得ヘキナ
リ。第二豫備金ニ至リテハ全ク豫算ノ款項ニ存在セサル若クハ包含セラレサル費
途ニアツルモノナレハ殊ニ費目ニ付テ制限スルコト能ハス又制限セサルコトカ

第二豫備金ノ性質ニ恰當スルモノナリト云フヘシ。然リ而シテ第一豫備金ニ付テ
ハ其ノ如何ナル費途ニ制限スヘキカト云フニ、元來豫算ノ科目中ニハ行政官ノ責
任ヲ以テ其ノ豫算内ニテ支出ヲ爲シ之ニ對スル不足ノ請求ヲ許スヘカラサルモ
ノト、豫期スヘカラサル出來事ニ對シ必ラス其ノ不足額ノ補填ヲ要スルモノトア
リ。コレヲ以テ前者ニ以テハ行政官カ責任ヲ重ンシ相當ノ注意ヲ加ヘタランニハ
豫備金ノ支出ヲ仰グノ必要ナシト云フヘク、會計規則第十八條ノ趣旨モ此ノ分ヲ
除外シ獨リ後者ニ付テノミ支出ヲ爲サントスルニ外ナラサルナリ。此ノ規定ハ頗
ル重要ナルモノニシテ若シモアラユル費目ニ對シ豫備金ノ支出ヲ許スコト、セ
ハ其ノ金額多大ニ上ルノミナラス、豫備金ノ支出ヲ目當トシテ豫算金額ノ枯竭ヲ
顧ミス濫費ノ弊ニ陥ルヤ更ニ多言ヲ要セサルナリ。

次ニ豫備金ノ支出ニ依ル金額ノ流用禁止ハ會計法第十二條ニ「國務大臣ハ豫算
ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス」
トノ規定ヲ更ニ嚴峻ニシテ、一層深ク立入りテ流用ノ禁止ヲナセルモノナリ。即チ
會計規則第十七條ニヨレハ

豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途及ヒ豫備金ヲ以テ支辨スル費途ノ金額ハ他ノ

費途ニ流用スルコトヲ得ス

トノ規定アリ。茲ニ豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途トハ第一豫備金支出ノ費途ニシテ、豫備金ヲ以テ支辨スル費途トハ第二豫備金ノ費途ヲ云フモノトス。會計規則第十七條ニ依レハ、苟クモ豫備金ヨリ支出セラレタルモノナルトキハ、其ノ金額ハ「項」ノ一部分ヲ形成スルニ過キストスルモ同一ノ項中ノ他ノ部分ト流用スルコトヲ得スト云フナリ。之ヲ換言スレハ、會計法第十二條ハ一項内ノ流用ハ之ヲ禁止セサルモ、會計規則第十七條ハ目ト目トノ間ニモ流用禁止ノ原則ヲ適要セントスルモノナリ。蓋シ此ノ規定ヲ存セサルトキハ、名ヲ豫備金ノ支出ニ藉リテ實際上豫備金ヲ以テ支出スヘカラサル事項ニ流用シ充當セントスルノ弊害ヲ生スヘキニ依リ、此ノ規定ヲ設ケテ豫備金ノ費消ハ畢竟其ノ支出費目ニ限界セントスルモノニシテ、頗ル重要ノ原則ナリト云ハサルヘカラス。

第二 豫備金支出ノ手續

豫備金支出ノ手續ハ第一豫備金ト第二豫備金トニ依テ異レリ。第一豫備金ノ支出ハ會計規則第十九、二十條ノ規定スル所ニシテ、今之レヲ説明セハ、各省大臣カ第一豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ、金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り大藏大臣ノ承

認ヲ經ルコトヲ要ス。コレ前述セル如ク豫備金集中ノ原則ニ依リ、大藏大臣ハ豫備金保管ノ任ニ當ルカ故ニ各省大臣ヨリ之ヲ請求スルナリ。但シ此ノ請求ハ大藏大臣ノ許可ヲ乞フモノニアラス、各省大臣ハ其ノ豫算上ニオケル權能ニ依リ大藏大臣ニ協議スルモノナリ。即チ此ノ場合ニ於テ各省大臣ト大藏大臣トノ關係ハ對等關係ニシテ命令ノ關係ヲ有スルモノニアラス。然レトモ此ノ承認ヲ經ヘシトハ單ニ通知ヲナスヘシトノ意ニアラス。若シ通知ヲ爲スニ止マルモノトセハ、大藏大臣ハ之ニ對シテ拒絕ノ意ヲ表スルコトヲ得ス其ノ言フ儘ニ從ハサルヘカラスト雖モ、豫備金ノ支出ハ各自協議ノ結果其ノ成立ヲ見ルモノトス。然ラسنハ大藏大臣カ豫備金ヲ管理スルハ無意味トナリ、豫備金ノ集中ハ何等ノ效績ナキニ至ルヘケレハナリ。

大藏大臣第一豫備金ノ支出ヲ承認シタルトキハ、之ヲ會計検査院ニ通知スルコトヲ要ス。蓋シ豫備金ノ支出ハ即チ豫算ノ變更ナルカ故ニ會計検査院ハ其ノ職權上之ヲ知リオクノ必要アリ。既ニ説明セル如ク毎年度ノ仕拂豫算ハ各項ノ金額ヲ示シ各仕拂命令官毎ニ所要ノ費額ヲ定メ會計検査院ニ送附シテ其ノ検査ノ基礎ニ供スルモノトス。從テ此ノ豫算ニ變更アリタル場合ニ更ニ之ヲ通知シテ何レノ

仕拂豫算ニ變更アリタルヤヲ知ラシムルノ必要アルナリ。

次ニ第二豫備金ノ支出ハ會計規則第二十一、二、三條ニ規定スル所ニシテ各省大臣ハ其ノ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り之ヲ大藏大臣ニ送附スヘシ。大藏大臣ハ前條ノ計算書ヲ調査シ其ノ意見ヲ附シテ勅裁ヲ乞フモノトス。而シテ之ニ對シテ勅裁アリタルトキハ茲ニ始メテ第二豫備金ノ支出ヲ爲スコトヲ得ルナリ。

コレヲ以テ第二豫備金ノ支出ハ第一豫備金ノ支出ニ比シテ其ノ手續鄭重ナルコトヲ知ルヘシ。蓋シ第一豫備金ノ支出ハ前述セルカ如ク豫メ勅令ヲ以テ其ノ範圍ヲ限定セルカ故ニ、濫費ニ流ル、ノオソレ少シ。然ルニ第二豫備金ニ至リテハ全ク豫算款項以外ノ支出ニ屬シ豫メ其ノ範圍ヲ制限スルコト能ハサルカ故ニ、第一豫備金ヨリモ其ノ手續ヲ鄭重ニセサレハ濫費ニ陷ルノ弊害ナシトセス、コレ勅裁ヲ仰クヘシト規定セル所以ナリ。

第二豫備金支出ノ勅裁アリタルトキハ、大藏大臣ハ其ノ事故金額ヲ會計検査院ニ通知シ及ヒ官報ニ掲載スルコトヲ要ス。其ノ會計検査院ニ通知スルハ會計検査ノ爲メナルコト第一豫備金ノ場合ト同シ。其ノ官報ニ掲載スルハ第二豫備金支出ノ手續ヲ鄭重ナラシメタル結果ニ外ナラス。

尙ホ豫備金支出後ノ手續ニ付テハ會計規則第二十四條ニ規定アリ。即チ豫備金ヲ以テ補充支辨シタル金額ハ、各省大臣其ノ計算書ヲ作り各費途毎ニ説明ヲ付シ年度經過後五箇月以内ニ之ヲ大藏大臣ニ送附スルヲ要ス。大藏大臣ハ豫備金支出ヲ第一豫備金支出ト第二豫備金支出トニ大別シ、其ノ總計算書ヲ作り之ニ説明ヲ附シ各省大臣ヨリ送附シタル豫備金支出ノ計算書ト共ニ帝國議會ニ提出スルノ手續ヲナスヘキモノトス。其ノ議會ニ提出スルハ會計法第八條ニ

豫備金ヲ以テ支辨シタルモノハ年度經過後帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

トノ規定ニ依リタルモノナリ

第三章 收支ノ執行

第一節 國庫

第一 國庫ノ意義

國庫トハ國家ノ所有ニカ、ル現金ヲ保管スル機關ノ謂ニシテ、國家ニハ唯一ノ國庫存在スルヲ以テ現今文明諸國一般ニ通スル原則トス。蓋シ往時ニ於テハ一國

ニ數箇ノ金庫ノ併ヒ存スルヲ見タリト雖モ、斯クノ如キハ現金ヲ彼此融通スルノ妙用ヲ欠キ其ノ不便少カラサリシテ以テイハユル金庫統一主義ノ結果トシテ、一國ニハ唯一ノ國庫ノ存在アルモノトシ、國庫ハ殆ント國家ト離ルヘカラサル觀念ヲ生スルニ至レリ。勿論一國ノ國庫ニハ幾多ノ支金庫アリト雖モ、コレ一ノ根幹ニ對シテ枝葉ノ關係ヲ有スルモノニシテ、此等幾多ノ金庫ハ凡テ相集リテ國庫ヲ組織スルモノトス。コレ對等ノ金庫カ分立シテ存在スルト全ク其ノ意義ヲ異ニスル所以ナリ。

國庫ハ斯クノ如ク一國ニ唯一ノモノナルカ故ニ凡テノ國家ニ屬スル現金ハ茲ニ扱ハル、ヲ本則トス。會計法第十二條ニ
國務大臣ハ其ノ所管ニ屬スル收入ヲ國庫ニ收ムヘシ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス

ト云ヘルモ此ノ意味ヲイヒ表ハセルニ外ナラス。

國庫ハ實ニ以上ノ如ク現金ノ出納保管ニ付テ獨占的ノ至上權ヲ有スルモノナリ。然レトモ其ノ權限ハ嚴格ニ之ヲ制限シ現金ノ出納保管以外ノコトニ亘ルヲ許サス。即チ國庫ノ收支ニ付テ命令權ヲ附與スルカ如キハ絕對ニ禁止スル所ナリ之

ヲ以テ國庫ハ歲入徵收官若ハ仕拂命令官ノ命令ヲ必ラス執行セサルヘカラサルノ義務アリ、唯其ノ形式カ法令ニ違背スルトキ之ヲ拒絕スルコトヲ得ルノミ。

尙ホ注意スヘキハ金庫統一主義ト特別會計ノ存在トハ相牴觸スルモノニアラサルコトコレナリ。蓋シ特別會計トハ豫算ノ上ニ於テ一般會計(總豫算)ニ對スル例外トシテ區劃ヲ設ケタルモノニシテ其ノコトタル毫モ現金ニ關スルモノニアラス特別會計ナレハトテ其ノ歲入ハ國庫ニ入ルヘク其ノ歲出ハ國庫ヨリ仕拂ハルヘシ。畢竟特別會計ト云フハ國家ノ財政整理上其ノ記載スル帳簿ヲ異ニシテ彼此相關セシメスニ整理スト云フニ外ナラサルモノトス。

第二 國庫ノ組織

●金庫規則(明治二十二年勅令第二百二十六號)第一條ニ曰ク、

金庫ハ國庫ニ於テ保管出納スル現金ヲ取扱フ所トス

ト、即チ金庫ハ國庫ノ一部分ヲ爲シ現金ノ保管出納ヲ爲ス所ヲ云フ、コレ金庫規則第二條カ中央金庫、本金庫、支金庫ノ三種ヲ認メタル所以ナリ。畢竟金庫トハ現實ニ金錢ノ取扱ヲナス機關ニシテ、抽象的ニ此等ノモノヲ一體トシテ觀察スルトキ國庫ト云フナリ。

尙ホ金庫ト區別スヘキハ「金櫃」ナル文字トス。金庫規則第十條ニ曰ク
大藏大臣ハ検査官吏ヲ派出シ何時ニテモ金庫ノ金櫃帳簿ヲ検査スルコトヲ得
ト云ヘルカ如ク、金櫃トハ實際上現金ノ藏置セラル、具ノ謂ナリ。之ヲ要スルニ國
庫ハ最モ廣キ意味ヲ有シ金庫之ニ次キ金櫃ハ最モ狭キ意味ヲ有スルナリ

國庫ノ組織ハ前述セル金庫規則ノ規定スル所ニシテコレヲ分テ三種トス

- (1) 中央金庫
- (2) 本金庫
- (3) 支金庫

コレナリ。中央金庫ハ之ヲ東京ニオキ各地ノ本金庫ヲ統轄ス。本金庫并ニ支金庫ハ
各地方ニ之ヲオキ、本金庫ハ更ニ支金庫ヲ統轄スルモノトス。而シテ本金庫支金庫
ニハ各其ノ出納區域アリテ其ノ區域内ノ國庫金ノ取扱ヲナスナリ。之ヲ概言セハ
各府縣ノ所在地ニハ本金庫ノ設ケアリ(例外アレトモ)郡役所々所在地ニハ支金庫ノ
設ケアル(例外アルハ勿論)ナリ。現今國內ニ三十六ノ本金庫アリ之ニ大連本金庫ヲ
合セテ三十七箇トス。

金庫ハ國庫ノ一部分ヲナスモノナレハ凡テ大藏大臣ノ管理ニ屬スルコト勿論

ナリ(金庫規則第四條)大藏大臣ハ検査官吏ヲ派シ何時ニテモ金庫ノ金櫃帳簿ヲ檢
査スルコトヲ得ヘク、又諸般ノ報告書ヲ徴シ及諸般ノ規程ヲ設クルコトヲ得ヘシ
即チ金庫検査ノ爲メニハ特ニ金庫検査規程(明治三十四年大藏省令第五號)ノ規定アリ。コレニ依
レハ金庫ノ検査ハ定時及ヒ臨時ニ之ヲ施行シ定時検査ハ毎年三月三十一日ニ臨
時検査ハ金庫出納役及ヒ其ノ代理人交替スルトキ若クハ大藏大臣ノ必要ト認ム
ルトキニ施行ス。

第三 委托國庫制度

斯クノ如ク國庫ハ金庫ノ包括的名稱ニシテ一國ニ唯一ノモノナルカ、此ノ國庫
即チ國庫金ノ取扱ハ政府部内ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ當然ノコトノ如クニ思ハル
レトモ、實際上我國ニテハ諸國ノ實例ニ鑑ミ委托國庫制度ヲ採リ中央銀行タル日
本銀行ヲシテ之ヲ掌ラシムルコト、ナセリ。コレ會計法第三十一條ニ

政府ハ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命スルコトヲ得

トノ規定ニ基クモノニシテ金庫規則第六條ハ

中央金庫本金庫支金庫ノ現金保管ハ日本銀行ヲシテ取扱ハシム

ト明言セリ、コレニ依リ日本銀行ハ國庫金ノ保管ヲ營業部ノ現金ト別々ニナスモ

ノトス。即チ明治二十三年大藏省訓令第六號ニモ日本銀行ハ中央金庫本金庫支金庫ノ現金保管出納ヲ取扱フ場合ニ於テ金櫃帳簿ハ銀行事業部ト混淆セサル様判然區劃シ一見シテ其ノ金庫ノ金櫃帳簿ノ藏置シアル者タルコトヲ識ルニ足ルヘキ標章ヲ掲クヘキモノトセリ。然リ而シテ日本銀行總裁ハ會計規則第百十一條ニ依リ金庫出納役トシテ金庫ノ事務ヲ掌理シ、日本銀行支店長出張店長若クハ代理店長ハ本金庫ニオケル事務ヲ擔任シ、日本銀行ハ其ノ支店出張店又ハ代理店ノ取扱フ國庫金ノ保管出納ニ關シ政府ニ對シテ一切ノ責任ヲ有スルモノトス。

惟フニ諸國ニ於テ又我國ニ於テ委託國庫制度ヲ採用シタルハ第一中央銀行ハ現金ノ取扱事務ニ熟練セルト第二金融トノ調和ヲ保チ得ルコト、ノ二點ニ存ス若シ夫レ國庫金ノ安全ヲ期スル點ヨリイフトキハ固有金庫制度ハ最モ適當ナレトモ、現今ノ進歩セル經濟ノ狀態ノ下ニハ中央銀行ニ信用ヲオクコト當然ニシテ萬一ノ危險ナキコトヲ斷言スルモ誤リナカルヘク、況ンヤ大藏大臣ハ常ニ國庫金ノ取扱ニ付テ嚴重ナル監督ヲナスニ於テオヤ。

上述セル委託國庫制ノ第一ノ長所ハ架設スルノ必要ナキヲ以テ主トシテ第二ノ點ニ付テイハンニ、此ノ第二ノ點ハ實ニ委託國庫制度ヲ採ルニ至リタル主ナル

理由ト云フヘシ。蓋シ現今ノ文明國ニ於テハ其ノ歲入歲出ノ金額ハ巨額ニ上ルヲ常トシ之ヲ一國ノ通貨ニ比較スルニ或ハ之ニ倍スルヲ見ル。之ヲ以テ國庫金ノ收入支出ハ常ニ國家ノ金融上ニ少カラサル影響ヲ與フルモノナリ。然ルニ今固有國庫制ヲ採リ國庫金ト他ノ金融機關トノ間ニ何等ノ關係ヲモ存セサラシメハ國庫ノ非常ニ豊富ニシテ民間ノ金融非常ニ必迫ヲ訴フル場合ニ於テモ、將タ國庫ハ歲入時期ノ關係上缺乏ヲ訴フルニ關セス、金融機關ハ金融ノ緩慢ニ苦シム場合ニ於テモ、何等救濟ノ道ヲ講スルコト能ハサルヘシ。然ルニ今委託國庫制度ヲ採リ、銀行ノ本業部ト國庫トノ間ニ一時貸借ノ途ヲ講スルコト、セハ以上ノ如キ場合ニ於テ有無相通シ互ニ相救助スルコトヲ得テ其ノ便利ナルコト固ヨリ言フマタス。而シテ其ノ一時貸借ヲ爲シ互ニ現金ノ融通ヲナスコトハ明治二十七年法律第十六號國庫金出納上一時貸借ニ關スル件ニシテ、三ヶ條ヨリ成レリ。

第一條 政府ハ國庫金出納上一會計年度間餘裕アルトキハ相當ノ利子ヲ徵シテ之レヲ當座預又ハ定期預トシテ日本銀行ニ預ケ入ル、コトヲ得

第二條 政府ハ國庫金出納上一會計年度間一時不足ヲ生スルトキハ相當ノ利子ヲ附シ日本銀行ヨリ借入ヲ爲スコトヲ得

第三條 前條ニ依リ政府ノ借リ入ル、コトヲ得ヘキ金額ハ大藏省證券發行額ト合セテ當該年度證券ノ發行額ヲ超過スルコトヲ得ス

第四 國庫金ノ配賦

國庫ハ前述ノ如ク全國ニ亘リテ唯一ノ出納機關タリ。而シテ一地方ノ本金庫又ハ支金庫ハ其ノ地方ノ租稅其ノ他ノ收入ヲ以テ所要經費仕拂ノ要求ニ應セサルヘカラス。金庫規則第三十一條モ之レヲ規定シテ

金庫ニ於テ領收シタル現金ハ其ノ金庫ノ仕拂基金ニ充ツヘシ

ト云ヘリ然ルニ實際上各本金庫又ハ支金庫ノ收納スル額ト支出スル額トハ常ニ一致スルモノニ非スシテ往々非常ナル不權衡ヲ來スコトアリ。斯クノ如キ場合ニ於テ之ヲ自然ノ有様ニ一任セハ、一地方ノ金庫ハ現金ノ究乏ヲ訴ヘ一地方ノ金庫ハ現金ノ過剩ニ苦シムニ至ルヘシ。此ノ究乏若クハ過剩ノ狀態ヲト、ノヘ全國何レノ金庫ニ於テモ其ノ支拂ニ究セサラシメンコトハ、是レ中央金庫ニ在リテ金庫ノ金庫ヲ統轄スル任ニ當ル金庫出納役ノ職司トスル所ナリ。此ノ點ニ付金庫出納事務規程第三十二條ハ

金庫出納役ハ各金庫ニ於テ仕拂フヘキ金額ニ基キ金庫相互間ニ現金ノ運轉配

賦ヲ爲シ常ニ仕拂ニ差支ナカラシムヘシ

ト云ヘリ。而シテ此ノ配賦ヲ全フスルニハ第一ニ各支金庫ハ支金庫收支報告書ヲ作リテ之ヲ本金庫ニ差出サ、ルヘカラス。コレハ各支金庫カ毎日爲スヘキ日課ニシテ、之ニヨリテ本金庫ハ毎日其ノ下ノ支金庫ニ若干ノ收入又ハ支出アリシヤヲ知ルコトヲ得ヘシ。次ニ各本金庫ハ此等ノ表ヲ本トシ、本金庫收入報告表ヲ作りテ之ヲ中央金庫ニ致サ、ルヘカラス。コノ表ハ本金庫ニ向テ毎月六回(五ノ日ト十日)之ヲ送付スルモノトス。而シテ中央金庫ニ於テハ全國ノ本金庫ヨリ到着スル收支金報告表ヲ帳簿ニ記載シ、之ニ依リテ日々國庫金配賦表ヲ作成ス。此ノ國庫金配賦表ハ實ニ金庫出納役カ各地ノ金庫ノ現金カ如何ナル狀態ニ在ルヤヲ一目ニテ知リ得ル所ニシテ、若シ甲地ノ金庫ニ於テ現金著シク減少シテ地ノ金庫ニ於テ過剩ヲ告クルトキハ、乙地ノ現金ヲ甲地ニ輸送スルコトヲ命ス。金庫出納役ハ此ノ方法ニ依リテ居ナカラニ全國金庫ノ調理ヲ爲スコトヲ得ルモノトス。

第二節 收入

第一 收入機關

前章ニ於テ説明セルカ如ク國家ノ會計ハ命令機關ト現金取扱機關ト全然相分離スルヲ原則トシ從テ收入事務ニ於テモ徵收機關ト收入機關即チ現金ヲ受領スル機關トハ互ニ獨立セシムルコトセリ。然リ而シテ前節ニ説明スルカ如ク「國庫」ハ即チ一國唯一ノ現金ノ保管收支機關ニシテ從テ收入機關トシテ茲ニ云フ所ノモノモ亦之レニ外ナラス。國家ノ收入ハ一錢一厘ノ微ト雖モ畢竟日本銀行ニ於ケル國庫ニ收入セラル、モノナリ。

然リト雖モ實際ノ便宜上直接ニ納人ヨリ國庫ニ納入スルコトヲ爲サシテ中介機關ヲ置キ中介機關ハ納人ヨリ現金ヲ受領シ更ニ國庫ニ拂込ノ手續ヲ爲スコトアリ。此ノ中介機關ハ

(1) 市町村

(2) 收入官吏

ノ二トス。

市町村カ中介機關タルコトハ國稅徵收法第五條ノ規定スル所ニシテ左ノ如シ市町村ハ其ノ市町村内ノ地租及ヒ勅令ヲ以テ命シタル國稅ヲ徵收シ其ノ税金ヲ國庫ニ送付スルノ責任アルモノトス。

而シテ其ノ勅令ヲ以テ命シタル國稅ノ如何ナル種類ナルカハ既ニ前章ニ於テ聲明シタル所ナリ。

又收入官吏カ仲介機關タルコトハ會計規則第二十五、六條ニ依テ之ヲ知ルヘク例之第二十六條ノ規定ハ左ノ如シ

收入官吏ハ大藏大臣定ムル所ノ規則ニ從ヒ毎月一回若クハ數回其領收シタル金額ヲ金庫ニ拂込ムヘシ

然リ而シテ收入官吏ハ如何ナル人ヲ以テスルヤト云フニ是レ大藏省訓令ヲ以テ定ムル所ニ係ル左ノ如

(1) 租稅收入ニ付テハ明治三十三年訓令第十六號ニ基キ稅務署長及ヒ稅關長

ハ主任收入官吏タリ而シテ其ノ下ニ若干ノ分任收入官吏ヲ置クモノトス。

(2) 租稅外收入ニ在リテハ明治三十五年ノ訓令第五十五號ニ依リ各官廳長官

ハ其ノ部下ノ官吏ニ收入官吏ヲ命スルモノトス。而シテ其ノ中一人ヲ主任收入官吏トシ其ノ他ヲ分任收入官吏トス。

惟フニ國家ニ既ニ國庫アリ國庫ニハ中央ニ中央金庫ヲ置キ地方ニ地方金庫ヲ置キ以テ現金ノ取扱ニ當ルモノトセハ仲介機關ヲ設クルハ其ノ必要ナキカ如シ

ト雖モ然ラス。即チ租税ニ付テ云ハ、地租、營業稅及ヒ第三種所得稅ノ如クニ其ノ納人ノ極メテ多數ナル場合ニ於テハ、其ノ徵收事務ヲ市町村ニ委任スルカ如クニ其ノ收入事務モ亦市町村ニ委任スルヲ以テ便利トスヘシ。其ノ他租稅犯則者處分ノ如キ場合ニ在リテハ行政上ノ必要ヨリシテ稅務官吏ヲシテ同時ニ收入官吏タラシムルヲ以テ便利トスヘシ又租稅外ノ收入ニ在リテモ例之學校ニ於ケル月謝ノ收入ノ如ク其ノ納人ノ多數ナル爲メ上述セル所ト同一ノ理由ニ依リ收入官吏ヲシテ取扱ハシムルノ便利ナルコトアリ官有物ノ拂下ノ際ニ於ケルカ如ク行政事務ノ便宜上收入官吏ニ取扱ハシムルコトアリ。又金庫所在地ト納人ノ居所ト相距ルコト遠キ地方ニ於テ其ノ納附金モ僅少ノ額ニ過キストセハ納人ノ便宜上收入官吏ヲ置クノ必要ナルコトモアルヘシ。之ヲ要スルニ仲介機關ハ諸種ノ便宜ノ爲メ之ヲ設クルモノニシテ、之ヲ以テ國庫唯一ノ原則ニ例外ヲ設クルモノニアラス。

斯クノ如ク收入ニ付テハ仲介機關ヲ通シテ國庫カ現金ヲ收入スルコトアリ又直接ニ納人ヨリ現金ヲ收入スルコトアルモ、畢竟國家ノ收入ハ國庫ニ入ルモノニシテ、今其ノ場合ヲ他ノ方面ヨリ分類スルトキハ左ノ五種トナル

- (1) 納稅告知書ヲ以テスル場合
- (2) 納入告知書ヲ以テスル場合
- (3) 送付書ヲ以テスル場合
- (4) 納付書ヲ以テスル場合
- (5) 現金拂込證ヲ以テスル場合

是レナリ、第一ハ個人カ租稅ヲ直接ニ金庫ニ納付スル場合ヲ云ヒ、第二ハ租稅外ノモノヲ直接ニ金庫ニ納付スル場合ヲ云フ。又第三ハ市町村カ仲介機關トシテ受領セル租稅ヲ更ニ金庫ニ納付スル場合ヲ云ヒ、第四ハ收入官吏カ中介機關トシテ受領セル金額ヲ更ニ金庫ニ納付スル場合ヲ云フ。又第五ハ納期ヲ過キ滯納報告以後ニ於テ督促狀ヲ發セントシ又ハ發シタル場合ニ租稅又ハ免許手数料ヲ納付スルトキヲ云フモノトス。

第二 收入上ノ手續

收入上ノ手續ハ現金領收ノ手續、仲介機關ノ金庫拂込手續並ニ登簿報告トニ分ツコトヲ得ヘシ。

先ツ現金收入ノ手續ヲイハ、凡テ國庫カ直接ニ收入スルト市町村又ハ收入官

吏カ收入スルトヲ問ハス、現金ノ納入アリタルトキハ領收證ヲ交付セサルヘカラ
ス。是レ會計規則第二十五、二十七條等ニ記載スル所ニシテ別ニ説明ヲ要セス。

次ニ仲介機關タル市町村又ハ收入官吏カ其ノ收入セル金額ヲ國庫ニ拂込ムト
キモ國庫ハ之ニ對シテ領收證ヲ交付スルモノトス。而シテ市町村ニ於テ領收シタ
ル税金ハ國稅徵收法施行細則第五條ニ依リ納額告知書ニ記載セラレタル納期後
三日ヲ經過スルコトヲ得ス。又收入官吏ニ於テ領收シタル金額ハ會計規則第二十
六條ニ依リ毎月一回若クハ數回金庫ニ拂込ムコトヲ要シ、其ノ詳細ハ出納官吏現
金取扱規則(明治二十二年大藏省令第十三號)ニ規定セラル。チ

(1) 金庫所在地ノ收入官吏ニ在テハ毎日之ヲ取纏メ翌日マテニ金庫ニ拂込ム
モノトス。

(2) 金庫ノ設ケナキ地方ノ收入官吏ニアリテハ(1)收入金五十圓未滿ハ每一箇
月(2)收入金五十圓以上百圓未滿ハ每十日(3)收入金百圓以上三百圓未滿ハ每
五日(4)收入金三百圓以上ハ翌日限り金庫ニ拂込ムモノトス。

然ルニ金庫ノ設ケナキ運輸通信ノ不便ナル地方ニ在ル收入官吏ニ付テハ會計
規則第二十六條但書ノ規定ニ從ヒ該官吏之ヲ保管シ大藏大臣ノ指定ニ從ヒ金庫

ニ拂込ノ手續ヲナスヘキモノニシテ、其ノ詳細ハ前述セル出納官吏現金取扱規則
ニ規定アリ。即チ收入官吏ハ其ノ金額ノ監守證ヲ作り此ノ監守證ヲ最近便ヲ以テ
金庫ニ送付スルモノトス。而シテ金庫ニ於テハ此ノ收入官吏ト同場所又ハ其ノ場
所ト爲替送金ノ便アル地方ニ於テ仕拂フヘキ必要アルトキハ、該收入官吏ノ監守
證ニ領收證ヲ添ヘテ之ヲ受取人ニ送付シ、收入官吏ハ此ノ監守證ノ提出アルトキ
ハ之ト引換ニ現金ヲ交付ス。但シコレニテモ尙監守證ノ金額ニ殘餘アルトキハ金
庫ハ受取人ヲシテ收入官吏ヨリ現金ノ受領ヲ了スルモノトス。斯ノ如クニシテ
此ノ場合ニハ事實現金拂込ナキモ(金庫ニ對シ)恰モ拂込アリシモノト看做サレ又
同一ノ效驗アルモノトス。

國庫ノ責任者タル金庫出納役並ニ收入官吏ハ會計規則第一百八條ニ依リ、現金
出納簿ヲ調製シ現金ノ收入ヲ記載セサルヘカラス。而シテ金庫出納役ノ現金出納
簿ハ實際上、出納原簿ト出納日記簿トノ二ニ分タル。

金庫又ハ收入官吏ハ一方ニ於テ報告ノ義務アリ。即チ領收濟ノ旨ヲ歲入徵收官
ニ報告スルコトヲ要ス。會計規則第二十五、二十七條同様ニ市町村ニ於テモ其ノ納
期內ニ税金ノ納付ヲ了ラサル者アルトキハ國稅徵收法施行細則第七條ニ依リ直

ニ其ノ旨ヲ歳入徴收官タル所轄稅務署長ニ報告スルモノトス。即チ此ノ場合ニ於テハ金庫又ハ收入官吏ノ報告カ領收濟ノ金額ヲ以テスルニ反シ、領收未濟ノ金額ヲ以テスルナリ。

第三節 仕拂

第一 仕拂機關

國家ノ現金取扱ハ其ノ收入タルト仕拂タルトヲ問ハス凡テ現金保管ノ任ニ當ル國庫ノ事務ニ屬ス、是レ既ニ説明シタル所ニシテ更ニ多言ヲ要セス。然ルニ收入ニ付テ市町村及ヒ收入官吏ナル中介機關アリテ國庫ノ補助ヲナスト同シク仕拂ニ付テモ亦中介機關ヲ置クノ便利ナルコトアリ。是レ前章中ニ説明セル現金前渡官吏ニシテ、現金前渡官吏ハ一方ニ於テ國庫ヨリ現金ノ前渡ヲ受ケ置キ、一方ニ於テ國庫ニ代リテ仕拂ヲナスモノトス。此ノ現金前渡官吏ト前述セル收入官吏トハ官吏トシテ特ニ現金ノ取扱ヲ爲スモノナレハ兩者ヲ併稱シ或ハ之ニ金庫出納役ヲ加ヘテ「出納官吏」ト云フコトアリ。現金前渡官吏ノ現金取扱ニ關スル職務ニ付テハ出納官吏現金取扱規則(明治二十二年

大藏省令第十三號ノ規定アリ。下ニ擧クル所ノモノ是レナリ。但シ此ノ規定ハ亦收入官吏ニモ適用セララル、モノト知ルヘシ。

金庫所在地ノ現金前渡官吏ハ其ノ取扱フ所ノ現金ヲ保管ノ爲メ其ノ地ノ金庫ニ委託スルヲ要ス。但シ陸海軍々隊費ニシテ現金仕拂ヲ要スル場合及ヒ廳中雜費工事費ニシテ小口ノ現金仕拂ヲ要スル場合ニ於テハ金庫所在地ニ在リテモ所要ノ金額ヲ限り現金ノ保管ヲ爲スコトヲ得。此ノ前者ノ場合ハ之ヲ義務委託ト云ヒ後者ノ場合ハ之ヲ隨意保管ト云フ。

(1) 義務委託 現金前渡官吏ノ任命アルトキハ、之レヲ任命シタル當該官ハ其ノ義務委託ヲ爲スヘキ現金前渡官吏ノ資格氏名ヲ金庫ヘ通知スルヲ要ス。金庫ハ此ノ資格氏名ノ通知ヲ受クルニアラサレハ現金ノ仕拂ヲ爲サ、ルモノトス。現金前渡官吏カ保管金ノ仕拂ヲ金庫ニ請求セントスルトキハ凡テ引出切符ヲ以テス。

(2) 隨意保管 隨意保管トハ現金前渡官吏自ラ現金ノ保管ヲナスモノニシテ義務委託ニ對スル例外ト云フヘシ。而シテ其ノ場合ハ(1)金庫ノ設ケナキ場所ニ於ケル場合(2)陸海軍々隊費ニシテ現金仕拂ヲ要スル場合(3)廳中雜費工事費ニシテ小口ノ現金仕拂ヲ要スル場合はレナリ、而シテ此等ノ場合殊ニ第一ノ場合ニ於テ

ハ現金前渡官吏ハ堅牢ナル函ヲ備ヘ之ニ保管ニ係ル現金及ヒ帳簿ヲ藏置スルヲ要ス。又二人以上共同責任ヲ以テ現金ヲ保管スル場合ニ於テハ、二箇以上ノ鎖鑰ヲ有スル堅牢ノ函ヲ備ヘ現金前渡官吏之ヲ分管スルモノトス。其ノ現金ヲ携帯シテ旅行スル場合ニ於テハ、他ニ相當ノ保管法ヲ設クルコトヲ得ヘシ。然リ而シテ其ノ何レノ場合タルヲ問ハス一般ニ現金前渡官吏ノ保管ニ係ル現金ハ私有金ト混同スルコトヲ禁ス。

(3) 預金 現金前渡官吏ハ以上ノ如ク堅牢ナル函ヲ備ヘテ現金ノ保管ヲナシ難ク又金庫ニ義務委託ヲ爲スコト能ハサル場合ニ於テハ自己ノ責任ヲ以テ確實ナル銀行又ハ私人ニ其ノ保管スヘキ現金ノ保管ヲ委託スルコトヲ得ヘシ。

第二 仕拂上ノ手續

現金前渡官吏ノ仕拂ニ關スル手續ハ債主ニ對シテ現金ノ仕拂ヲナスト同時ニ領收證書ヲ徴シ、一方ニ於テハ現金出納簿ヲ備ヘテ之ヲ記載スルニ在リテ特ニ言フヘキコトナキカ故ニ茲ニハ專ラ國庫カ仕拂ヲナス手續ニ付テ説クヘシ。

國庫ノ仕拂上ノ手續ニ付テハ會計規則第四章第二欸並ニ金庫出納事務規程(明治二十六年大藏省訓令第三十九號)ニ詳細ナル規定アリ、今左ニ其ノ大體ヲ説クヘシ。

第一、仕拂命令持參ノ場合即チ普通ノ仕拂命令又ハ現金前渡ノ仕拂命令ヲ持參シ現金ノ仕拂ヲ請求スル者アルトキハ、金庫ハ其ノ案内仕拂命令ニ對査シ其ノ金額ヲ交付ス但シ現金交付ノ際仕拂命令及ヒ案内仕拂命令ノ表面ニ年月日現金交付ノ旨ヲ記入シ置クコトヲ要ス。而シテ左ノ場合ニ於テハ事由ヲ仕拂命令持參人ニ告ケ金庫ニ於テ仕拂命令ノ執行ヲ拒ムヘキモノトス。

- (1) 案内仕拂命令ノ到着セサルトキ
- (2) 仕拂命令ト案内仕拂命令ト符合セサルトキ
- (3) 仕拂命令汚損シ案内仕拂命令ト照合シ難キトキ

而シテ尙ホ特記スヘキハ普通ノ仕拂命令ト現金前渡ノ仕拂命令トハ其ノ性質ヲ異ニスルモノナルコト是レナリ。前者ニ付テハ其ノ書式中ニ「本行ノ金額此仕拂命令持參人ニ仕拂可有之候也」トアルモ後者ニハ「本行ノ金額何官何之誰ニ仕拂可有之候也」ト記載セラレ前者ハ持參人拂ナルモ、後者ハ特定ノ人ニ仕拂フヘキモノトス。是レヲ以テ前者ニ付テハ其何人タルヲ問ハス持參人ニ仕拂ヘハ可ナリ、又金庫ニ於テ之ヲ拒絶スヘキモノニモアラス。然ルニ後者ハ特定ノ人ニ仕拂フヘキモノナレハ現金前渡官吏タル者ニ非スシテ仕拂命令ヲ持參スルモ之ヲ拒絶セサル

ヘカラス。

次ニ通知書持參ノ場合即チ集合仕拂命令ノ場合ニ在リテハ之ヲ持參シテ現金ノ仕拂ヲ請求スル者アルトキハ金庫ハ該仕拂命令ニ添附シアル金額氏名表ニ對シ該通知書ニ領收ノ旨ヲ記入セシメタル領收證書ト引換ニ現金ヲ交付スルモノトス。上述仕拂命令持參ノ場合ニ於テハ仕拂命令交付ノ際領收證書ヲ徵スルトキハ更ニ現金仕拂ノ際領收證書ヲ徵スルノ必要ナキモノトス。

最後ニ通知書ノ送附アリシ場合即チ金庫所在地外ニ在ル債主ヨリ仕拂命令官ノ通知書ヲ送附シ送金ノ請求ヲ受ケタルトキハ歳出ノ送金トシテ現金ヲ拂出シ債主ニ送付シ債主ヨリ仕拂命令官ノ通知書ニ領收ノ旨ヲ記入セシメタル領收證書ヲ徵スルモノトス。

然リ而シテ此ノ仕拂命令カ案内仕拂命令ト符合セサル場合並ニ仕拂命令汚損シテ案内仕拂命令ト照合シ難キ場合ニ於テハ仕拂ノ執行ヲ拒絶スルコトハ前述ノ如クナルカ彼ノ通知書ノ文字ニ脱落等アリテ仕拂命令ト符合セサル場合及ヒ通知書汚損シテ仕拂命令ト照合シ難キ場合アリトセハ此ノ場合ニ於テ仕拂ヲ爲スヘキヤ否ヤト云フニ此ノトキハ仕拂命令ヲ基礎トシテ仕拂ヲ爲スヘキモノナ

リ。通知書ハ唯同一ナル仕拂命令官ニ依リテ作成セラレ同一ノ事項ニツキテ仕拂ヲ爲スヘキモノナルコトヲ知ルニ足レハ可ナリトス。蓋シ仕拂命令ハ權利ヲ確保セルモノナルモ通知書ニ至リテハ單ニ仕拂ノ請求ヲ爲スヘキコトヲ報知スルニ止マル即チ通知書ハ其ノ送付人カ權利者ナルコトヲ證明スルニ止マリ其ノ記載事項ニハ重キヲ措クモノニアラサレハナリ。

次ニ仕拂命令又ハ通知書ヲ債主カ盜取セラレ又ハ亡失シタル時ハ記名者ハ書面ヲ以テ仕拂命令ニ指定シタル金庫ニ届出ツルモノトス。金庫ニ於テハ其ノ届書ヲ仕拂命令官ニ送付ス。仕拂命令官ハ調査ヲ遂ケ正當ナリト認ムルトキハ其ノ旨ヲ届書ニ記入シ金庫ニ送付ス。金庫ハ右届書ノ返付ヲ受ケタルトキハ之ヲ債主ニ通知シ仕拂ヲナスモノトス。明治三十八年七月大藏省令第三十九號然ルニ其ノ既ニ仕拂済ナルトキハ如何ト云フニ持參人拂ノ場合即チ普通ノ仕拂命令ニ係ルトキハ金庫ニハ何等ノ責任ナキヲ以テ其ノ旨ヲ持參人ニ告ケ届書ヲ送付スルモノトス其ノ他ノ場合ニ於テハ金庫ニ於テ仕拂ヲ爲シタルコトカ適當ノ注意ヲ拂ヒタルモ避ケ得ヘカラサリシ過失ナリシヤ否ヤニ依テ之ヲ決スヘキナリ。

金庫ニ於テハ休日ヲ除クノ外毎日其ノ開庫時間内ハ何時ニテモ仕拂命令又ハ

通知書持參人ニ之ト引換ニテ現金ヲ交付スルモノトス。從テ其ノ持參人ハ前述ノ會計規則第四十六條ニ規定セル事由アルニアラサル限りハ即時ニ現金ノ仕拂ヲ請求スルノ權利ヲ有ス。蓋シ此ノ規定ヲ欠キ金庫ハタトヒ仕拂命令又ハ通知書ノ呈示アルモ即時仕拂ニ應セスシテ徒ニ時日ヲ經過シ仕拂ノ時期一定セストセハ、之カ爲メ受取人ノ蒙ルヘキ不便ノ大ナルコト言フ。埃タヌ元來國家ノ會計ハ其ノ收入ニ於テ嚴格ニ或ル場合ニハ強制的手段ヲモ採ルコトアルト同時ニ他ノ一方ニ於テ其ノ支拂モ正確ニ爲スヘキモノナリ。即チ仕拂期日ノ如キ決シテ遅延セシメサルヲ期シ以上ノ如キ規定ヲ設ケタルモノトス。一言以テイヘハ國家會計上ノ性質上ノ一結果ニ外ナラサルナリ。

次ニ一年度ニ於ケル仕拂期間ニ付テイヘハ既ニ述ヘタル如ク仕拂命令ノ發行期日ハ翌年度五月三十一日限リトス。之レヲ以テ此ノ仕拂命令ニ對スル現金ノ仕拂期日ハ少クトモ同日若クハソレ以後ニアラサルヘカラス。會計規則第四十七條ハ之レヲ規定シテ翌年度六月三十日限リト爲セリ。

然ルニ更ニ一步ヲ進メテ翌年度六月三十日ニ至ルモ尙ホ債主ヨリ仕拂命令ヲ呈示シテ現金仕拂ノ請求ナキ場合ニ於テハ如何トノ問題ヲ生スヘシ。蓋シ仕拂命

令ノ發行カ翌年度六月一日ニ亘ルトキハコレ乙年度ノ支出ニシテ甲年度ノ支出ニアラサルコト明カナレトモ、仕拂命令ノ發行ハ明カニ五月三十一日以前ナルニ現金ノ請求カ七月一日以後ニ亘ルトキハ、之ヲ以テ甲年度ノ支出トシテ取扱フコトヲ得ス。乙年度以後ノ支出トシテ取扱フカ或ハ他ノ方法ニ依リテ整理セサルヘカラス。會計規則第四十七條ハ此ノ點ニ關スル規定ナリ。曰ク

各年度ノ仕拂命令ニシテ翌年度六月三十日マテニ仕拂ノ請求ナキ仕拂命令濟金額ニ相當スル資金ハ會計法第二十條ノ歲計剩餘ニ組入レス。國庫ニ於テ繰越整理スヘシ

即チ之レニ依レハ上述ノ如キ金額ハ之ヲ乙年度以後ノ支出トシテ取扱ハス。別途ニ之ヲ整理スルノ方法ヲ採ルモノトス。即チ此ノ請求ナキ金額タケハ全ク獨立セル別途ノ費途トシテ之ヲ保存シオキ以テ將來之ニ對スル仕拂ノ請求ニ應スルモノトス。蓋シ此ノ規定ハ止ムヲ得サルモノニシテ若シ此ノ別途整理ノ方法ヲ採用セス乙年度又ハ乙年度以後ノ支出トシテ(即チ仕拂ノ請求アリタル年度ノ支出トシテ)之ヲ取扱ハントスルモ之ニ對スル豫算ナキコト、ナルヘシ。何トナレハ乙年度又ハ乙年度以後ノ豫算ノ科目ニ於テ斯クノ如キ費途ヲ豫見セサレハナリ。

然レトモ此ノ別途整理モ時效トノ關係上一定ノ年度經過後ニ於テハ不用トナルニ至ルヘシ。會計規則第四十八條ニ曰ク

前條ノ資金中年度經過後滿五箇年内ニ仕拂ノ請求ナクシテ會計法第十八條ノ期滿免除ニ據リ政府カ負債ノ義務ヲ免レタルモノアルカ爲メ不用ト爲リタルモノハ其負債ノ期滿免除トナリタル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ
コレ固ヨリ當然ノコトニシテ説明ヲ要セス。

最後ニ登簿竝ニ報告ニ付テイハンニ金庫出納役ハ支出簿ヲ備ヘ歳出ノ科目ヲ區分シ仕拂豫算額仕拂命令受領濟額ヲ登記スヘキモノトス。コレ會計規則第一百六條ニ定ムル所ナリ。又會計規則第四十九條ニ依レハ金庫出納役ハ毎月仕拂命令受領濟額報告書ヲ調製シ其ノ翌月中ニ大藏省ニ送付セサルヘカラス。茲ニイフ所ノ仕拂命令受領濟額トハ國庫ニテ現金ノ仕拂額ト未タ仕拂命令ノ呈示ナキモノト別途整理ノ方法ニ依ルヘキモノトノ合計ニシテ政府ヨリイハ「仕拂命令濟額」ト云フコトヲ得ヘシ。畢竟此ノ二者ハ同一物ニ付觀察ノ方面ヲ異ニシタルマテノコトナリ。

第三 仕拂上ノ事前調査

支出上ニ付テ即チ仕拂命令ノ發行ニ際シテハ一定ノ事項ニ付テ其ノ事前調査ヲ行フヘキモノナルコトハ既ニ説明シタルカ如シ。之ト同様ニ仕拂ニ際シテモ國庫ハ一定ノ範圍内ニ於テ事前調査ヲ爲スノ必要アリ。會計法第十四條ニハ

國庫ハ法律命令ニ反スル仕拂命令ニ對シテ仕拂ヲ爲スコトヲ得ス

トノ規定アリ。此ノ規定ニ付テ問題トナルハ其ノイハユル「法律命令」トハ如何ナル範圍ヲ有スルヤニ在リ。若シモ法律命令トハ讀ンテ字ノ如ク一切ノ法律命令ヲ包含スルモノトセハ例之會計規則第三十二條ニ依リテ其ノ經費ハ正當ニシテ必要ナリヤト云フカ如キ仕拂命令官ノ事前調査事項ニマテモ立チ入りテ實質的事項ニ付テ調査ヲナスノ必要アルヘク、又會計法第十五條ニ依リテ其ノ債主ハ果シテ正當ナリヤ例之納入物品ハ既ニ納附濟トナリシヤ等ヲモ調査セサルヘカラス。若シモ斯クノ如クンハ國庫ノ權限ハ非常ニ重大ノモノナルト同時ニ其ノ責任モ亦極メテ大ナルヘシ。然レトモ斯クノ如キハコレ命令機關ト仕拂機關トノ畛域ヲ紊ルモノナリト云ハサルヘカラス。國庫ハ仕拂機關ナルカ故ニ唯其ノ仕拂ノ職務ヲ忠實ニ執行スレハ足レリ、タトヒ命令ノ内容ニ付テ欠クル所アルニモセヨ、此ノ事項ニ迄モ立チ入りテ之ニ容喙スルハコレ職務ノ分業ヲ蔑視シタルモノナリト云

ハサルヘカラス。是レヲ以テ仕拂事務ヲ取扱フ國庫カ其ノ呈示セル仕拂命令カ法律命令ニ違反スルヤ否ヤヲ調査スルハ單ニ形式的事項ノ調査ニ止メサルヘカラサルヤ當然ノコトナリ。此ノ點ニツキ金庫出納事務規程(明治二十六年大藏省訓令第三十九號)ハ第四條ニ於テ規定シテ

- (1) 該命令ノ様式ニ違フコトナキヤ
- (2) 該命令ノ金額ヲ支出簿仕拂豫算額ノ殘額ト照合シ仕拂豫算各項ノ金額ニ超過スルコトナキヤ
- (3) 集合仕拂命令ノ金額ハ該命令ニ添附シタル各債主ノ金額氏名表ノ金額ト違フコトナキヤ

ヲ調査スヘキモノトセリ。而シテ之ト同時ニ(明治二十六年)會計規則ニモ左ノ規定ヲ設クルニ至レリ。(第四十五條)

金庫ハ案内仕拂命令、集合仕拂命令若クハ金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スル仕拂命令ヲ受ケタルトキ其ノ命令合式ニシテ且仕拂豫算各項ノ金額ニ超過セサルトキハ仕拂ヲ爲スヘシ

而シテ此ノ仕拂豫算額ニ超過スルコトナキヤヲ調査スルニ便センカタメ、金庫

ハ大藏大臣ヨリ仕拂豫算ノ令達ヲ受ケタルトキハ其ノ金額ヲ支出簿ニ記載シ置クコトヲ要ス

第四節 出納官吏ノ責任

第一 出納官吏ノ意義

會計法第二十六條ニ依レハ出納官吏ハ政府ニ屬スル現金若ハ物品ノ出納ヲ掌ル所ノ官吏ヲ云フ。故ニ

(1) 出納官吏ハ管ニ現金ノ出納ヲ掌ル官吏ノミナラス、物品ノ出納ヲ掌ル官吏モ亦此ノ内ニ包含セラル。即チ官有財産保管ノ任ニ當ル者モ亦出納官吏ト云フコトヲ得ヘシ。然レトモ物品保管ノ任ニ當ル官吏ノ責任ハタトヒ現金保管ノ任ニ當ル官吏ノ責任ト其ノ性質ヲ同フスルニモセヨ。會計法及ヒ會計規則上ニ之ヲ規定セルハ少シク妥當ヲ欠クニ似タリ。蓋シ會計法ト云ヒ會計規則ト云ヒ凡テ金錢ノ收支ニ關スルコトヲ規定セルモノナレハナリ。

(2) 出納官吏トハ現金又ハ物品ノ出納ヲ掌ル者ニ限ラル、カ故ニ收入支出ノ命令ヲ掌トル者ハ此ノ内ニ包含セラレス。之ヲ換言スレハ出納官吏トハ執行系統

ニ屬スル官吏ノ謂ニ外ナラス。而シテ此ノ現金出納官吏ハ自カラ二種ニ分タルヘシ。即チ其ノ一ハ國庫ノ出納ヲ主ドル者ニシテ一ハ國庫ノ出納ニ付キ其ノ仲介機關トシテ取次ヲナス者コレナリ。而シテ前者ハ即チ日本銀行總裁ニシテ之レヲ金庫出納役ト云ヒ後者ハ收入官吏及ヒ現金前渡官吏コレナリ。收入官吏及ヒ現金前渡官吏ノ如何ナルモノニシテ如何ナル場合ニ設ケラル、ヤハ既ニ説明シタル所ナリ。然ルニ會計法及ヒ會計規則ヲ見ルニ會計法ハ單ニ出納官吏ト題シテ之ヲ規定セルカ故ニ以上ノ凡テニ適用セラレトモ會計規則ニ依レハ出納官吏ノ種類ヲ以上ノ三者ト爲セリ。會計規則ノ出納官吏ニ關スル責任ノ規定ニ至リテハ收入官吏竝ニ現金前渡官吏ニ付テノミ定メラレタリ。然リ而シテ會計法ノ規定ハ極メテ簡單ニシテ之レノミニ據ルトキハ不完全ノ説明トナルヘシ。故ニ吾人カ茲ニ「出納官吏ノ責任」ト題セルハ主トシテ收入官吏及ヒ現金前渡官吏ニ付テイフモノナリト知ルヘシ。然レトモ其ノ論スル所ハ概ネ金庫出納役ニ適用スルコトヲ得ヘシ（例外アリ身元保證金ノ如シ）

第二 出納官吏ノ資格

出納官吏ハ政府ニ屬スル現金ノ保管及ヒ出納ヲ主ドルモノナレハ其ノ責任ヲ

負擔スヘキモノタルヤ論ナシ。是ヲ以テ出納官吏ヲ任命スルニハ其ノ就職ノ當時ニ於テ身元保證金ヲ納付セシメ以テ其ノ取扱ニカ、ル政府ノ現金ニ損失ヲ來サシメタル場合ニ於テ辨償ニ備ヘサルヘカラス。又一方ヨリ云フモ身元保證金ノ納付ハ出納官吏ヲシテ其ノ責任ノ重大ナルヲ感知セシム。是レ會計法第二十八條ニ現金又ハ物品ノ出納ヲ掌ルニ付身元保證金ヲ納メシムルコトヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

ト規定セル所以ナルヘシ。而シテ茲ニ勅令ト云フハ「出納官吏身元保證金納付方」ニシテ其ノ第一條ニ曰ク

左ノ出納官吏ニシテ其ノ取扱金額一箇年五百圓以上又ハ當時保管スル物品ノ價格千圓以上ニ達スルモノハ身元保證金ヲ納ムヘシ

一 現金ノ領收ヲ常職トスル官吏

二 常時現金前渡ヲ受クル官吏

三 物品會計官吏

ト而シテ出納官吏ノ納ムヘキ身元保證金額ハ各省大臣之ヲ定ム其ノ金額ハ現金ヲ以テ納ムルコトヲ本則トシ公債證書若クハ土地ヲ以テ現金ニ代用スルコトヲ

得ヘシ。身元保證金ノ現金ニ付テハ大藏省通常預金ノ利子ヲ附スモノトス。又若シ
出納官吏ニシテ相當ノ資産アル者二人以上ヲ以テ保證人ト爲ストキハ、各省大臣
ハ其ノ身元保證金ノ全部若クハ一部ヲ免除スルコトヲ得ヘシ。

斯クノ如ク身元保證金ヲ以テ出納官吏タルニ必要ノ條件トナシタルモ、此ノ保
證金ノ必要ノ有無ニ付テハ多年經驗ノ結果消極說ニ傾クニ至レリ。蓋シ出納官吏
ノ取扱フ所ノ金額ハ其ノ身之保證金ニ比シテ非常ニ多額ナルヲ常トスルヲ以テ
タトヒ身元保證金ノ制度ヲ設クルモ若シ出納官吏ニシテ國庫ニ損失ヲ來シタル
場合ニ於テハ到底之レヲ以テ辨償ニ充ツルニ足ラサルヘク、又一面ヨリ見レハ出
納官吏ハ既ニ其ノ出納保管ニツキ一切ノ責任ヲ負フヘキコトヲ規定シタル以上
ハ身元保證金ノ如キハ何等ノ必要ナク却テ政府ハ之ニ對スル利子ヲ損失スルニ
止マルヘキナリ。若シモ身元保證金ヲシテ有名無實ナラサラシメントセハ其ノ金
額ハ多額ニ定メサルヘカラスシテ、コレ言フヘクシテ行フヘカラストノ議論漸ク
勢力ヲ占ムルニ至レリ。

茲ニ於テカ明治三十五年ニ至リ、前述セル「出納官吏身元保證金納付方」ノ勅令ヲ
廢止シ、之ニ代ユルニ「出納官吏身元保證ニ關スル件」ヲ以テセリ。即チ其ノ第一條ニ
依レハ

各省大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ現金若クハ物品ノ出納ヲ掌ル所ノ官吏ニ
身元保證金納付ヲ命スルコトヲ得
ト規定シ、原則トシテハ身元保證金ノ制ヲ廢シ、唯例外トシテ之ヲオクニ過キサ
ルコト、ナレリ。明治三十五年內務省訓令第十八號ノ如キハ最モ此ノ主義ヲ明ニセ
リ、曰ク

內務省所管出納官吏ハ身元保證金ノ納付ヲ要セス、但部局長ニ於テ必要ト認ム
ル場合ニ之ヲ納付セシムルコトヲ得
ト、而シテ今日實際ニ於テ身元保證金ノ制度ハ概シテ行ハレサルコト、ナレリ。

第三 出納官吏ニ對スル大臣ノ監督
出納官吏ノ職務ハ現金ノ出納保管ヲナスコトニ在リ、即チ執行系統ニ屬スルモ
ノナリ。從テ金庫カ凡テ大藏大臣ノ監督ノ下ニ在ルカ如ク出納官吏モ亦其ノ監督
ノ下ニ立ツモノナリ。會計規則第八十六條ニ曰ク
出納官吏ハ現金前渡及ヒ現金收入ニ關シ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受ク
ト、而シテ茲ニ特ニ「現金前渡及ヒ現金收入ニ關シ」ト云ヘルハ、出納官吏モ亦官吏ノ

一種ナルカ故ニ、本來ノ性質上本屬長官ノ指揮監督ノ下ニ立ツヤ明カナリ。本條ハ即チ出納官吏ハ本屬長官ノ監督ノ下ニ立ツノ外更ニ又大藏大臣ノ監督ノ下ニ立ツモノナルコトヲ明言セルモノナリ。彼ノ會計規則第四十一條ニ於テ

現金前渡ヲ受ケタル官吏監督ノ規則ハ大藏大臣各省大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

ト云ヘルハ此ノ規定ヲ特ニ現金前渡官吏ニ適用シテ言ヘルモノニ過キス。

出納官吏ニ對スル大臣ノ監督ハ主トシテ検査ノ方法ニ依リテ行ハル。即チ之レヲ監督スル爲メニ之ヲ任免スルノ自由ヲ有スルハ勿論平時ニ於テハ之レカ帳簿及ヒ金櫃ノ検査ヲ執行スルノ必要アリ。蓋シ其ノ帳簿ノ検査ヲ爲スハ一ニハ現金ノ收支及ヒ殘額カ計算上誤謬ナキヤ否ヤヲ知ルカ爲メニシテ、一ニハ帳簿ノ記載方カ例規ニ違背スル所ナキヤ否ヤヲ確メンカ爲メナリ。又金櫃ノ検査ヲ爲スハ言フマテモナク其ノ保管セル現在ノ金額カ果シテ帳簿ニ記載スル所ト合致スルヤ否ヤ、又帳簿ニ合致セサルコトアルトキハ其ノ何レカ正シキヤヲ明ニセンカ爲メナリ。

出納官吏ニ對スル検査ハ之ヲ分チテ二トナス、定期検査及ヒ臨時検査コレナリ

即チ會計規則第九十一條ニ從ヘハ定期検査トハ毎年三月三十一日ニ行フモノヲ云ヒ、臨時検査ハ出納官吏ノ轉免死亡停職ノトキ及ヒ大藏大臣又ハ本屬大臣カ必要ト認ムルトキ行フモノヲ云フ。而シテ此ノ二者共ニ實地ニ臨ミ検査スルコトハ言フ俟タス。

定期検査ノ必要ナルコトハ茲ニ喋々スルノ要ナシ。臨時検査モ亦等シク必要ナルモノニシテ若シモ出納官吏ニ轉免停職又ハ死亡アリタル場合ニ於テ帳簿及ヒ金櫃ノ検査ヲナスコトナク、後任者カ之レヲ引繼キタル後ニ於テ、其ノ誤謬又ハ不足アリタルコトヲ發見スルトキハコレ果シテ前任者ノ時代ニ生シタリヤ將タ後任者ノ時代ニ生シタリヤ明カナラスシテ、責任ノ歸着スル所ヲ知ラス。コレカ爲メニハ是非トモ之ヲ検査シ置クノ必要アルナリ。

明治二十三年大藏省訓令第五十四號ニ依レハ、出納官吏交替ノトキハ前任出納官吏ハ其ノ引繼クヘキ帳簿其ノ他ノ書類ノ目錄二通ヲ限リ後任出納官吏立合ノ上ニテ現物ニ照シ授受ヲ爲シタル後目錄ニ各自記名シ各一通ヲ所持スルモノトス。而シテ此ノ引繼ヲ了シタル後ニ於テハ一切ノ責任ハ後任者ノ負擔スル所トナルナリ。

検査ハ時日ノ遷延ヲ許サス検査員ノ臨檢シタルトキ即時ニ之ヲ行ハサルヘカ
 ラス。若シモ検査員ノ臨檢アルニモ關セズ、他ノ事情ヲ口實トシテ検査ヲ遷延スル
 カ如キコトアラハ、其ノ間ニ於テ種々ノ弊害ヲ生スルコトナシトセス。是ヲ以テ明
 治二十五年大藏省訓令第三十五號ニハ、出納官吏ノ金櫃帳簿検査トシテ検査員臨
 檢ノトキ休暇日又ハ退廳後ニ際スルモ検査員ノ通知ニヨリ出納官吏ハ何時タリ
 トモ其ノ検査ニ應スル儀ト心得ヘシト云ヘリ。

出納官吏ハ其ノ收入官吏タルト現金前渡官吏タルトヲ問ハス、其ノ國庫ノ現金
 取扱ヲ爲スト同時ニ、府縣郡等公共團體ノ公金ノ出納ヲ兼掌スルコトアリ。例之府
 縣知事ヲ歳入徴收官又ハ仕拂命令官トナセル場合ニ、府縣屬ハ一方ニハ國庫ノ出
 納官吏タリ而シテ之ト同時ニ府縣ノ官吏トシテ現金ノ取扱ヲナスコトナシトセ
 ス。此ノ場合ニ於テ現金ノ果シテ保管セラレタリヤヲ見ルニハ、此ノ兩種ノ金櫃ヲ
 併セテ検査セサルヘカラス。若シ然ラズンハ検査ノ際彼此流用シ以テ一時ヲ糊塗
 スルコトナシトセサレハナリ。コレ會計規則第九十四條カ「金櫃ノ検査ヲ執行スル
 場合ニ於テ此ノ種ノ兼掌アルトキハ別ニ検査ノ方法アルニ關セズ他ノ公金ヲ併
 セテ検査ヲ行フヘシト規定セル所以ナリトス。

以上ノ方法手續ニ依リ検査員カ出納官吏ノ帳簿金櫃ノ検査ヲ終了シタルトキ
 ハ其ノ檢定書二通ヲ製シ検査員及ヒ主務ノ出納官吏若クハ立會人之ニ署名シ、一
 通ハ該官吏若クハ立會人ニ交付シ一通ハ本屬大臣ニ提出スルヲ要ス。コレ會計規
 則第九十三條ノ規定ナリ。

第四 出納官吏ノ責任ノ基礎

會計法第二十六條ニ曰ク、

政府ニ屬スル現金若クハ物品ノ出納ヲ掌ル所ノ官吏ハ其ノ現金若クハ物品ニ
 付テ一切ノ責任ヲ負ヒ會計検査院ノ判決ヲ受クヘシ
 ト、即チ出納官吏ハ後ニ説明スルカ如ク、民事上ノ責任ヲ有シ其ノ生シタル損失ニ
 付テ賠償ヲ爲サ、ルヘカラス。コレ實ニ他ノ官吏ト異ル所ナリトス。例之汽車ノ機
 關士カ誤リテ汽車ヲ轉覆セシメ、コレニ依ツテ國家ニ損害ヲ生セシメタル場合ニ
 於テ、其ノ機關士ニ對シテ賠償ノ責任ヲ生セシムルコトナキニ關セズ、出納官吏例
 之收入官吏カ若干ノ收入アリシトキ之ヲ紛失シタリトセハ、政府ハ立所ニ此ノ者
 ニ對シテ賠償ノ責ニ任セシムルナリ。故ニ出納官吏ノ責任ハ到底一般官吏ノ責任
 ノ上ヨリ推論スルコトヲ得ス。コレ果シテ何レノ理由ニ基クヤヲ論究スルノ要ア

リ。
 惟フニ出納官吏ハ其ノ本來ノ職務トシテ現金ノ出納保管ノ任ニ當ルモノニシテ、其ノ職務上ニ於テ過失怠慢ノ行爲アルトキハ最モ多額ニ又最モ頻繁ニ國家ニ損害ヲ及ホスモノナリ。而シテ此ノ過失怠慢ノ行爲ヲ豫防センニハ賠償責任ヲ帶ハシムルヨリ良キハナシ。又他ノ方面ヨリ觀察スルトキハ出納官吏ハ現金ノ出納保管其ノモノヲ本來ノ職務トスルカ故ニ之ニ付テ損害アリトセハ直接ニ自己ノ職務ニ過チアリシモノナリ。然ルニ汽車ノ機關士カ汽車ヲ轉覆セシメタル場合ハ少シク趣キヲ異ニス。機關士本來ノ職務ハ貨物又ハ旅客ヲ輸送スルコトニ在リ、從テ其ノ轉覆ヲ來サシメタルハ直接ニ言ハ、輸送ノ業務ニ付テ過チアリシモノナリ。而シテ其ノ國家ニ損害ヲ蒙ラシメタルハ言ハ、從タル關係ニ於テ自己ノ職務ニ過チアリシモノト云フヘシ。之ヲ要スルニ特ニ出納官吏ニ對シテ賠償ノコトヲ規定セルハ職務上頻發スヘキ過失ヲ豫防シ注意ヲ爲サシメントスルコト、其ノ本來ノ職務カ現金ノ出納保管其ノモノヲ目的トスルニ存スレハナリ。其ノ結果國家ハ特ニ出納官吏ニノミ苛酷ナルカ如シト雖モ、コレ出納官吏ノ性質ヨリ生スル自然ノ結果ニシテ止ムヲ得サルモノト云フヘシ。

次ニ論究スヘキハ前述ノ如ク會計法第二十六條ハ出納官吏ハ其ノ現金ニ付一切ノ責任ヲ負ヒ會計検査院ノ検査判決ヲ受クヘキコトヲ規定ス。然ラハ此ノ會計検査院ノ判決ハ出納官吏ノ賠償責任ヲ定ムルニ必要ナルモノナリヤ。語ヲ換ヘテ言ハ、會計検査院ノ検査判決ニ依リテ出納官吏ハ賠償責任ヲ負フモノナリヤ。或ハ此ノ検査判決ヲ俟タスシテ當然賠償責任ハ定マレルモノナリヤ。而シテ會計規則ニ依レハ會計検査院ノ判決ハ賠償責任其ノモノヲ生セシムルモノニアラスシテ出納官吏カ負擔ヲ命セラレタル場合ニ於テ、其ノ理由ナシト認ムルトキ取消ヲ求ムルニ過キササルナリ。而シテ其ノ賠償ヲ命スルコトハ一ニ政府ノ自由ニ存ス。會計規則第八十八條ニ

各省大臣ハ所屬出納官吏ノ所爲ニ由リ政府ノ損失ヲ生シタルト認ムル場合ニ於テハ會計検査院ノ判決以前ト雖モ其ノ出納官吏ニ向テ辨償ヲ命スルコトヲ得

ト規定セルハ即チ之ヲ言明シタルモノナリ。之ヲ要スルニ出納官吏ノ賠償責任ハ政府ニ損失ヲ生セシメタル所爲其ノモノニ依リテ自然ニ發生スルモノニシテ、其ノ責ヲ免レント欲セハ特ニ會計検査院ノ判決ニ依リテ免責セラレサルヘカラス、

若シモ然ラサル以上ハ本屬大臣ハ其ノ損失ヲ來シタル事實ソノモノニヨリ當然賠償ヲ命スルコトヲ得ヘキナリ。

第五 出納官吏ノ責任ノ範圍

前述セル會計法第二十六條ニ依レハ、出納官吏ハ管ニ事實上現金ノ出納保管ノ取扱ヲ爲スニ止マラス其ノ事務ヲ掌理スルモノニシテ、從テ之レカ責任ヲ負擔スルモノナリ。果シテ然ラハ其ノ責任ノ範圍ハ如何、コレ自然ニ起リ來ル問題ナリトス。

會計法第二十六條ニオケル「責任」トハ如何ナル範圍ヲ有スルヤト云フニ、コレ會計法第二十七條ニイフ「負擔ノ責」會計規則第八十八條ニ云フ「辨償」ノ謂ニ外ナラス。然ルニ或ハ此ノ範圍ヲ擴張シテ一切ノ行政上、刑事上ノ責任ヲモ包括スルモノトナシ、現金ノ出納保管ニ付テ誤リアルトキハ此ノ規定ニ依リ或ハ懲戒處分ヲ受クヘク或ハ刑罰ヲモ科シ得ヘシトナスモノアリ。然レトモ本條ノ規定スル所ハ斯クノ如ク廣キ範圍ニ亘ラスシテ單ニ出納官吏ニ民事上損害賠償ノ責ニ任スヘシト云フナリ。

然ラハ更ニ一步ヲ進メテ茲ニ云フ「一切ノ責任」トハ如何ナル意味ナリヤ、其ノ責任ハタトヒ賠償ノ責任ニ限ラル、トスルモ「一切ノ責任ヲ負ヒ」ト云ハ例之仕拂命令カ法令ニ違ヒタルモ出納官吏ハ之ニ注意セスシテ仕拂ヲ爲シタルカ如キ場合ヲモ包含スルヤ、或ハ現金ノ仕拂ヲ爲シタル際領收證書ヲ徴スルコトヲ忘レタルカ爲メ政府ニ損害ヲ生シタル場合ハ如何、又火水盜難等ノ場合ニ於テハ如何トハ自然ニ生スル場合ナリトス。此ノ内第一ト第二トハ出納官吏ノ性質上ヨリ解決スルコトヲ得ヘシ。蓋シ出納官吏ハ前述セルカ如ク命令機關ニアラスシテ單ニ現金ノ出納機關タルニ過キス。從テタトヒ茲ニ「一切ノ責任ヲ負ヒ」ト規定セラレ、モ此ノ一切ノ責任ハ出納官吏ノ性質ヨリ生スル責任ノ外ニ出テサルナリ。即チ出納官吏ハ仕拂命令ノ實質ニ立チ入りテ調査ヲ爲スハ其ノ職務トスル所ニアラスシテ、唯其ノ形式手續カ違法ニアラサルコトヲ期スヘキノミ。是レヲ以テ第一ノ場合ノ如キハ出納官吏ノ責任中ニ入ラス、之ニ反シテ第二ノ場合ノ如キハ明ニ出納官吏ノ過失ニ歸スルコトヲ得ヘク從テ其責任ヲ免ル、コトヲ得サルナリ而シテ此ノ第三ノ場合ニ付テハ會計法第二十七條ノ規定アリ、曰ク
前條ノ官吏水火盜難又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ其ノ保管スル所ノ現金若クハ物品中紛失毀損シタル場合ニ於テ其ノ保管上避ケ得ヘカラサリシ事實ヲ會計檢

査院ニ證明シ責任解除ノ判決ヲ受クルニ非サレハ其ノ負擔ノ責ヲ免ル、コトヲ得ス。

ト、即チ此ノ規定ニ依レハ出納官吏ハタトヒ水火盜難ノ場合ト雖モ其ノ危難カ避ケ得ヘカラサリシ事ヲ證明セサルヘカラス。若シ其ノ危難ニシテ避ケ得ヘカリシ場合ニ於テハ負擔ノ責ヲ免ル、コト能ハサルナリ。

而シテ尙ホ解決スヘキ疑問ハ實際上出納官吏ハ數多ノ下級官吏ヲシテ事務ノ取扱ヲナサシムル場合ニ於テ其ノ出納官吏ナラサル下級官吏カ例之現金ヲ以テ逃亡シタルカ如キコトアリトセハ、出納官吏ハ賠償ノ責ニ任スヘキモノナリヤ否ヤ。此ノ點ニ付テハ會計規則第八十四條ハ規定シテ曰ク

出納官吏ハ其ノ責任ニ屬スル會計ニ付自身ニ事務ヲ執ラサルヲ理由トシテ其ノ責任ヲ免ル、コトヲ得ス

ト然レトモ他ノ規定モ亦前掲會計法第二十七條ノ制限ヲ受クヘキモノナリ。即チ出納官吏ハ其ノ下級ノ官吏ニ事務ヲ執ラシメ其ノ結果現金ノ紛失ヲナシタリトセンニ、其ノ現金ノ紛失カ避ケ得ヘカラサル事實ニ出ツルモノトセハ出納官吏ノ責任ハ須ラク之ヲ免セサルヘカラス。其ノ現金ノ紛失カ不注意ニ出テ避ケ得ヘカ

リシ場合ニ於テ斯クノ如キ失態アリトセハ、此ノ場合ニ於テ始メテ出納官吏ハ其ノ責任ヲ負フヘキモノトス。

又出納官吏ノ分任官又ハ代理官ノ存在シタル場合ニ於テ、其ノ分任官又ハ代理官ノ爲シタル事項ニ付テハ、勿論主任出納官タルモノハ其ノ責任ナキモノトス。何トナレハ彼等ハ出納官吏以外ノモノニアラスシテ出納官吏タル身分ヲ取得スルモノナレハナリ。是ヲ以テ會計規則第八十四條ニハ下ノ如キ但書アリ、曰ク

但シ各省大臣ノ命令ヲ以テ特ニ其ノ代理官若クハ分任官ヲ定メタルトキ其ノ代理官若クハ分任官ノ所爲ニ付テハ本條ノ限りニアラス

ト、而シテ茲ニ代理官トハ一時的ノモノニシテ出納官吏ノ事務ノ全部ヲ代理スル者ヲ云ヒ、分任官トハ常設的ノモノニシテ事務ノ一部ヲ分掌スル者トス。而シテ其ノ責任ニ付テハ會計規則第八十五條ニ左ノ規定アリ、曰ク

各省大臣ノ命シタル出納官吏代理官若クハ分任官ハ其ノ行爲ニ付會計法第二十六條ノ責任ヲ免ル、コトヲ得ス

ト、之ヲ以テ代理官又ハ分任官ハ主任出納官吏ト全然同一ノ地位ニオカル、コトヲ知ルヘシ。

尙一言ヲ要スルハ二人又ハ二人以上同一ノ事務ニ付納官吏ヲ命セラレタル場合ニ於テ政府ニ損害ヲ及ホシタルトキハ政府ハ彼等ニ其ノ損害高ヲ均等ニ配分シテ辨償セシムヘキカ將タ連帶責任ノ原則ニ依リ自由ニ或ル一人ニ對シテ金額ノ辨償ヲ命スルコトヲ得ルカ此ノ點ニ付テ會計法會計規則ハ何等ノ明文ナキヲ以テ一ノ疑問トナサ、ルヲ得ス。政府從來ノ爲ス所ヲ見レハ或ハ前者ノ處置ヲ執レルカ如シ。然レトモ辨償金ヲ命スルコトハ恰モ民事上不法行爲ニ依ル損害賠償ノ場合ト其ノ性質ヲ同フシ理論上ヨリイヘハ連帶責任ヲ負ハシムヘキモノナリ。

最後ニ出納官吏ノ辨償責任ハ民事上ノ性質ヲ有スルモノナルカ故ニ出納官吏ノ前任者ト後任者トノ間ニハ何等繼續的ノ關係ナシ。コレ命令系統ノ機關ト異ル所ニシテ例之仕拂命令官ニ交迭アルトキ後任者ハ前任者ノ後ヲ承ケ前任者ノ措置ニ付テ會計検査院ヨリ質問アルトキハ之ニ答辯スルノ責任ヲ有ス。然ルニ出納官吏ハ其ノ責任全ク後任者ニ及ハサルモノトス

第四章 年度間ノ關係

第一節 年度所屬

第一 年度間關係ノ原則

會計年度ハ既ニ説ケルカ如ク四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ヲ終ルモノニシテ元來其ノ之ヲ設ケタル目的ハ其ノ期間ヲ限リテ會計ノ整理ヲ爲スコトニ在リ。之レヲ以テ甲年度ノ收支ト乙年度ノ收支トハ豫算上彼此流用スルコトヲ許サス現計モ亦之ニ從テ整理シ決算ヲ爲スヘキモノトス。會計法第十一條ハ歲入ト歲出ノ關係ニ付テ此ノ原則ヲ明言シ會計法第三條ハ歲出相互ノ關係ニ付テ此ノ原則ヲ明言セリ。會計法第三條ニ曰ク

各年度ニ於テ決定シタル經費ノ定額ヲ以テ他ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツルコトヲ得ス

ト、茲ニ各年度ニ於テ決定シタル經費ノ定額トハ即チ豫算ニ於テ定メタル歲出額ノ謂ナリ。此ノ歲出額ハ即チ其ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツヘキモノニシテ他ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツルコトヲ得ス。又會計法第十一條ニ曰ク

每會計年度ニ於テ政府ノ經費ニ充ツル所ノ定額ハ其ノ年度ノ歲入ヲ以テ之レ

ヲ支辨スヘシ

ト、茲ニ「政府ノ經費ニ充ツル所ノ定額」トハ豫算ニ定メタル歳出金額ノコトナリ。此ノ歳出金額ヲ支辨スルニハ其ノ年度ニオケル歳入ヲ以テスヘキモノニシテ他年度ノ歳入ヲ以テスルヲ得サルヤ勿論ナリトス。

以上ノ原則ハ極メテ明白ナルモ、之ヲ實際ニ適用スルニ當リテハ第一ニ某年度ノ歳入又ハ歳出トハ如何ナルモノヲ云フカ即チ甲年度ノ歳入出ナリヤ乙年度ノ歳入出ナリヤニ付テ疑アルトキ如何ナル標準ヲ以テ決定スヘキカヲ明カニスルコトヲ要ス、コレ即チ茲ニ年度所屬トシテ説明スル所ナリトス。

第二 歳入ノ年度所屬

歳入ノ年度所屬ニ付テハ會計規則第一條ニ規定アリテ、歳入ヲ三箇ニ分チ(1)納期ノ一定シタル収入(2)隨時収入ニシテ納額告知書ヲ發スルモノ(3)隨時収入ニシテ納額告知書ヲ發セサルモノトセリ。理論上ヨリ言ヘハ納額告知書ヲ發シタル日ヲ以テ其歳入ノ年度所屬ヲ定ムルヲ正當トスヘキモ、實際上納額告知書ノ發行ヲ略スルコトアリ、又之ヲ發スルモ納期ノ一定シタルモノハ歳入ノ整理上之ニ依ラサルヲ便利トスルコトアリ、即チ

(1) 納期ノ一定シタル収入

納期ノ一定シタル収入ハ其ノ納期末日ノ屬スル年度ヲ以テ年度所屬ヲ定ムルモノトス。コレ主トシテ租稅收入ニ於テ見ル所ニシテ其ノ趣旨ハ納額告知書發行ノ日カ異ナレリトテ同期ニ徵收スヘキ同種ノ租稅ヲ或ハ甲年度所屬トシ或ハ乙年度所屬トシテ區々ニ亘ラシムルハ歳入ノ整理上其不便少カラサレハナリ又此ノ納期ノ一定セル收入ハ租稅以外ニモコレアリ。例之官有地貸下代ノ如シ。

普通ノ場合ニハ納額告知書ハ先ツ發行セラレ若干日ノ後納期末日ニ遭遇スルモノニシテ此ノ場合ニハ以上ノ規定ヲ適用スルモノナルカ、若シモ納期所屬ノ年度ニ於テ納額告知書ヲ發セサル場合アリトセハ即チ兩者前後ノ順序ヲ轉倒シシカモ其ノ年度ヲ異ニセリトセハ如何ト云フニ此ノ場合ニハ會計規則第三十一條ノ二ニ依リテ總テ納額告知書ヲ發シタル年度ノ歳入ニ編入スヘキモノトス。何トナレハ此ノ例外ナル場合ニハ理論上ノ原則ニ從フモ歳入ノ整理上不便ヲ感スルコトナケレハナリ

(2) 納額告知書ヲ發スル隨時収入

コレ租稅外收入ニ於テ廣ク見ル所ナリ。此ノ場合ニハ第一ノ場合ノ如ク其ノ性

質上多數ノ人ヨリノ収入ヲ一括シテ同一ノ年度所屬トシテ整理スルノ必要ニ迫ラル、モノニアラス。從テ理論上ノ原則ニ依リタルナリ。

(3) 納額告知書ヲ發セサル隨時收入

コレ印紙ノ賣下代、鐵道汽車賃等ニアル所ニシテ、其ノ領收シタル日ノ屬スル年度ニ入ルヘキモノトス。何トナレハ既ニ納額告知書ヲ發行セサルヲ以テ理論上ノ原則ニ依ルコト能ハス現實ニ收入アリシトキヲ以テスルノ外ナケレハナリ。

第三 歳出ノ所屬年度

歳出ニ於テモ會計規則第二條ハ種類ヲ分テ各場合ノ所屬年度ヲ規定セリ、即チ左ノ如シ。

(1) 公債ノ元利、賞勳年金、恩給諸祿

此等ハ凡テ豫メ法律又ハ其ノ他ノ規定ニ依リ仕拂期日ヲ定ムルモノニシテ、其ノ所屬年度ハ仕拂期日ノ屬スル年度ナリトス。例之一二三月分ノ恩給ヲ下附スルコトカ四月ナリトセハ其ノ所屬年度ハ甲年度ニアラスシテ乙年度ナリ。

(2) 諸拂戻、缺損補填

此ノ場合ニアリテハ其ノ拂戻又ハ補填ノ決定ヲ達シタル日ノ屬スル年度ニヨ

ルヘキモノトス。茲ニ諸拂戻トハ一旦政府ニ納附セラレタルモノニシテ再ヒ納人ニ拂戻サル、モノヲ云フ例之醬油砂糖等ノ戻稅醬油稅則第十三條輸入原料砂糖戻稅法第一條ノ如キ弘ク租稅ナルト租稅外ナルトヲ問ハス過誤納アリシ場合ニ後ニ至リ之ヲ發見シタル場合ノ如キ是レナリ。又缺損補填トハ歳入出ニカ、ル現金カ火災盜難等ノタメ不足シタル場合ニ於テ其ノ不足ヲ填補スルヲ云フナリ。

(3) 俸給、手數料、旅費等

此等ノモノハ其ノ支給スヘキ事實ノ生シタル時ノ屬スル年度ニヨルヘキモノトス。唯茲ニ注意スヘキハ旅費ノ場合ニ於テハ其ノ支給スヘキ事實ノ生シタル時ヲ以テ年度所屬ヲ定ムルトスルモ實際上其ノ區分ノ明瞭ナラサルコトアルヘシ。コレニ付テハ内國旅費規則第七條ニ左ノ規定アリ曰ク、年度若クハ日ニ依リテ旅費ヲ區分シテ計算スルノ必要アル場合ニ於テ汽車旅行若クハ水路旅行ニシテ其ノ區分判明ナラサルトキハ最近ノ到着地ニ着シタル日ヲ以テ其ノ路程ヲ區別シテ計算ス。

(4) 廳中雜費、土木建築費其他物件ノ購入代價ノ類

此等ノモノハ契約ヲ爲シタル日ノ屬スル年度ニ依ルヘキモノト規定セリ。然ル

ニ此ノ規定ハ文字通りニ解釋スルトキハ往々弊害ヲ生スルコトアリ、即チ年度末ニ至リ豫算ニ剩餘アルトキ此ノ規定ヲ濫用シ其年度ノ豫算ヲ以テ次年度ノ經費ヲ支辨セントスルカ如キコトナシトセス。茲ニ於テカ以上ノ規定ハ實際上、契約ニ因リテ仕拂義務ノ確定シタル日、即チ現品ノ受入アリタル日ノ意味ニ解釋スルコト、ナルカ如シ。

(5) 前各項ニ掲クル類別ニ入ラサル費用

此ノ場合ニ於テハ凡テ仕拂命令ヲ發シタル日ヲ以テ年度所屬ヲ定ムルモノトス。

歳出ニ付テハ斯クノ如ク其ノ規定多岐ニ亘リ、シカモコレ多クハ實際上ノ便宜ヲ主トシテ定メタルモノナリ。理論ヨリ言ヘハ收入ニアリテハ納額告知書ノ發行日ヲ以テ年度所屬ヲ定ムヘキモノナルモ支出ニアリテハ仕拂命令ノ發行ハ支出其ノモノニシテ納額告知書カ收入ノ義務ヲ確定スル如ク支出義務ノ確定ノ基ヲナスモノニアラス。支出ニアリテ支出義務ノ確定ハ例之物品ノ購入ニ在リテハ其受入アリタルトキ俸給、旅費、公債利子等ニアリテハ其ノ事實ノ生シタルトキナリトセサルヘカラス。從テ年度所屬モ亦之ニ依リテ決定スヘキモノナルモ實際ノ便

宜上必ラスシモ此ノ理論ニ依ラサルモノトス。

第二節 整理期間

第一 仕拂命令ノ發行期間

歳入ニ在リテハ納額告知書ノ發行ニ何等ノ猶豫期間ヲ與ヘサルニ反シ歳出ニ在リテハ會計規則第四十四條ニ左ノ如キ規定アリ。

各年度ニ屬スル經費ヲ精算シテ仕拂命令ヲ發スルハ翌年度五月三十一日限リトス

ト、蓋シ歳入ニ在リテハ既ニ説明スルカ如ク納額告知書ノ發行日又ハ領收ヲナシタル日ヲ以テ年度所屬ヲ定メ納額告知書ヲ發シタル日以前ノ事項ニ依リテ年度所屬ヲ定ムルコトナキヲ以テ從テ納額告知書ノ發行ニ付テ猶豫期間ヲ認ムルノ必要ナキモ、歳出ニ在リテハ或ハ其ノ支給スヘキ事實ノ生シタル時ヲ以テ年度所屬ヲ定メ或ハ契約ヲ爲シタル日ヲ以テ年度所屬ヲ定ムルノ結果トシテ、此ノ事實又ハ契約ニ基キテ發行スル仕拂命令ハ常ニ之ニ後ル、ハ當然ノコトナリ。果シテ然ラハ甲年度内ニ於テ其ノ事實ハ發生シ其ノ契約ハ結ハレタリトスルモ仕拂命

令ノ發行ハ翌年度四月一日以後ニ亘ルコトアルハ止ムヲ得サルコトナリト云ハサルヘカラス。是レ即チ茲ニ仕拂命令ニ限り發行ノ猶豫期間ヲ定メタル所以ナリ。然リ而シテ此ノ規定ニ依レハ其ノ期日ヲ翌年度五月三十一日ニ限リタルヲ以テ、苟クモ前述セル年度所屬ノ規定上某年度ニ屬スヘキモノナル以上ハ其ノ仕拂命令ハ次年度五月末日マテニ發行スレハ其年度ノ支出タルニ於テ何等ノ差支ナシ。然レトモ若シ五月末日ニ至ルモ仕拂命令ヲ發行セサルトキハタトヒ上述ノ年度所屬ノ規定上某年度ニ屬スヘキモノナリトスルモ最早其年度ノ支出トシテ取扱フコト能ハサルナリ、此ノコトハ次ニ説明スル過年度支出ノ條ヲ併セ見ルヘシ。尙ホ以上ノ規定中「各年度ニ屬スル經費ヲ精算シテ」トハ其ノ年度ニ屬スル歳出豫算ノ款項ノ金額ニ對シコレマテ支出シタル經費ヲ精算シ其ノ殘額ノ範圍内ニテ仕拂命令ヲ發行スルコトヲ得ルノ義ナリ。尙ホ最後ニ仕拂命令ハタトヒ五月末日以前ニ發行セラル、モ其ノ基ツク所ノ事實又ハ契約カ四月一日以後ニアリタルモノトセハ言フマテモナクコレ乙年度ノ支出ニシテ甲年度ノ支出ニアラス。之レヲ以テ五月末日マテノ仕拂命令ニ付テハ常ニ其ノ基ツク所ノ事實又ハ契約甲年度内ナリシヤ乙年度ニ至リテ生シタルヤヲ見テ其ノ年度所屬ヲ決定スヘキモノトス。

第二 金庫出納期間

仕拂命令ノ發行期間ニ付キ以上ノ如ク猶豫ヲ與ヘタリトセハ、又之ニ對スル現金ノ仕拂ニ付テ、ヨリ以上ノ猶豫期間ヲ與ヘサルヘカラサルハ勿論ナリ。又收入ニ付テイフモ其ノ告知書ハ前述ノ如ク年度内ニ發スルコトヲ要スト雖モ現金ノ納金ノ納入ハ此ノ告知書ニ依リテ爲サル、モノナルカ故ニ其ノ現金ノ納付ハ四月一日以後ニ行ハル、コトハアリ得ヘキコトナリ。コレ收入ニ付テモ現金ノ受領ニ猶豫期間ヲ要スル所以ナリ。而シテ會計規則ハ第三條ニ於テ

各年度所屬歳入歳出金ヲ金庫ニ於テ納入スルハ翌年度六月三十日限リトスト規定セリ。故ニ歳入金ト歳出金トハ均シク六月三十日ヲ以テ出納期間トスルモノナリ。然リ而シテ歳出ニ付テ此ノ期日ニ至ルモ尙ホ仕拂ノ請求ナキトキハ會計規則第四十七條ニ

各年度ノ仕拂命令ニシテ翌年度六月三十日マテニ仕拂ノ請求ナキ仕拂命令濟金額ニ相當スル資金ハ會計法第二十條ノ歳計剩餘ニ組入レス國庫ニ於テ繰越整理スヘシ。

ト規定セリ。故ニ七月一日以後ニ仕拂命令ヲ持參シテ請求スル者アルトキハ翌年度ノ歳入ニ繰入レヌ。獨立セシメタル資金仕拂命令濟現金交付未濟額中ヨリ仕拂フヘキモノトス。又歳入ニ付テ現金ノ納付カ翌年度七月一日以後ニ亘ル場合ハ後ニ述フル如ク過年度收入トシテ取扱フモノトス。

第三 主計簿ノ締切

以上ノ如ク年度經過後仕拂命令ノ發行猶豫期間ト現計出納ノ猶豫期間トヲ經過スルトセハ更ニ大藏省ニ備ヘ付ケラレタル主計簿ヲ締切リ以テ當該年度ニ於ケル收支ノ事務ヲ完結シタルモノトス。此主計簿ハ即チ決算ノ基礎トナルモノナリ。主計簿ノ整理ヲナシ其ノ締切ヲ爲スニハ現金出納ノ猶豫期間後若干ノ時日ヲ要スルモノナリ。會計規則第百十九條ニ曰ク

各年度經過後七箇月ノ末日ニ於テ大藏大臣ハ會計検査官立會ノ上ニテ大藏省ニ備ヘタル主計簿ヲ締切ルヘシ

ト即チ七箇月ノ末日ト云ヘハ十月末日ニ相當ス。此ノ七箇月ノ期間ハ明治三十五年勅令第二百號ヲ以テ改正シタル所ニシテ、ソレ以前ハ八箇月即チ十一月末日ヲ限リトナセリ。即チ會計法第一條ニモ

一會計年度所屬ノ歳入歳出ニ關スル事務ハ翌年度十一月三十日マテニ悉皆完結スヘシ

トノ規定ノ存スル所以ナリ。此ノ二箇ノ規定ハ牴觸スルモノ、如キモ元來會計規則ハ會計法ノ範圍内ニテ活用セラル、モノナルカ故ニ會計規則ノ定ムル期間カ會計法ノ定ムル期間ヨリモ長期ニ亘ラサル限リハ牴觸アリト云フコトヲ得ス。畢竟會計規則ハ會計法ノ範圍内ニテ更ニ適當ナル時日ヲ選定シタルニ過キササルナリ。

第四 消滅時效

會計上ノ消滅時效トハ一定ノ期限ヲ經過スレハ法律ノ規定ニ依リテ債權債務ノ關係消滅ニ歸スルヲ云フ。而シテ其ノ期間ニ付テハ短期ノ時效ヲ認メ會計ノ結了ヲ告クルノ必要アリトシテ、原則トシテ五年トセリ。即チ會計法第十八條、十九條ノ規定ハ左ノ如シ。

政府ノ負債ニシテ其ノ仕拂フヘキ年度經過後滿五箇年内ニ債主ヨリ支出ノ請求若クハ仕拂ノ請求ヲ爲サ、ルモノハ期滿免除トシテ政府ハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各其ノ定

ムル所ニ依ル

政府ニ納ムヘキ金額ニシテ其ノ納ムヘキ年度經過後滿五箇年内ニ上納ノ告知ヲ受ケサルモノハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各其ノ定ムル所ニ依ル。

茲ニ支出ノ請求トハ仕拂命令發行ノ請求ニシテ仕拂ノ請求トハ現金仕拂ノ請求ヲ云フ。又特別ノ法律ヲ以テ定メタル場合トハ例之整理公債條例ニ於テ元金償還ノ時効ヲ其ノ月ヨリ十五箇年ニ定メタルカ如キ地租條例ニ於テ地租ノ逋脱者等ニ對シ發覺ノ日ヨリ三年以前ニ遡ルコトヲ得ストシ、關稅法ニ於テ關稅ノ徵收權ハ貨物輸入ノ日ヨリ滿二箇年トシタルカ如キコレナリ。

第三節 年度間ノ讓渡

第一 歲計剩餘

歲計剩餘トハ國庫カ一年度間ニ於テ實際領收シタル金額ヨリ支出ヲ爲セル(仕拂命令ヲ發行セル)金額ヲ差引キ國庫ニ存在セシ出納殘額ヲ云フ而シテ此ノ殘額ハ主計簿ノ締切ニ依テ明瞭トナルモノナリ。コレヲ以テ「金庫出納期間」ノ條ニ説明

シタル彼ノ「仕拂命令濟現金交付未濟額」ハ設令現金トシテハ同シク國庫ニ現存スヘキモ、別途ニ整理スヘキモノナリ。

歲計剩餘金ノ處分ニ付テハ會計法第二十條ニ規定アリ。曰ク

各年度ニ於テ歲計ニ剩餘アルトキハ其ノ翌年度ノ歲入ニ繰入ルヘシ

ト、即チ主計簿締切ノ結果トシテ其ノ收入濟額中ヨリ仕拂命令濟額ト翌年度繰越額(次ニ説明スル)定額繰越ヲ見ルヘシトヲ引キ去リタル歲計剩餘金ハ翌年度ノ歲入ニ繰入セララル、モノナリ。

第二 過年度收入、返納金及豫算外收入

會計法第二十三條ニ依レハ「誤拂過渡」トナリタル金額ノ返納、出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入、及ヒ其ノ一切豫算外ノ收入ハ總テ現年度ノ歲入ニ組入ルヘシトセリ。茲ニ出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入トハ即チ過年度收入ニシテ、甲年度中ニ納額告知書ヲ發シタルニ漸ク乙年七月ニ至リ納入アリシトセハ、甲年度ノ出納期間經過後ナルカ故ニ、既ニ甲年度ノ收入トシテ取扱フコト能ハサルモノトス。又返納金ハ誤拂過渡ニ依ル場合ニシテ誤拂トハ正當ノ受取人ニアラサル者ニ仕拂ヲ爲スヲ云ヒ、過渡トハ正當ノ受取人ナルモ金額ヲ過分ニ仕拂ヒタルヲ云フ

又豫算外ノ收入トハ豫定セサリシ收入ニシテ豫算上ニ見積ラサリシモノナリ。盜難金ノ發見セラレタルカ如キコレナリ。

而シテ此等ノ收入ハ上記ノ規定ニ依リ、總テ現年度ノ歳入ニ組入ル、モノトセリ。即チ甲年度ノ收入ニシテ出納整理期限前ニ收入セラレサリシモノハ其ノ收入セラレタル乙年度丙年度……等ノ歳入トナルヘク、又返納金、豫算外支出ナルトキハ甲年度内ニ收入セララル、トキハ甲年度ノ歳入トナルヘク、乙年度丙年度……等ニ收入セラレタリトセハ乙年度丙年度……等ノ歳入トナルモノトス。但シ返納金ニ付テ甲年度ノモノカ甲年度ニ收入セラレタリトセハ、甲年度ノ歳入トセスニ例外トシテ他ノ方法ヲ採ルコトアリ、是レ即チ定額戻入ナリ。

第三 定額戻入

定額ノ戻入ハ年度間ノ讓渡ニ關スルモノニアラスシテ、全ク年度間ノ關係ナレトモ、上述セル「現年度繰入」ノ原則ニ對スル例外ナルヲ以テ、序ヲ以テ茲ニ説明スヘシ。

定額ノ戻入トハ返納金アリタル場合ニ生スル問題ニシテ、仕拂命令官カ一旦仕拂命令ヲ發シタル後ニ於テ、其ノ年度内ニ過拂又ハ誤拂ノタメ返納金アリシ場合

ニ於テ之ヲ其ノ年度ノ歳入トセスニ仕拂命令濟額ノ内ヨリ之ヲ控除シ豫算定額ヲシテソレタケ原狀ニ回復セシムルコトヲ云フ。

然リ而シテ此ノ定額戻入ヲナシ得ヘキ返納金ハ勿論一般的ニアラスシテ一定ノ事項ニ限ラル。即チ(1)前金拂ヲ爲シタル場合(2)概算渡ヲ爲シタル場合(3)繰替拂ヲナシタル場合コレナリ。即チ會計法第二十三條ハ之ヲ規定シテ

法律勅令ニ依リ前金渡、概算渡、繰替拂ヲ爲シタル場合ニ於ケル返納金ハ各之ヲ仕拂ヒタル經費ノ定額ニ戻入ル、コトヲ得

ト云ヘリ。蓋シ此等ノ仕拂ハ元來確定的ノモノニアラスシテ始メヨリ返納ヲナスヲ以テ前提トスルモノナリ。從テ會計法上「返納金ハ現年度ノ歳入トナス」ノ原則即チ一旦仕拂命令ヲ發シタルモノハ歳出ヲ其ノ儘ニシテ整理スルノ原則ノ例外トシテ此ノ種ノ返納金ヲ認メサルヲ得サルナリ。

(1) 前金渡ヲ爲シタル場合トハ、即チ(1)現金前渡ノ場合(2)會計法第二十五條ニ依ル前金拂ノ場合(3)並ニ勅令ヲ以テ規定セラレタル前金渡ノ場合コレナリ。會計法第二十五條ニ依ル前金拂ノ場合トハ同條ニ於テ

軍艦兵器彈藥ヲ除ク外工事製造又ハ物件買入ノ爲ニ前金拂ヲ爲スコトヲ得ス

トノ規定ニ依ルモノニシテ、即チ軍艦等ヲ購入スル場合ナリトス。又前金渡ヲナス場合トハ、例之外國留學生ニ支給スル學資金ノ如キ在外公館ノ借料又ハ租稅費ノ如キ陸海軍々人軍屬ノ旅費旅行ノ種類ニ制限アレトモノ如キモノナリ。此等ハ凡テ勅命ヲ以テ前金渡ヲナスヘキ旨ヲ規定セサルヘカラス。

(2) 概算渡ヲ爲シタル場合トハ、例之内國及ヒ外國ニ出張ヲ命シタル者ノ旅費、國庫ヨリ補助スル府縣警察費連帶支辨金、府縣傳染病豫防費、外國ニ於テ鐵道、船舶ニ依ル運輸業ヲ營ム會社ニ下付スル補給金ノ如キモノニシテ、此等ハ法律又ハ勅令ヲ以テ定ムル所ニシテ、受取人ハ後日精算ヲ爲シ剩餘ヲ生シタルトキハ返納スルモノトス。

(3) 繰替拂ヲ爲シタル場合トハ、例之在外難民貸與金、艦船經費、官設鐵道ニ於テ徵收シタル通行稅ノ拂戻金ノ如キハ、現金前渡官吏ヲシテ他日ノ返濟ヲ期シテ、他ノ費目ニ充ツヘキ金額ヲ以テ一時立替ヲナスコトヲ得ヘシ。此ノ場合ニ於テ他日ノ返濟ハ即チ茲ニ云フ返納ナリトス。然リ而シテ繰替拂ヲ爲スヘキ場合ハ一般ニ勅令ヲ以テ規定セラル。

以上ノ場合ニ於テ定額ノ戻入ヲ爲スニハ、仕拂命令官ハ定額ノ戻入ヲ爲サンコ

トヲ金庫ニ通知シ(但シ現金前渡官吏カ繰替拂ヲ爲ス場合ハ此ノ限ニアラス)同時ニ返納人ニ對シテ返納告知書ヲ發ス金庫ニ於テ之ニ對スル金額ヲ領收シタルトキハ定額ニ戻入ヲナシタル旨ヲ仕拂命令官ニ通知シ、仕拂命令官ハコレニ依リ定額戻入ノ旨ヲ帳簿ニ記入シ仕拂命令濟額ヲ訂正スルナリ。

第四 過年度支出

過年度支出トハ過去ノ年度ノ支出ノ謂ナリ。之レヲ換言スレハ收支ノ完結シタル年度ニ屬スル支出ノコトナリ。元來一年度ノ支出即チ仕拂命令ノ發行ハ翌年度五月三十一日限リトス。然ルニ此ノ支出即チ仕拂命令ノ發行カ翌年度六月一日以後ニナサレタリトセハ、如何ニ之ヲ處理スヘキヤハ會計法上ノ規定ヲ要ス。何トナレハ、債主ハ政府内部ノ事情如何ハ其ノ關スル所ニアラスシテ、苟クモ時効ニカ、ラサル以上ハ其ノ請求權ヲ即時ニテモ活用シ得ヘキカ故ニ、政府ハ豫メ其ノ仕拂財源ニ付テ備フル所アルヲ要スレハナリ。即チ會計規則第六十條ニハ

過年度ニ屬スル經費ノ支出ヲ爲ストキハ現年度各省定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘシ

ト規定セリ。コレ此ノ場合ニ於テハ既ニ前年度ノ仕拂命令發行期限ハ經過シタル

カ故ニ止ムヲ得ス現年度ノ各省定額ニ對シテ仕拂命令ヲ發セシムルナリ。
然レトモ此ノ仕拂命令ヲ發スル金額ハ之ヲ制限スルコトヲ要ス。然ラスンハ過
年度支出ノ爲メニ現年度豫算定額ハ其ノ大分ヲ蠶食セラル、ノ虞レナシトセサ
レハナリ。之カ爲メニ會計規則第六十二條ハ規定シテ

第六十條ニ據リ支出セントスル經費ノ金額ハ豫備金ヲ以テ補充シ得可キモノ
ノ外其ノ經費所屬年度ノ豫算ニ於テ該經費ノ屬スル毎項定額中不用トナリタ
ル金額ヲ超過スルコトヲ得ス

ト云ヘリ。例之某官廳ノ廳費定額ヲ金五萬圓トシ、此ノ内木炭ヲ購入スルコト三千
圓ナリトセンニ、此商人ハ翌年六月五日ニ始メテ支出ノ請求ヲ爲シタリトセハ、此
ノ木炭ノ代金ハ過年度支出トシテ支出スヘキモノナリ。而シテ其ノ代金三千圓ハ
前記ノ廳費五萬圓中四萬五千圓タケ既ニ支出セラレ尙五千圓タケ不用トナリタ
ル金額アリトセハ、コレ前ノ規定ニ照シテ適法ノ處置ナリ。然ルニ若シ不用トナリ
シ金額二千圓ナルニ三千圓ノ過年度支出ヲ爲スコト、セハコレ違法ナリト云ハ
サルヘカラス。

第五 定額繰越

定額繰越トハ或ル年度ニ於テ或ル款項ニ付豫算定額ニ殘餘ヲ生シタル場合ニ
其ノ殘額ヲ翌年度ニ繰越シテ使用スルノ謂ナリ。而シテ此ノ定額繰越ノ場合ハ明
カニ年度特立ノ原則ノ例外ヲ爲スモノナレハ一定ノ必要止ムヲ得サル事項ニ限
定セサルヘカラス。會計法第二十一條二十二條ハ之ヲ規定シテ(1)豫算ニ於テ明許
シタルモノ(2)一年度内ニ終ルヘキ工事又ハ製造(3)繼續費トシテ總額ヲ定メタル
モノトセリ。而シテ第一ハ總豫算ノ説明中ニ記載セラル、ヲ常トシ議會ノ協賛ヲ
要ス。第二ハ工事又ハ製造ニ限ラル、故ニ物品ノ購入ハ此ノ適用ヲ受クルコト能
ハサルナリ。

第四編 特別會計論

第一章 總論

第一 特別會計ノ意義

會計法第三十條ニ曰ク
特別ノ須要ニ因リ本法ニ準據シ難キモノアルトキハ特別會計ヲ設置スルコト
ヲ得

ト。即チ特別會計トハ事項又ハ地域ニ依リ特別ノ經濟ヲ爲サシムルカ爲メ一般會計ヨリ分離シテ獨立ノ會計ヲ爲サシムルカ爲メニ設ケタルモノヲ云フ。之ヲ以テ

(1) 特別會計ハ一般會計ニ對シテ殊特ノ必要アル場合ニ例外的ニ設ケラレタルモノナリ。蓋シ特別會計ノ制度ハ財政ノ統一主義ノ行ハル、ニ及ヒ漸次其ノ範圍ヲ減縮スルニ至リタルモノニシテ、往時ニ於テハ一國ノ財政ハ寧ロ數多ノ特別會計ニ依リテ組織セラル、ノ有様ナリキ。何トナレハ古代ニ於テ一ノ新タナル財源ヲ起スハ常ニ或ル新目的ノ爲ニ提供セラレタレハナリ。然ルニ現今ニ於テハ國家ノ收入ハ凡テ一ノ歳入トシテ取扱ハレ國家ノ支出モ亦一般ノ歳出トシテ仕拂ハル、モノニシテ或ル收入ヲ引キ當テトシタル支出ノ方法ハ唯例外トシテ認めラル、ノミ。

(2) 特別會計ヲ設置シタルヲ以テ國庫ヲ數個ニ分割シタリト説解スヘカラス。特別會計ヲ設置シタレハトテ國庫統一主義ハ破レタルモノニアラス。特別會計ヲ立ツルトハ計劃上若クハ帳簿上ニ於テ一般會計ト區別シテ整理ヲ爲スコトヲ意味ス。其ノ現金ノ取扱ニ付テハ一般會計タルト特別會計タルトヲ問ハス、一ノ國庫ニ收入セラレ又國庫ヨリ仕拂ハル、ヲ得。現金ニ付テコレハ一般會計ニ屬スル現

金ナリ、コレハ特別會計ニ屬スル現金ナリトシテ相互ノ使用ヲ制限スルモノニアラサルコトニ注意スヘシ。然レトモ國庫ニ於テモ整理ノ必要上帳簿ノ上ニ於テ兩者ヲ分ツコトハ勿論ナリトス。

(3) 現今特別會計ヲ一般會計ヨリ分離シテ一ノ經濟ヲ爲サシムルハ、殊特ノ必要ニ依ルモノニシテ、之ヲ設置スルニハ最モ慎重ノ用意ヲ要スルモノトス。故ニ特別會計ノ設置ハ常ニ法律ヲ以テシ議會ノ協賛ヲ經ルコトヲ要スルモノトセリ。今其ノ殊特ノ必要アル場合ヲ擧クレハ、

(甲) 作業上ノ理由ナリ。蓋シ國家ハ其ノ收入ヲ得ルノ財源トシテ官業ヲ經營スルコトアリ。此ノ場合ニ於テ其ノ作業ハ最モ經濟的ニシテ收入ハ優ニ支出ヲ補ヒ得テ多大ノ剩餘アルコトヲ要ス。而シテ之カ爲メニハ特別會計ノ制度ニ依リ其ノ收支及ヒ益金ノ高ヲ一見シテ見易カラシムルヲ便利トスルコトアリ。

(乙) 財政上ノ理由ナリ。前者ノ如ク作業ヲ營ムニアラサルモ其ノ收入若ハ支出ハ一定ノ目的ヲ有シ此ノ目的以外ニ使用スルヲ嚴禁スヘキ場合トス。

(丙) 政治上ノ理由ニシテ、成ルヘク政治上紛争ノ原因トナルモノヲ一般會計ヨリ分離セシメテ獨立セシメントスルニ在リ。又同シク政治上ノ理由ナルモ特ニ

或ル政策經營ノ手段トシテ此ノ方法ニ依ルコトナキニアラス。

(丁) 行政上ノ理由ニシテ、或ル新附ノ行政區劃カ固有ノ本國ト其ノ事情ヲ異ニスルカ爲メ其ノ行政ノ管理上特ニ特別會計ヲ設クルモノアリ。

(4) 尙ホ最後ニ注意スヘキハ特別會計ト一般會計トノ關係ナリ。兩者ノ關係ハ特別會計ノ性質ニ依リテ一樣ニアラス。即チ作業特別會計ナルトキハ特別會計ハ一般會計ニ歳入ヲ送與ス。是レ即チ益金ニシテ一般會計ノ歳入ニ繰入セラル、モノナリ。然ルニ其ノ他ノモノニアリテハ特別會計ノ一般會計ニ對スル關係ハ其ノ揆ヲ一ニセス。然リ而シテ此ノ一般會計ト特別會計トノ間ニ於ケル繰入ハ國庫統一主義ノ結果トシテ現金カ一方ヨリ他方ニ場所ヲ變更スルモノニアラスシテ唯帳簿ノ上ニ於テ一方ヨリ他方ニ移轉セシムルノミ、之ヲ稱シテ「移換」ト云フ。

第二 特別會計ノ沿革及現狀

特別會計ハ明治二十二年二月十一日ニ公布セラレタル會計法第三十條ニ規定スル所ニシテ、特別ノ須要ニ依リ一般會計ノ規定ヲ適用シ難キモノニ限り之ヲ設置シ得ヘキコト、シ、而シテコレカ設置ハ法律ヲ以テ規定スヘキコト、セリ。然レトモ立法當時ノ豫期ハ特別會計ハ一般會計ノ例外トシテ止ムヲ得サル場合ニ設

クルモノナレハ、其ノ數ニ於テ僅ニ數個ヲ以テ足レリト爲シタルモノ、如シ。是レ總決算ノ添附文書トシテ特別會計々算書ヲ添フルヲ以テモ知ルコトヲ得ヘシ。蓋シ特別會計々算書ハ寧ロ各特別會計ノ添附文書トシテ提出スルヲ適當トスルモ、便宜上總決算ニ添附セシメタルナリ。若シモ立法ノ當時ニ於テ特別會計ノ數今日ノ如ク多キコトヲ豫期センカ、總決算ニ之ヲ添附スルモ、其ノ通覽ニ不便ナルト又特別會計ノ參考書トシテ必要ナルトヨリシテ必ラス各特別會計ノ添附文書ト爲シタルナラン。然ルニ事茲ニ出テサリシハ以テ立法ノ當時ニ於テ豫期セシ所ヲ知ルニ足ル。

然リ而シテ其ノ明治二十四年度ニ於テ設ケラレタル特別會計ノ數ハ三十一ニ達セリ。而シテ其ノ三分ノ二ハ官立學校及ヒ圖書館ヲ各一個ノ特別會計トシテ設ケタルモノニ屬ス。然ルニ爾後年ヲ經ルニ從ヒ特別會計ノ數ハ益増加スルニ至リ、三十一年度ニ於テハ其數四十トナリ、三十四年度ニ於テハ五十二トナリ、四十年年度ニ於テハ實ニ六十ヲ以テ數フルニ至レリ。然ルニ同年ニ於テ官立學校圖書館特別會計法ノ公布アリ、從來各學校ハ各一ノ特別會計ヲ爲シタルヲ廢シ、之ヲ合併シタルノ結果其ノ數ハ減シテ三十餘個トナルニ至レリ。今日ニ於テ其ノ數三十四個ナ

今之ヲ豫算上ニ於ケル各省所管ニ付テ見ルニ

(1) 外務省所管 ニハ在外帝國專管居留地特別會計アリ、在清國天津、蘇州、漢口等ノ居留地ヲ經營センカ爲メ其ノ地所家屋ヲ拂下ケ、之ヲ以テ居留地ニ必要ナル設備ヲナスモノトス。

(2) 内務省所管 ニハ治水費資金特別會計アリ、是レ最近ニ公布アリタルモノナリ(四十四年三月法律第十四號)

(3) 大藏省所管 ニハ特別會計ノ數最モ多ク其ノ數十七個ニ達ス。而シテ其ノ内ニハ朝鮮總督府、臺灣總督府、關東都督府、樺太廳等ノ地域の特別會計アリ。何レモ新附ノ領土或ハ租借地ニシテ、其ノ財政ヲ成ルヘク經濟的ニ行ハシメンカ爲メ、各一ノ特別會計ヲ爲シ、其ノ地ニ於ケル租稅其ノ他ノ收入ノ外、政府ハ年々交附金ヲ爲シ(臺灣ニテハ最早之ヲ要セサルニ至レリ)之ニ依リテ經費ヲ支ヘシム。尤モ臺灣ノ如キハ補給金ヲ要セサルノミナラス、其ノ收入ハ支出ヲ補ヒテ優ニ剩餘ヲ生スルカ爲メ關稅收入ヲ擧ケテ一般會計ニ委スルニ至レリ。又作業ノ目的ヲ以テ設ケタルモノニハ專賣局、帝國鐵道、印刷局、造幣局、韓國森林等アリ。財政

上ノ目的ノ爲メニハ大藏省預金利子(所謂預金部ナリ)貨幣整理基金、國債整理基金、軍艦水雷艇補充基金、災害準備基金、教育基金等アリ、各一ノ特別會計ヲ爲スモノトス。但シ最後ノ三基金ノ如キハ其ノ名稱ノ上ヨリ見テ財政上ヨリモ他ノ目的ヲ有スルヲ知ルヘク、平時ニ於テハ其ノ名目通りニ使用セラレトモ、是レ一方ヨリ見レハ非常事變ノ場合ニ備フル一種ノ準備金タル性質ヲ有シ其ノ當初設立ノ目的ノ一半ハ茲ニ存シタルヲ以テ暫ラク財政上ノ特別會計中ニ數フルモノトス。

又預金部特別會計ハ明治二十三年法律第二十一號ノ規定スル所ニシテ、郵便貯金其ノ他一般ニ預金部ニ屬スル金額ハ日本銀行ヲシテ之レカ運用ヲ取扱ハシメ、其ノ利殖金ヲ以テ利子ノ仕拂ニアテ、殘餘アルトキハ更ニ之ヲ積立テ日本銀行ヲシテ運用セシメ以テ利子仕拂ノ準備ニ充ツルモノトス。

其ノ他貨幣整理基金ハ流通ヲ廢止シ又ハ流通ニ不便ナル貨幣ヲ引揚ケ交換スルカ爲メニ設クル所ニシテ地金代金ヲ以テ其ノ歲入ニ充ツ。又國債整理基金ハ國債償還ノ爲メ設クル所ニシテ、其ノ資金ハ毎年一般會計ヨリ繰入ル、モノトス。

- (4) 陸軍省所管 ニハ東京、大阪ノ各砲兵工廠、千住製絨所、陸軍營繕費補充基金ノ四特別會計アリ。前三者ハ何レモ供給的作業ヲ以テ其ノ目的トス。純然タル營利的作業ニアラサルハ勿論ナリ。後ニ説明スル所アルヘシ。
- (5) 海軍省所管 ニハ海軍工廠資金並ニ海軍探炭所ノ二特別會計アリ。共ニ供給的作業ノ目的ヲ以テ成ルト云ヒテ可ナリ。
- (6) 文部省所管 ニハ東京、京都、東北、九州ノ各帝國大學特別會計、直轄學校及圖書館特別會計並ニ帝國學士院獎勵金特別會計ノ六箇アリ。最後ノモノハ四十四年三月法律第三十八號ヲ以テ公布セラレタル所ナリトス。
- (7) 農商務省所管 ニハ製鐵所及ヒ森林資金ノ二箇アリ。森林資金特別會計トハ造林及森林ノ買上、國有林野ノ處分、國有林ノ實測等森林經營ノ爲メ特ニ一ノ會計ヲ設置セルモノトス。
- (8) 遞信省所管 ニハ一ノ電信燈臺用品製造所ノ一特別會計アリ。即チ各省ハ其ノ數ニ於テコソ相違スレトモ皆多少ノ特別會計ヲ有スルモノニシテ全ク之レナキハ唯一ノ司法省所管ノミトス。

第三 特別會計ノ分類

特別會計ハ斯クノ如ク其ノ種類多キヲ以テ種々ナル標準ヲ以テ之ヲ分類スルコトヲ得ヘシ。而シテ其ノ金額上ヨリ云フモ又其ノ性質上ヨリ云フモ最モ適當ナル二大區分ハ作業特別會計ト然ラサルモノトニ分ツニ在リ。

此ノ分類ニ從フトキハ、前述セル帝國鐵道、專賣局、製鐵所、造幣局、印刷局、砲兵工廠、海軍工廠等ハ即チ作業會計ニ屬ス。蓋シ作業會計ノ目的トスル所ハ政府自ラ最モ經濟的ニ官業ヲ營ムニ在リ。從テ收益ノ生スルコトハ自然ナリ。勿論茲ニ官業ト云フモ其ノ内ニハ二種類アリ

即チ左ノ如シ。

- (1) 純然タル營利事業
- (2) 半營利事業

第一ハ廣ク社會公衆ヲ相手トシテ利益ヲ得ントスルモノニシテ純然タル營利事業ニ屬ス。第二ハ專ラ又ハ主トシテ政府ノ仕事ヲ請負ヒ政府ノ便益ニ供スルト同時ニ其ノ報酬ヲ得テ利益ヲ得ントスルモノナリ故ニ之ヲ純然タル營利事業ト云フコト能ハス。專賣局、帝國鐵道、製鐵所等ハ即チ前者ノ例ニシテ、砲兵工廠、製絨所、印刷局、造幣局、海軍工廠及ヒ探炭所等ハ後者ニ屬ス。尤モ帝國鐵道ノ如キハ理論上

ヨリ云フトキハ其ノ性質上純然タル營利事業ニアラサルハ勿論ナリト雖モ廣ク公衆ヲ相手トシテ營業スルモノニシテ今日ノ狀態ヨリ見テ後者ノ内ニ入ル、コト能ハサルカ故ニ便宜上前者中ニ入ル、ナリ。

又作業特別會計ハ其ノ一般會計トノ關係ニ依リテ分ツトキハ、

- (1) 益金ヲ一般會計ニ繰入ル、モノ
- (2) 一般會計ヨリ補充金ヲ仰クモノ
- (3) 益金ヲ繰入レス又補充金ヲ仰カサルモノ

ノ三者ト爲スコトヲ得ヘシ。即チ前述セルカ如ク作業會計終局ノ目的ハ益金ヲ得ルコトニ在レトモ、其ノ進歩ノ程度如何ニヨリテハ以上ノ三者ニ分タル、ナリ。現今第一ニ屬スルモノニハ專賣局砲兵工廠印刷局ノ如キアリ第二ニ屬スルモノニハ製鐵所ノ如キアリ製鐵所ハ從來毎年補給ヲ仰キタレトモ最近ニ於テ始メテ利益ヲ擧ケ得タリト云フ、然レトモ繼續的ニ利益ヲ上ケ得ルヤ否ヤハ尙ホ將來ヲ待タサルヘカラス第三ニ屬スルモノニハ帝國鐵道ノ如キアリ。但シ之レハ毎年收益ナシトノ意味ニアラス、毎年收益ハアルモ、之レヲ一般會計ニ繰入ル、コトナキナリ。其ノ詳細ハ後ニ至リテ説明スヘシ。

最後ニ注意スヘキハ作業會計ニハ

- (1) 完全ナル作業會計
- (2) 完全ト云フ能ハサル作業會計

トノ二種アルコトナリ。其ノ完全ナルモノトハ作業上ニ要スル一切ノ費用ハ人件費タルト物件費タルト事業費ナルトヲ問ハス、凡テ其ノ歳入中ヨリ仕拂ヒ以テ其ノ剩餘ノ若干ナリヤヲ算出スルモノニシテ、作業會計ノ性質上大部分ノ之ニ屬スヘキハ當然ノコトナリ。然ルニ後者ニ屬スルモノハ其ノ經費全體ヲ歳入ヨリ控除シテ剩餘ヲ算出スルコトナク、經費中ノ或ルモノハ之ヲ一般會計ヨリ支出スルモノナリ。故ニ此等ノモノニアリテハ名ハ特別會計ト云フト雖モ決シテ完全ナルモノニアラス。例之彼ノ砲兵工廠ノ如キ俸給即チ之ニ從事スル官吏ノ俸給ハ之ヲ一般會計ノ陸軍省所管ヨリ支出シ特別會計ヨリ支出スル所ハ職工人夫ノ給料其ノ他作業費ニ止マルヲ以テ此ノ部類ニ入ルヘキモノトス。

- 次ニ作業特別會計ニ包含セラレサルモノニ至リテハ大別シテ
- (1) 専ラ財政上ノ目的ヲ有スルモノ
- (2) 財政上ノ目的ニノミ依ラサルモノ

トナスコトヲ得ヘシ。即チ國債整理基金、貨幣整理基金、並ニ預金部ノ利子ヲ特別會計トシタルハ專ラ財政上ノ目的ヲ達セントスルモノニシテ、臺灣關東州、樺太等ヲ特別會計トシ、大學、直轄學校及ヒ圖書館ヲ特別會計トシ、在外專管居留地、森林資金等ヲ特別會計トシタルカ如キハ他ノ行政上又ハ政治上ノ目的ヲ有スルモノトス。勿論特別會計ヲ設置シタル以上ハ其ノ如何ナル種類ヲ問ハス凡テ一方ヨリ見レハ其ノ收支ヲ經濟的ニシテ財政上ノ目的ヲ達セントスルモノナレトモ、其ノ終局ノ目的ニ至リテハ異ナレリト云フヲ得ヘシ。而シテ此等ノモノニ在テモ作業會計ノ如ク一般會計トノ關係ニ由テ

- (1) 年々一般會計ヨリ補充ヲ受クルモノト
- (2) 補充ヲ受クルコトナキモノ

トニ分ツコトヲ得ヘシ。唯作業會計ノ如ク一般會計ニ益金ヲ繰入ル、モノヲ缺クハ其ノ性質上當然ノコトナリ。

然リ而シテ今此等ノモノヲ以テ作業特別會計ニ比較シテ觀察スルニ、作業特別會計ハ收益ニ重キヲオキ、從テ歲入ニ重キヲオクニ反シ、此等ノモノニ在テハ收益ヲ以テ目的トスルモノニアラス。其ノ歲入ハ豫メ一定セルモノアリ、又豫メ一定セ

サルモ自然ノ增收ニヨルノ外強テ之レカ増加ヲ計ラントスルモノニアラス。而シテ其ノ重キヲオク所ハ主トシテ經費ニ存スルモノトス。之レヲ要スルニ、作業特別會計ニ在リテハ經費以上ニ收入ヲ増加セントスルモノナリ。經費ヲ目當トシテ收入ノ増加ヲ計ルル目トス。作業會計ニアラサルモノニ在テハ、收入支出相當レハ可ナリ、收入ヲ目當トシテ其ノ範圍内ニテ經費ノ使用方法ヲ講スルモノナリ。

第四 特別會計ノ資金

一般ニ特別會計ハ、年々一般會計ヨリ補充金ヲ受クルト否トヲ問ハス、資金ヲ有スルヲ常トス。之レヲ各特別會計ノ法規ニ觀ルニ資金ナル文字ヲ用フルモノト基金ナル文字ヲ用フルモノトアレトモ、兩者ノ間ニ性質上ノ區別アルモノニアラス。唯通常其ノ金額多クシテ事態ノ重大ナルモノ基金ノ名稱ヲ附スルニ止マルモノ、如シ(一般的ニイフ能ハサルハ勿論ナルモ)而シテ此ノ資金タルヤ特別會計ノ基礎トナルモノニシテ、此ノ資金ノ運用ニ依リ特別會計ハ茲ニ收入ヲ得テ以テ其ノ支出ニ應スルコトヲ得ヘシ。特別會計ニシテ資金又ハ基金ノ名稱アルモノヲ所有セサルハ唯地域の特別會計即チ臺灣ノ如キ樺太ノ如キモノニ限ラル。此等ニ在リテハ其ノ地域内ニ於テ自ラ租稅其ノ他ノ收入ヲ得ルヲ以テ特ニ資金ヲオキテ之

ヨリ生スル収入ヲ得ルノ必要ナキモノトス。
 資金ハ其ノ文字ノ上ヨリ見レハ單ニ金錢ニ限ラル、如キモ然ラス。資金ハ金錢
 其ノ他ノ財産權ヲ包含ス。例之帝國大學特別會計法第三條ニ
 各帝國大學ノ資金ハ政府ヨリ交付シ又ハ他ヨリ寄附シタル動産及不動産並ニ
 歳入剩餘ヨリ成ル

ト云ヘル如キハ其ノ一例ナリ。然レトモ普通ノ場合ニ於テ資金ノ多クカ現金ナル
 コトハ疑ヲ入レス。而シテ此ノ資金ハ其ノ特別會計存立ノ基礎ヲ成スモノナレハ
 妄リニ之ヲ費消スルコトヲ得サルハ言ヲ俟タス。唯國債整理基金ノ如ク基金ヲ使
 用スルコトカ即チ特別會計ヲ設置シタル目的ナル場合ハ此ノ例外ニ屬ス。

資金ハ作業特別會計ニ於テハ之ヲ「資本」ト云フ。資本ハ之レヲ分チテ(1)固定資本
 ト(2)据置運轉資本トニ爲スヲ常トス。固定資本トハ土地、建物、鐵道、列車、機械工場ノ
 如キモノニシテ、作業ノ經過ニ於テ自然的ニ毀損スル場合ヲ除キ變形スルコトナ
 キモノナリ。然ルニ据置運轉資本ニ在リテハ始メ金錢ノ形ヲ以テ現ハル、モ、或ハ
 原料トナリ、或ハ生産品トナリ更ニ現金トナリ、其ノ變形常ナク轉々スルモノナリ
 故ニ据置運轉資本ハ例之一百萬圓トスルモ一ケ年ニハ數回轉々シテ種々ノ形ヲ

以テアラハレ、以テ數百萬圓ノ資本ヲ一回運轉シタルヨリモ更ニ有效ナル結果ヲ
 奏セシムルコトヲ得ヘシ。鐵道ニ關シテハ「用品資金」ナル文字ヲ用フレトモ、コレ亦
 運轉資本ニ屬スルモノナルコトハ其ノ内容ニ於テ知ルヲ得ヘシ。

第二 特別會計ノ豫算

第一 一般會計トノ關係

特別會計ノ豫算ニ於テ一般會計トノ關係ハ、之ヲ分チテ

- (1) 特別會計ヨリ一般會計ニ繰入ル、モノ
 - (2) 一般會計ヨリ特別會計ニ繰入ル、モノ
- トニ爲スコトヲ得ヘシ。而シテ前者ハ更ニ之ヲ分チテ

(甲) 益金トシテ繰入ル、モノ

(乙) 特別會計ノ歳出ノ支拂ヲ爲スカタメ繰入ル、モノ

トノ別アリ。此ノ益金トシテ繰入ル、モノハ即チ作業特別會計ニシテ一般會計ノ
 經常歳入ハ專賣局益金、印刷局益金等ノ名ヲ以テ現ハル、モノトス。然ルニ特別會
 計ノ歳出ノ支拂ヲ爲スタメ其ノ金額ヲ一般會計ノ歳入ニ繰入レ、更ニ一般會計ノ

歳出トシテ拂出スモノアリ。コレ作業特別會計以外ノモノニ於テ見ル所ニシテ、多ク一般會計ノ臨時歳入ニ現ハル、モノトス。即チ森林資金、軍艦水雷艇補充基金、貨幣整理資金、學校及圖書館資金ノ歳出ノ全部又ハ一部ニ於テ一般會計ノ歳出トスルヲ正當トスルモノニ限ラル。例之、森林資金特別會計ニ於テ林野經營ノタメ資金ヲ使用セントスルトキハ、該特別會計ノ歳出ニ於テ、歳入臨時部繰入ナル款ヲ設ケ此ノ金額ハ其ノ名稱ノ示スカ如ク一般會計ノ歳入臨時部ニ、森林資金繰入ナル一欸トシテ現ハル。而シテ一般會計ノ歳出ニ於テ之ニ對スル金額ハ、國有林野經營費トシテ使用セラル、モノトス。

蓋シ此ノ方法タルヤ、豫算上其ノ手續頗ル煩雜ナルガ、何ノ必要ニ依リテ斯クノ如キ方法ニ依ルカト云フニ、是レ特別會計ヲシテ一方ニハ一般會計以外ニ獨立セシムルト同時ニ他ノ一方ニ於テハ特別會計ヲシテ一般會計ト聯絡ヲ保タシメ、所謂純然タル複豫算制ヲ避ケシメントスルニ在ルナリ。何トナレハ若シモ前例ニ於テ林野經營費ヲ一般會計ニ繰入ル、コトナク、森林資金特別會計ノ歳出トシテ直ニ使用スルコト、センカ、一般會計或ハ總豫算ハ一國財政ノ總覽タル性質ヲ全然失フコト、ナリ、一國ノ歳計ハ常ニ一般會計ト特別會計トヲ通算スルニアラスン

ハ知ルコト能ハサルコト、ナル。然ルニ以上ノ如キ方法ヲ採ルトキハ前述ノ歳出ハ一方ニ特別會計ノ歳出タルト同時ニ、一方ニハ一般會計ノ歳出トシテ現ハレ、一般會計ハ斯クノ如キモノヲモ包含スルコト、ナリ、所謂財政ノ總覽タル性質ヲ保ツコトヲ得ヘシ。勿論特別會計ニ於ケル歳出ノ全部カ一般會計ノ歳出トシテ現ハル、モノニアラサルコトハ、作業特別會計ニ於テ其ノ益金ヲノミ一般會計ニ繰入ル、ニ依リテ明白ニシテ、又作業會計ニアラサルモノモ必ラスシモ歳出ノ全部ヲ一般會計ノ歳出トシテ拂出スモノニアラスト雖モ、畢竟以上ノ規定ノ趣意ハ特別會計ヲ設ケタル趣意ヲ没却セサル範圍内ニ於テ成ルヘク複豫算制ノ缺點ヲ避ケ一般會計ヲシテ財政ノ大部分ヲ包含セシメントスルニ在ルモノトス。

次ニ一般會計ヨリ特別會計ニ繰入ル、場合ハ第一ニ作業特別會計ニ於テ損失ヲ免レサルコトカ豫定セラレタルトキニ於テ之ヲ見ル。即チ製鐵所ノ如キハ近頃マテノ状態ニ於テハ此ノ部類ニ屬スルモノトス。又作業特別會計ニアラサルモ彼ノ地域の特別會計即チ朝鮮關東州ノ如キ其ノ固有ノ收入ヲ以テ支出ヲ支フルコト能ハサルトキハ一般會計ノ補助ヲ待タサルヘカラス。臺灣ノ如キマタ此ノ状態ノ下ニアリシモ、今ヤ其ノ收入ハ以テ支出ヲ補フテ餘リアルニ至レルカ故ニ、臺灣

ニ於ケル關稅ハ之ヲ臺灣特別會計ノ收入トナサスシテ、本國即チ一般會計ノ收入トナスヲ得ルノ狀況ニ達セリ。又帝國大學特別會計、直轄學校及圖書館特別會計ノ如キ、原則トシテハ其ノ固有ノ資金ノ所得ヲ以テ其ノ歳出ヲ支フヘキモノナレトモ、現今ノ狀態ニ於テハ到底此ノ理想ヲ實現セシムルコト能ハス。然レトモ此ノ理想ニ達スルノ途ヲ講スルコトハ財政上必要ノ事柄ニ屬スルヲ以テ、政府ハ去ル四十年ヲ以テ從來ノ法規ヲ改正シ、東京大學ニハ年々百三十萬圓、京都大學ニハ年々百萬圓ト云フカ如ク、一定ノ金額ヲ繰入レシメ、之ニ依リ資金收入ノ不足スル分ヲ補足シ、併セテ歳計剩餘ハ之ヲ資金ニ繰入レシメ、將來上述ノ主義ヲ事實トナサンコトヲ期シツ、アリ。又以上ノ外特別會計設置ノ目的ソノモノカ一般會計ヨリ一定ノ金額ヲ繰入レ整理ヲ爲スニ存スルコトアリ、即チ國債元金ノ償還及ヒ利子支拂ノ爲メニ國債整理基金特別會計ヲ設ケタルカ如キコレナリ。

斯クノ如ク一般會計ト特別會計トハ常ニ繰入關係ヲ生スルモノニシテ、又常ニ此ノコトナシトスルモ、其ノ基礎タル資金ニ至リテハ特別會計設置ノ當初ニ於テ一般會計ノ力ニ待チシモノ多シ。然レトモ我國現今ノ狀態ニ於テハ一般會計ト特別會計ト何等ノ交渉ヲ有セサルニ至リシモノアリ。而シテ其ノ顯著ナルモノハ、即チ

帝國鐵道特別會計ナリトス。

第二 帝國鐵道特別會計

元來我國ノ鐵道特別會計ハ明治二十三年ノ制定ニカ、ル「官設鐵道會計法」及ヒ「作業及鐵道會計規則」ノ下ニ存在セシモノニシテ、當時別ニ「作業會計法」並ニ「陸軍作業會計法」アリテ造幣局、印刷局、東京、大阪兩砲兵工廠、千住製絨所等、製鐵所、專賣局等モ加ハルニ適用セシモ、上述ノ會計規則ニ至リテハ以上ノ凡テノモノニ適用セラ

ル、ノ狀態ニシテ其ノ第四十一條ニ依レハ

作業所ハ受入ノ總額ヨリ拂出ノ總額ヲ控除シ殘餘アルトキハ作業ノ益金トシテ其事業ヲ營ミタル年度ノ一般ノ歳入ニ納付スヘシト規定セリ。

而シテ明治三十九年鐵道國有法ノ實施ト同時ニ國有鐵道ノ規模ハ頗ル膨大スルニ至リシヲ以テ上述ノ「官設鐵道會計法」ヲ廢止シ、帝國鐵道會計法ヲ制定シタルモ、彼ノ「作業及鐵道會計規則」ニ至リテハ之レカ適用ヲナスコト從前ニ異ルコトナク從テ一般會計トノ間ニ年々益金繰入ノ關係ヲ有シ又一方ニ於テハ鐵道ノ建設改良等ノタメ一般會計ノ負擔スル所少カラサリシナリ。

然ルニ四十二年ニ至リ從來ノ鐵道廳ハ鐵道院ト改稱セラレ内部ノ組織ヲ變更スルト同時ニ鐵道會計法ニ大改正ヲ施シ又新ニ鐵道會計規則ヲ設ケテ從來ノ「作業及鐵道會計規則」ノ羈絆ヲ脱スルコト、ナレリ。而シテ其ノ特色ノ著シキ點ハ從來ノ主義ヲ變シ鐵道特別會計ハ極端ナル特別會計トナリ全然一般會計ト絶縁スルニ至リシコトコレナリ。蓋シ從前ニ於テ鐵道益金トシテ一般會計ニ繰入セラレシ金額ハ年々ノ豫算ニ計上セラレ其ノ額頗ル巨額ニ上リシヲ以テ國家財政上鐵道ハ一ノ好財源ナリシカ如キ外觀ヲ呈セシモ我國ノ鐵道ハ將來建設スヘキ豫定線路頗ル多キノミナラス、從來布設シタル分モ改良ヲ施スヘキモノ少カラス即チ此等建設改良ニ要スル費用ハ頗ル巨額ニ亘レリ。而シテ從來一般會計ハ一方ニ於テ鐵道會計ヨリ年々益金ノ繰入ヲ爲サシメタルヲ以テ、上述ノ建設改良費ハ一方ニ於テ一般會計ノ負擔トナサ、ルヲ得スシテ、此ノ益金繰入ト建設改良費トヲ比較スルトキハ、現在及ヒ將來ニ於テ一般會計ハ鐵道ノタメ却テ負擔ノ方多キノ有様ニアリ。茲ニ於テカ政府ハ鐵道會計ヲ全然獨立ノモノタラシメ、特別會計トシテ十分ナル經營ヲ施サシムルト同時ニ、其ノ經費ハ凡テ其ノ負擔ニ歸セシムルコト、ナセリ。即チ「帝國鐵道會計法」第八條ニ於テ

收益勘定ニ於テ歲入總額ノ歲出總額ニ超過スル金額ヲ益金トシ積立金勘定ニ繰入ルヘキ金額ヲ控除シタル殘額ヲ資本勘定ニ繰入ルヘシト規定シ同第二條ニ於テ

帝國鐵道ノ建設及改良ニ要スル經費ハ鐵道益金ヲ以テ之ニ充ツ但シ鐵道益金不足ノ場合ニ於テ政府ハ本會計ノ負擔ニ於テ公債ヲ發行シ又ハ他ノ特別會計其ノ他ヨリ借入金ヲナスコトヲ得ト規定セル所以ナリトス。

第三 軍艦水雷艇補充基金ノ豫算計上法

尙ホ一言スヘキハ軍艦水雷艇補充基金ノ豫算計上法ナリ。以上舉クル所ノ特別會計法ハ一方ニ一般會計ヨリ特別會計ニ繰入ル、モノアリ、一方ニ特別會計ヨリ一般會計ニ繰入ル、モノアリ。又稀ニハ兩者ハ全然何等ノ關係ヲ有セサルモノアリ。然ルニ本基金特別會計ニ於テハ以上ノ兩者ヲ兼ネ有スルモノトス。即チ本基金會計ニ於テハ同基金特別會計法第三條ノ規定ニ依リ、明治三十七年以後艦艇製造費ノ一定セル遞減歩率即チ軍艦ニ在リテハ千分ノ三十九又ハ五十四、水雷艇ニ在テハ千分ノ六十五ニ相當スル金額ヲ毎年度一般會計ヨリ本基金ノ歲入ニ繰入ル

、モノトス。而シテ之ト同時ニ本基金ヲ以テ軍艦水雷艇ノ建設ニアテントスルニ
 ハ本會計ノ豫算ノ歳出部ニ其ノ金額ヲ計上シ、一般會計繰入金トナシ、之ニ對シテ
 一般會計ノ歳入ニハ「軍艦水雷艇基金ヨリ繰入金」ナル一款アリ。更ニ一般會計ノ歳
 出ニハ此ノ歳入金ニ對スル「艦艇製造費」ノ科目アリテ之レカ支出ノ途ニアツルモ
 ノトス。之レヲ要スルニ本基金特別會計ハ一般會計ト一樣ノ關係ヲ兼備シ互ニ繰
 入關係ヲ有スルモノナルカ故ニ一般會計ノ豫算即チ總豫算竝ニ本特別會計ノ豫
 算ヲ閱覽スルトキハ常ニ注意シテ兩者ヲ混同セザランコトヲ要ス。

第四 特別會計ノ豫算ノ種類

特別會計ノ豫算調製ノ任ニ當ル者ハ所管各省大臣ニシテ、之レヲ大藏大臣ニ送
 附シ閣議ヲ經テ決定スルコトハ總豫算ト何等ノ異ル所ナシ。而シテ總豫算ニ付テ
 各省大臣ハ豫メ各省豫定經費要求書ヲ作り總豫算ノ内容ヲ明示スルト同様ニ、特
 別會計ニ於テハ豫定計算書ヲ作り各特別會計ノ内容ヲ示スモノトス。而シテ其ノ
 調製ノ期日モ豫定經費要求書ト同様ニ八月三十一日マテトス。

特別會計豫算ノ形式ハ大體ニ於テ總豫算ト異ナル所ナシ。即チ一方ニ歳入アリ
 一方ニ歳出アルハ勿論其ノ歳入出ハ各經常臨時ニ分タル、ヲ常トス但シ特別會

計ノ種類ニ依リテハ經常臨時ニ細分スルニ及ハサルモノ少シトセス。又此ノ歳入
 出ハ共ニ款項ニ分タル、歳出ニ於ケル各項ハ互ニ流用スルコトヲ得サラシム

然リト雖モ特別會計ハモト其ノ資金ヲ以テ其ノ基礎トシ日常ノ收入支出ノ外
 ニ資金關係ニ於テ其受入ト拂出トヲ知ルノ必要ナルヲ常トス。從テ特別會計ノ豫
 算ハ一般會計ニオケルカ如ク單一豫算制ニ依ラサルモノモ少カラス。然レトモ凡
 テノ特別會計カ然リト云フニアラス。中ニハ其ノ收入支出トハ畢竟資金ノ收入ト
 支出トニ外ナラサルモノアリ。例之、國債整理基金特別會計ノ如キコレナリ。之ヲ以
 テ現行特別會計豫算ノ形式ハ分チテ

- (1) 單一豫算制ヲ採ルモノ
- (2) 複數豫算制ヲ採ルモノ

トニ爲スコトヲ得ヘシ。而シテ其ノ多數ノモノニ在テハ、尙ホ單一豫算制ヲ採ルヲ
 見ル。複數豫算制ヲ採ルモノハ主トシテ作業特別會計ニシテ作業特別會計ハ元來
 一ノ營業ナルヲ以テ恰モ民間ノ營利會社カ毎期末ニ損益計算表ノ外ニ貸借對照
 表又ハ財産目錄ヲ公表スルト同一理由ニ依リ、豫算ヲ分チテ(1)收益勘定ト(2)資本
 勘定トナスコトアルハ自然ノコトナリ。而シテ此ノ複數制度ハ近時新設又ハ改正

ニカ、ル作業特別會計ニ於テ一般ニ行ハル、ヲ例トスルカ如シ。即チ帝國鐵道ノ如キハ其ノ顯著ナルモノナリ。

帝國鐵道特別會計ニ於テハ其ノ會計法第五條ニ於テ

本會計ハ之レヲ資本勘定、收益勘定及ヒ積立金勘定ニ區分ス

ト規定セルヲ見ル。積立金勘定トハ年々鐵道益金ヨリ一定ノ額ヲ繰入レ、コレヲ以テ災害事變其ノ他豫期セサル歳入出ノ不足ニ對シ補填スルヲ以テ目的トスルモノニシテ同第九條ニ依レハ其ノ繰入金ハ毎年度鐵道益金ノ一割以內ナリトス。又收益勘定ノ歳入出ノ内容ニ付テ言ハ、其ノ歳入ハ營業上ノ收入及ヒ附屬雜收入ニシテ、其ノ歳出ハ事務員、技術員ノ俸給、諸給、旅費、職工人夫ノ賃錢、材料ノ購入代、作業上ノ備品及ヒ消耗費、建物ノ築造、器具機械類ノ維持、修理及ヒ補充費等トス。但シ砲兵工廠ニ於テハ其ノ歳出ニ官吏ノ俸給等ヲ包含セスシテ、其ノ計上法不完全ナルコトハ曾テ述ヘタルカ如シ。而シテ此ノ收益勘定ハ單一豫算制ヲ採レル作業會計ノ豫算ニ該當スルモノナリ。又資本勘定ノ歳入出ノ内容ニ付テ曰ハ營業上ノ益金繰入、公債募集金、借入金、所屬財產賣拂代金等ハ其ノ歳入ニシテ、建設改良費、負債償還金等ハ其ノ歳出ニ屬ス。而シテ茲ニ注意スヘキハ資本勘定ノ豫算ハ唯其ノ

歳入出ヲ計上セルノミニシテ、其ノ資本ノ全體ヲ示セルモノニアラサルコトコレナリ、其ノ資本ノ状態ニ至リテハ別ニ豫算ノ添附文書ニ記載スルモノトス。

複數豫算制ヲ採ルモノハ以上ノ作業會計ヲ除クノ外例之帝國大學並ニ直轄學校及圖書館特別會計等ニモコレアリ此等ノモノニアリテハ固ヨリ營利ヲ以テ其ノ目的トスルモノニアラサルモ其ノ資金ヲ増加シ獨立ノ實ヲ擧ケンコトハ其ノ目的トスル所ナルカ故ニ、明治四十年ニ法律ノ改正ヲナスト同時ニ豫算ノ形式ヲモ改正シ、其ノ豫算ハ單一歳入出豫算ト稱スルモノト、資金部歳入出豫算ト稱スルモノトノ二者ニ分タル、コト、ナレリ。

第五 特別會計豫算ノ添附文書

既ニ總豫算ニ付テモ其ノ内容ヲ明カニシ且豫算議定ノ參考ニ供センカ爲メ豫算經費要求書並ニ現計々算書等ヲ添附スルコトヲ述ヘタリ。之レト同様ニ特別會計ノ豫算ニ於テモ其ノ内容ヲ明カナラシメンカ爲メ豫定計算書ヲ添附スヘキコトハ凡テノ特別會計ヲ通シテ例外ナシ。而シテ此ノ豫定計算書ハ款項ヲ更ニ目ニ區分シ一々其ノ用途ト金額トヲ掲載スルモノトス。

然ルニ右ノ外尚ホ添附文書ヲ附スヘキヤ否ヤニ付テハ、特別會計ノ性質ニ依リ

テ一様ナラス。即チ作業特別會計ニ在リテハ更ニ添附文書ヲ要スルモ、其ノ然ラサルモノニ在リテハ一般ニ之ヲ要セサルモノトス。而シテ作業會計ニ於テモ作業會計法又ハ作業會計規則ノ適用ヲ受クルモノ、即チ造幣局、印刷局、製鐵所、砲兵工廠、海軍工廠、專賣局等ニ在リテハ前年度ノ受拂勘定表及ヒ固定資本價格増減表ヲ添附スルモノトシ、帝國鐵道ニアリテハ前年度ノ貸借對照表、損益計算表、資本及固定財產價格増減表ヲ添附スルモノトス。

受拂勘定表トハ其ノ年度ニオケル一切ノ權利義務ヲ掲載セルモノニシテ、其ノ權利ニ屬スル事項ハ受入ノ部ニ記入セラレ、義務ニ屬スル事項ハ拂出ノ部ニ記入セラレ、モノトス。即チ受入ニ屬スルモノハ「歲入」トシテ徵收額(收入濟額ナルト未濟額ナルトヲ問ハス)据置運轉資本ニ屬スル現金ノ持越高(以上現金勘定)生産品材料等ノ價格、機械、作業場用品等ノ價格、代價支出濟、未收入物品ノ價格(以上物品勘定)アリ、拂出ニ屬スルモノハ「歲出」トシテ支出額(支出濟ニ屬スルト然ラサルトヲ問ハス)据置運轉資本額以上現金勘定賣拂物品ノ價格、代價ノ收入濟ナルト否トヲ問ハス(消費シタル材料機械運轉用品ノ價格、損失ニ歸シタル物品ノ代價(以上物品勘定)トス。故ニ受入ノ總額ヨリ拂出ノ總額ヲ控除シ尙ホ殘餘アルトキハコレ作業益金

タリ、又受入總額ヨリモ拂出總額ノ方多キトキハ、コレ其作業ハ損失ヲ生シタルモノナリ。斯クノ如ク前年度ノ受拂勘定表ハ其ノ作業ノ状態ヲ知ラシムルニ最モ適當ナルモノニシテ、彼ノ資本勘定ト収益勘定トヲ合一シテ、其ノ年度ニオケル作業會計ノ一切ノ權利義務ヲ網羅シタルモノト云フヘシ。次ニ「固定資本價格増減表」ハ殊ニ土地、建物、船舶、機械器具等ノ年度ノ始メニオケル價格ト年度ノ終リニオケル價格トヲ表記シ、其ノ増減ト増減ノ理由トヲ示スモノトス。

第三章 特別會計ノ現計

第一 特別會計ニ關スル法規

特別會計ヲ設置スルトキハ各一ノ特別會計法(又ハ特別會計規則)ヲ公布スルヲ以テ原則トス。然レトモ作業特別會計ニ於テハ其ノ性質上各一ノ特別法規ノ存在ヲ必要トセサルモノアリ。之レヲ以テ一ノ會計法又ハ會計規則ハ數箇ノ特別會計ニ適用セラレ、モノアリ。以下少シク之ニ付テ述フヘシ。

- (1) 明治二十三年ニ制定セラレタル「作業會計法」ニ在リテハ、其ノ適用ヲ受クルモノハ現今ニ於テハ造幣局、印刷局、製鐵所、專賣局、電信燈臺用品製造所、海軍採炭

所ノ六特別會計アリ。又陸海軍作業會計ニ付テハ各特殊ノ法律ヲ以テ定ムルヲ常トス。即チ

(2) 「陸軍作業會計法」ハ東京及ヒ大阪ノ砲兵工廠、千住製絨所等ニ適用セラレ、其ノ制定ハ同シク明治二十三年ニ屬ス。蓋シ其ノ性質上ヨリ云ヘハ、殆ント前者ト區別スルノ必要ナキニ關セズ、別箇ノ法律ヲ以テ制定シタル主ナル原因ハ、其ノ歳入出カ會テ説明シタルカ如ク普通ノ作業會計ト其ノ範圍ヲ異ニスレハナリ。然レトモ其ノ範圍ヲ狭メ歳出ノ全部ヲ包含セシメサルコトハ本來宜シキヲ得タルモノニアラス、唯制定當時ノ事情ニ鑑ミテ不完全ナルコトヲ知リナカラモ此ノ制度ヲ採リシモノナレハ若シモ將來ニ於テ之レカ改正ヲ施シタランニハ、或ル些細ナル法文ヲ除キテ殆ント同一トナルヘシ。

(3) 海軍ニアリテハ元來明治三十三年ニ制定セル「海軍造兵材料資金特別會計法」アリテ、恰カモ陸軍ニオケル砲兵工廠ノ如キ働キヲナセリ、而シテ明治三十八年ニ及ヒ帝國海軍ノ擴張ニ伴ヒ其ノ規模ヲ擴張シ其ノ完備ヲ期センカタメ、之ニ代フルニ「海軍工廠資金特別會計法」ヲ以テセリ。

(4) 又帝國鐵道ニ付テハ明治二十三年ニ「官設鐵道會計法」ノ制定アリ、然ルニ前

述スルカ如ク三十九年ニ及ヒ鐵道國有法實施ノ結果トシテ之ニ代フルニ「帝國鐵道會計法」ヲ以テシ、四十二年ニ至リ更ニ之ニ大改正ヲ加ヘタルモノナリ。

以上述フル所ハ作業特別會計ノ原則ヲ示ス所ノ「會計法」ニ屬ス、然ラハ其ノ會計法ノ内容ニ亘リ詳細ナル規定ヲ定ムル所ノ「會計規則」ハ如何ト云フニ、其ノ適用ノ範圍ハ勿論原則トシテハ會計法ト一致スヘキモノナルモ、實際上必ラスシモ然ラサルナリ。即チ「作業及鐵道會計規則」ナルモノハ明治二十三年ヲ以テ彼ノ作業會計法又ハ官設鐵道會計法ト前後シテ制定セラレタルモノニシテ、其ノ適用ノ範圍ハ頗ル廣クシテ、管ニ作業會計法ヲ適用スル各特別會計ニ及フノミナラス、官設鐵道特別會計ニモ適用セラレ、又陸軍作業會計法ヲ適用スル陸軍部内ノ各特別會計ニモ適用セラレタリ。又海軍造兵材料資金特別會計ノ設置セラル、ヤ又大體ニ於テ之ヲ準用スルコト、ナレリ。然レトモ爾後其ノ適用ニツキ變動屢々起リ專賣局ハ作業會計法ノ適用ヲ受クルニ關セス、會計規則ニ付テハ自ラ一ノ會計規則ヲ有シ帝國鐵道ノ如キハ同特別會計法ノ改正以來其ノ適用ヲ受ケサルコト、ナレリ。從テ其ノ名稱ノ如キモ從來「作業及鐵道」ト云ヘルヲ改メテ單ニ「作業會計規則」トナシタリ。而シテ專賣局ニハ「專賣局作業會計規則」アリ、帝國鐵道ニハ「帝國鐵道會計規則」

アリ、又海軍工廠ニハ、海軍工廠資金會計規則ノ現ニ行ハル、ヲ見ル。
第二 仕拂元金

特別會計ノ實際ノ支出ハ一般會計ト同シク豫算定額ニ依リテ制限ヲ受ケ、其ノ
款項ニ定メタル金額ヲ超過スル能ハサルハ論ナキ所ナリ。而シテ此ノ豫算定額ヲ
超過セサル範圍内ニ於テハ、一般會計ニ於テハ自由ニ支出ヲ爲シ得ルモノニシテ
大藏大臣ハ此ノ豫算定額内ニオケル支出額ニ對シ常ニ之レカ需用ヲ満足セサル
ヘカラス。コレ即チ大藏大臣ノ供給的職務ナリトス。然ルニ特別會計ニ於テハ現金
ノ支出ニツキ豫算定額ノ制限ヲ受クルノ外尙ホ一ノ制限ヲ受クルモノトス。コレ
即チ茲ニイフ所ノ「仕拂元受高」ナリ。

仕拂元受高トハ現金ノ存在高ノ謂ナリ。特別會計ニ於テハ現金ノ支出ハ豫算定
額以内ト雖モ現金ノ存在高ニ超過スルコトヲ得ス。蓋シ大藏大臣ハ供給的職分ヲ
有スト雖モ、此ノ職務ハ一般會計ニ止マルモノニシテ、現ニ特別會計トシテ一箇獨
立ノ會計ヲ設ケタル以上ハ其ノ所管大臣ハ特別會計ノ仕拂能力ニ依リ仕拂ヲ爲
サ、ルヘカラス。而シテタトヒ豫算上定額ハ規定セラル、モ此ノ現金支出ニ對ス
ル財源ハ常々ノ在リ高ヲ根據トセサルヘカラサルカ故ニ、特別會計ニ於テハ二重

ノ制限ヲ受クルモノト云ハサルヘカラス。即チ作業會計法第三條ニ於テ

各作業特別會計ノ歳出額ハ豫算定額内ニ於テ實際ノ歳入及据置運轉資本ノ合
計額ヲ超過スルヲ得ス

ト規定シ、作業會計規定第十三條ニ於テ

作業所ハ据置運轉資本ニ屬スル現金ノ持越高及當該年度ノ收入濟歳入額ヲ以
テ仕拂元受高トシ歳出ヲ支出スルハ此仕拂元受高ヲ超過スルコトヲ得ス

ト規定セル所以ニシテ實ニ特別會計ヲ通シテ一大原則トスル所ナリ。帝國鐵道會
計規則第八條帝國大學特別會計規則第十二條ノ規定モ亦同様ノ意味ナリ

第三 作業特別會計ノ資本

作業特別會計ニ於テハ其ノ受拂勘定表又ハ貸借對照表ノ固定資本増減表等ヲ
調製スルノ必要上資本ニハ凡テ價格ヲ付セサルヘカラス。而シテ其ノ價格ヲ付ス
ル方法ニ付テモ一定ノ規定アリテ之ニ違フコトヲ許サ、ルナリ。即チ

(1) 土地ニ在テハ近隣地ノ賣買價格五箇年間ノ平均ニ依ル。又新ニ購入シ又ハ
交換シタルトキハ購入價格又ハ交換價格ニ依ルモノトス。

(2) 建物鐵道船舶機械器具等ニ付テハ建築費又ハ購入價格ニ依ル材料及ヒ消

耗品費ノ如キモ又購入價格ニ依ル。

(3) 生産品ハ生産費ニ依リ賣買ノ契約濟トナリタルモノハ其賣渡代價ニ依ル。然リト雖モ資本ノ價格ハ固定的ノモノニアラスシテ常ニ變動スルモノナレハ相當ノ時期ニ於テ之ヲ改定スルコトヲ怠ルヘカラス。然ラズンハ其ノ價格ハ名義ニ止マリテ實際ニ副ハサルコト、ナルヘク、從テ受拂勘定表ト云ヒ貸借對照表ト云ヒ共ニ虛偽ノ報告表タルニ了ルヘキナリ。加之機械器具ノ如キモノハ年ヲ經ルニ從ヒ漸次其ノ價格ヲ減少シ、遂ニ全ク其ノ用ヲ爲サ、ルニ至ルヘキハ明瞭ノコトナルヲ以テ此ノ點ヲモ考ヘサルヘカラス。之ヲ以テ

- (1) 土地ノ價格ハ每五年ニ之ヲ改定スヘク。
- (2) 建物、鐵道、船舶、機械器具等ハ永遠保存品ヲ除キ凡テ保存期限ヲ定メ其ノ期限ニ應シテ毎年價格ヲ遞減スヘク其ノ不用ニ歸シタルモノハ凡テ價格ヲ削除シテ不用物品中ニ組入レ賣リ拂フコトヲ要ス。
- (3) 又固定物件ヲ修理シタルトキハ或ハ保存期限ヲ改定シ又ハ改定セスシテ修理費ヲ其ノ現年ノ價格ニ加フ。
- (4) 生産品又ハ消耗品ニシテ年内未販賣又ハ未消費ニ屬スル場合ニ於テ市價

ノ低落又ハ毀損變質等ニ依リ其ノ價格ヲ減シタルトキハ年度ノ終リニ於テ當時ノ市價ニ依リ其ノ價格ヲ改定セサルヘカラス。

第四 特別會計ノ金庫制度

既ニ述ヘタルカ如ク特別會計ヲ以テ一般會計ト區別スルハ、單ニ豫算現計等帳簿文書ノ上ニ於テ之レヲ區分シテ整理スルモノニシテ、特別會計ヲ設ケタレハトテ、國庫不可分ノ原則ニ例外ヲ來シ一般會計ノ金庫以外ニ特別會計ノ金庫ヲ設クルモノニアラス。特別會計ヲ設置スルモ其ノ現金ヲ出納保管スル所ノ金庫ハ常ニ唯一不可分ナル國庫ナリト知ルヘシ。然リ而シテ我國ハイハユル委托金庫制度ヲ採ルノ結果トシテ特別會計ニ關スル現金モ凡テ日本銀行ニオケル國庫部ノ保管スル所ナリ。

以上ノ主義ハ各特別會計ニ亘リテ一般ニ行ハル、所ナルカ、帝國鐵道特別會計ハ去ル明治四十二年ノ改正ニ依リ純然タル特別會計トシテ自ラ一切ノ經理ニ當ルコト、ナリタル結果トシテ鐵道所有ノ現金ハ凡テ利殖ノ途ヲ與フルコト、ナレリ即チ同法第十三條ニ依レハ

本會計ニ於テ仕拂上ノ餘裕アルトキハ預金部ニ預入レ其ノ他有利且確實ナル

方法ヲ以テ之ヲ運用スルコトヲ得

前項ノ運用ハ日本銀行ヲシテ之ヲ取扱ハシム

ト規定シ又同法第十四條ニハ

本會計所屬出納官吏ノ保管スル現金ニシテ金庫ニ委託サレタルモノニ付テハ相當ノ利子ヲ徴シテ日本銀行又ハ其ノ代理店ニ預ケ入ル、コトヲ得

ト規定セリ即チ此ノ規定ハ形式上ニ於テ現行金庫制度適用ノ下ニ在ルモノニシテ、利殖スルコトヲ得レハトテ、其ノ手段間接ナルヲ以テ金庫制度ヲ離レテ預金制度ヲ採用シタルモノト云フコト能ハス。然レトモ其ノ實際ノ效果ニ至リテハ明カニ利殖ノ途ヲ得テ預金制度ヲ布キタルニ同シキコト、ナルヘシ。之ヲ要スルニ帝國鐵道特別會計ニアリテハ形式上ニハ依然タル金庫制度ナレトモ、實體上ニハ預金制ヲ採ルモノト云フヘシ。

第五 預金部特別會計

(1) 會計法第一條ニ依レハ租稅及其ノ他一切ノ收納ヲ歲入トシ一切ノ經費ヲ歲出トスト規定スト雖モ是レ國庫ニ收受セラル、現金ハ凡テ國家ノ歲入ニシテ、國庫ヨリ出ル所ノモノハ凡テ國家ノ歲出ナリト云フコトヲ意味スルモノニアラ

ス。蓋シ國家ノ歲入ト云ヒ歲出ト云ヒテコレヲ豫算ニ表示シテ取扱ヲ爲ス所ノモノハ確實ニ國家ノ所有ニ歸セル現金ニ付テイフモノトス。タトヒ國庫ニ收受セラレ又ハ之レヨリ拂出サル、トモ假ニ一時占有ニ歸シタルノミニテ國家ノ確實ナル所有トナルニアラズンバ、以テ歲入出ノ名稱ヲ附スルコト能ハザルナリ。即チ彼ノ預金即チ郵便貯金ノ如キ現今其ノ額巨額ニ達セリト雖モ、理論上國家ノ歲入出ト云フコト能ハサルナリ。

然リト雖モ、預金其ノモノト預金ノ利子トハ固ヨリ同一視スヘカラス。預金其ノモノハ國家ノ歲入出ニアラストスルモ、預金利子即チ預金ニ對スル報酬トシテ仕拂ハレ又ハ受取ラルヘキ利子ニ至リテハ國家ノ歲出又ハ歲入ト稱スルニ少シモ不可ナルコトナシ。故ニ此ノ點ヨリシテ、預金會計即チ預金利子會計ハ其ノ一般會計ヲ以テ整理スルト特別會計ヲ以テ整理スルトヲ問ハス其ノ豫算ニ計上セラレ從テ現計上之ニ從テ取扱ヲナスヘキハ當然ノコトナリ。

然リ而シテ我國ニ於テ預金ノ整理ニ付テハ直チニ一般會計ニ包含セシメズ、特別整理ノ目的ヲ以テ一ノ特別會計ヲ設置シタルモノナリ。

(2) 預金部ト云フモ現實ニ一定ノ場所ヲ指スモノニアラスシテ國家ノ預リタ

ル一定ノ範圍ニ屬スル金額ノ爲ニ設置セル特別會計ノ意義ナリ。故ニ預金部ヲ設置スルモ現金ノ取扱ハ國庫ニ於テ爲サル、コト固ヨリ論ナキモノトス。而シテ其ノ預金部ニ於テ取扱フ所ノ金額ノ種類ハ法令ニ依リテ一定セルモノトス。即チ預金部特別會計法及預金規則ニ依ルトキハ郵便貯金、郵便爲替金、郵便取立金、社寺教會其ノ他人民ノ共有ニ係ル積立金ニシテ其ノ請願ニ係ルモノ等ニ限レリ。然レトモ預金部取扱金ハ之ニ止マラス、例之政府ニ於テ保管ノ義務ヲ有スル金額及ヒ法令ノ規定ニ依リ供托スル現金即チ保管金、供托金モ亦此ノ範圍内ニ在リ。加之彼ノ三基金即チ教育基金、災害準備基金、軍艦水雷艇補充基金ノ如キモ亦預金部ニ預入レ其ノ利子ヲ收ムルモノトス。殊ニ現行帝國鐵道會計法第十三條ニハ本會計ニ於テ仕拂上ノ餘裕アルトキハ預金部ニ預入レ其ノ他有利且確實ナル方法ヲ以テ之ヲ運用スルコトヲ得

トノ規定アリテ其ノ所有金ハ預金部ニ預入レ其ノ利子ヲ收ムルコトヲ得ルナリ。其ノ他變例ニ屬スルモノハ彼ノ南滿洲鐵道株式會社カ外國ニテ社債ヲ募集セルトキ、其ノ拂込金ハ別ニ國庫預金部ニ預入レ更ニ之ヲ振換拂出ノ手續ニ依リ滿鐵會社ニ仕拂フモノトス。監督上ヨリ採ル所ノ一方法ナリ。之ヲ要スルニ預金部ニ預

入セラル、金額ノ種類ハ一定ノ範圍ヲ有スルモノトス。

(3) 預金部カ斯クノ如ク受入レタル金額ニハ年々利子ノ仕拂ヲ爲スコトヲ要スルヲ以テ、預金部ハ此ノ受入金ヲ利用シテ更ニ他ヨリ利子ヲ得サルヘカラス。加之預金部ハ其ノ仕拂フヘキ利子ヲ差引キ、其ノ運用ニ依リテ更ニ若干ノ剩餘ヲ生スル様ニナスヲ以テ國家ニ有利ナリトス。故ニ預金部特別會計法第四條ニ依レハ預金ハ日本銀行ヲシテ之レカ運用利殖ヲ取扱ハシメ、其ノ利殖金ヲ以テ利子ノ仕拂ニ充テ殘餘アルトキハ利子仕拂元金トシテ之ヲ積立預金トシ、其ニ運用利殖スヘシ

トノ規定アル所以ナリ。而シテ預金部ノ利殖法ハ單ニ日本銀行ニ貸附ヲ爲スニ止マラス、有利ナル國債證券ヲ買ヒ入レ之ヲ保有スルコトアリ。然レトモ其ノ買ヒ入ニ付テハ同シク日本銀行ノ手ヲ經テ之ヲナスナリ。

(4) 次ニ預金部特別會計ト一般會計トノ關係ヲ説カンニ、預金部特別會計ノ歲出即チ預金ニ對シテ仕拂フヘキ利子ハ其ノ金額ヲ一般會計ノ歲入ニ繰入レ更ニ一般會計ノ歲出トシテ仕拂フベキモノトス。コレ既ニ述ヘタル如ク他ノ特別會計ニモ例ヲ見ル所ナリ。